

中折地内栗遺跡

福岡県筑後市大字中折地所在遺跡の埋蔵文化財調査

筑後市文化財報告書

第54集

2004

筑後市教育委員会

中折地内栗遺跡

福岡県筑後市大字中折地所在遺跡の埋蔵文化財調査



2004

筑後市教育委員会

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稲耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する中折地内栗遺跡は筑後市の南西部に位置し、筑後市が誕生する以前には「下妻村」の役場所在地でもありました。今回の発掘調査では中世、戦国時代の集落の一部が確認されました。当時の村落の姿を考える上で貴重な資料を提示してくれました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、各工事関係者、各関係機関、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成16年3月

筑後市教育委員会

教育長 城戸 一男

例 言

1. 本書は、工場建設に伴い、株式会社ハヤシの依頼を受けて、筑後市教育委員会社会教育課文化スポーツ係が平成14年度に大字中折地において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は立石真二が製作し、浄書を平塚あけみが行った。
3. 本書使用の遺物実測図は製作・浄書を平塚が行なった。
4. 本書使用の写真は立石が撮影した。なお、遺跡の気球写真は株式会社写真企画に依頼した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG.N.である。
6. 本書が使用した座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を使用している。
7. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。
8. 本書に掲載した遺物の縮尺は1/3を基本とする。
9. 本書の執筆は第2章3節本文を奥村太郎が、その他を立石が行なった。編集は立石が行なった。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目 次

第1章	調査経過と組織	1
1	調査に至る経過	
2	調査組織	
3	調査経過	
4	調査経過抄録	
第2章	位置と環境	7
1	地理的環境	
2	遺跡周辺の地理的環境	
3	歴史的環境	
第3章	調査成果	9
1	基本層序	
2	検出遺構	
3	出土遺物	
第4章	結語	51
付	表	54
Tab. 1	遺構一覧	
Tab. 2	掘立柱建物一覧	
Tab. 3	出土土器一覧	
Tab. 4	出土石器一覧	
Tab. 5	出土木器一覧	
図 版		

第1章 調査経過と組織

1 調査に至る経過

中折地内栗遺跡は福岡県筑後市大字中折地に所在する。ここは筑後市南西部の標高5mほどの平野部にあたり、米麦を中心とした二毛作が行なわれる豊かな穀倉地帯である。

平成9年、地権者より筑後市教育委員会社会教育課社会教育係（当時、現在は文化係を経て文化スポーツ係、以降「乙」とする）に対し、該当地区における埋蔵文化財の有無の照会がなされた。対象面積は5,828.6㎡である。「乙」はこれを受け平成9年9月18日から19日の2日間にかけ試掘調査を行ない、地表より0.9～1.5mのところまで溝状の遺構を確認、この結果を地権者に解答した。

平成13年8月、株式会社ハヤシ（以降「甲」とする）より「乙」に対し、工場建設に伴い埋蔵文化財に関する照会がなされた。「乙」は以前の試掘調査の結果をもって「甲」への回答とした。両者は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、発掘調査を行なう事で合意した。対象面積は約1,800㎡である。整理作業を含めた発掘調査の予定期間は、平成14年10月1日より平成15年12月31日までとした。



3 狐塚遺跡	84 津島南郷生遺跡1次	109 常用相割遺跡	137 水田上平堂石遺跡1次
12 上北島前田遺跡	85 水田杉ノ元遺跡1次	110 常用野々下遺跡	138 水田下平堂石遺跡
13 下北島久平遺跡	87 井田栗ノ内遺跡	111 津島南郷生遺跡2次	141 水田上仁良堂遺跡1次
19 梅島遺跡1次	90 常用日田行遺跡1次	112 水田伊勢ノ脇遺跡	143 水田上平堂石遺跡2次
23 下北島久南遺跡	93 常用長田遺跡1次	113 志野添遺跡	145 水田上仁良堂遺跡2次
24 梅島遺跡2次	95 常用日田行遺跡2次	114 津島南郷生遺跡	149 水田上平堂石遺跡3次
29 下北島榎崎遺跡	96 常用長田遺跡2次	117 折地長間寺遺跡	154 常用日田行遺跡3次
30 上北島花畑遺跡1次	98 水田下柳町遺跡	121 常用野中遺跡	159 常用ニラノ遺跡
31 水田山伏遺跡1次	100 古島榎崎遺跡1次	122 志下崎計遺跡1次	165 上北島花畑遺跡2次
46 水田山伏遺跡2次	102 津島西美田遺跡	123 井田堀越遺跡	166 上北島塚ノ手遺跡
51 古島相割遺跡	105 水田杉ノ元遺跡2次	127 井田下堀越遺跡	170 上北島篠島遺跡
68 常用ビンセ田遺跡	106 津島北石伏遺跡	131 志西田遺跡	182 中折地内栗遺跡
75 水田正吹遺跡	108 津島籠ノ町遺跡	136 古島榎崎遺跡3次	

Fig.1 中折地内栗遺跡 位置図 (S=1/25,000)

※上記遺跡の番号は当市が採用している発掘調査番号による

2 調査組織

中折地内栗道遺跡に関する調査組織は以下の通りである。

(1) 確認調査体制 (平成9年度)

調査主体	筑後市教育委員会		
教育長	森田 基之		
教育部長	津留 忠義		
社会教育課長	山口 逸郎		
社会教育係長	田中 清道		
文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	田中 剛 (確認調査担当)
	上村 英士 (6/1~)		
文化財学芸員	柴田 剛	上村 英士 (4/1~5/31)	立石 真二 (8/1~)

(2) 発掘調査体制 (平成14年度)

調査主体	筑後市教育委員会		
教育長	牟田口和良		
教育部長	下川 雅晴		
社会教育課長	松永盛四郎		
文化係長	成清 平和		
文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士
文化財学芸員	柴田 剛	立石 真二 (発掘調査担当)	

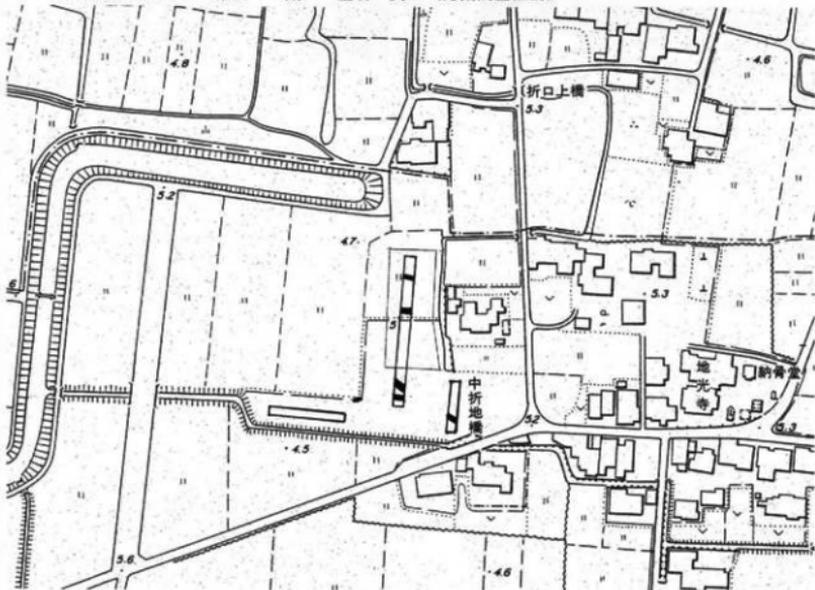


Fig. 2 中折地内栗道遺跡 試掘調査範囲位置図 (S=1/2,500)

調査作業	石橋香代美	今山三咲子	植田 勝子	江崎 末廣	江崎トシ子
	奥村 太郎	加藤ちえ子	川添 幸子	古賀 明美	古賀三ツ保
	近藤 澄子	城崎マスヨ	壇 幸恵	辻 名草	辻 勝
	富永八重子	富安 英子	中村 富男	平尾 仁子	深町 順子
	福島 浩純	松尾喜代美	本村 修一	渡辺 茂喜	
整理補助員	仲 文恵	平塚あけみ			
整理作業	妹川 玲子	佐々木寿代	野口 晴香	野間口靖子	湯川 琴美
	横井 理絵	福井 円			

(3) 整理事業体制 (平成15年度)

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	牟田口和良 (～9/30)				
	城戸 一男 (10/1～)				
教育部長	菘原 修				
社会教育課長	松永盛四郎				
文化スポーツ係長	成清 平和				
文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士		
文化財学芸員	立石 真二				
整理補助員	仲 文恵	平塚あけみ			
整理作業	佐々木寿代	野間口靖子	横井 理絵		



Fig. 3 中折地内渠遺跡 調査範囲位置図 (S = 1/2,500)

3 調査経過

当初、発掘調査を平成14年10月1日の予定で開始する事になっていたが、対象地を借り受けていた建設業者が運び込んでいた残土の撤去が遅れ、10月24日からの作業開始となった。当初は地表面を海拔5.5mと考えていたが、このレベルから0.8m程下がるところまで残土が積まれ、重機による遺構面までの掘り下げは11月11日までかかった。11月13日より作業員による作業を開始し、途中11月26日から12月5日までの間中断せざるをえなかったが、平成15年1月15日までに測量までを含む作業を終了した。同日に気球による空中写真の撮影を終え、翌16日には校区である下妻小学校の児童3年生から6年生までを対象とした現場説明会を実施した。埋め戻し作業は1月20日から2月4日まで重機により行なわれ、翌5日に開発関係者立ち会いのもと現場の引き渡しを行ない発掘調査の全日程を終了した。

4 調査経過抄録

14. 10. 22 大字古島より水準点移動（～23日まで）
10. 24 調査区設定
10. 25 重機搬入、盛り土の除去を開始（～11月11日まで）
11. 1 ユニットハウス、仮設トイレ搬入
11. 5 配電盤工事（～7日まで）
11. 12 資材搬入、光波測距儀による座標測量（国土調査法第Ⅱ座標系に拠る）
11. 13 作業員による調査作業開始
11. 14 S D001・S X010掘り下げ開始
11. 18 S X010より骨片が出土
11. 19 S D005掘り下げ開始、S X010より骨片・白磁C類出土
11. 20 S K015・S D020掘り下げ開始
11. 22 S K015土層断面より明染付を確認
11. 26 作業中断（～12. 5まで）
12. 6 作業再開
12. 10 北側柱穴群掘り下げ開始
12. 17 S D025～029（中央の東西方向の溝状遺構群）掘り下げ開始
12. 26 S D005、下位遺構の関係上土層断面D軸で出土遺物を分離、S D030掘り下げ開始
12. 29 年末年始休業（～15. 1. 5）
15. 1. 6 作業再開
1. 7 S E040、南側柱穴群掘り下げ開始
1. 14 S D035掘り下げ開始
1. 15 気球による空中写真撮影
1. 16 下妻小学校児童3年生～6年生現場説明会
1. 20 重機による調査区の埋め戻し開始（～2. 4まで）
1. 22 ユニットハウス、トイレ返却
2. 5 開発関係者立ち会いのもと、現場の引き渡し → 発掘作業終了

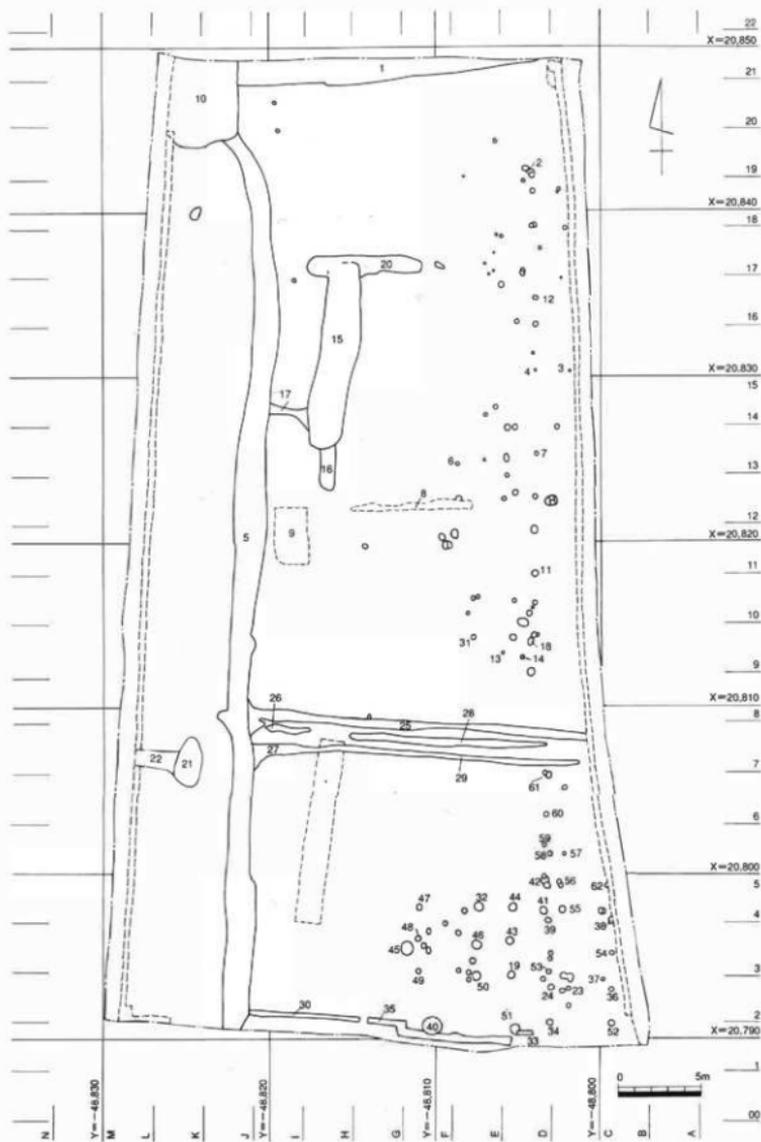


Fig. 4 中折地内架遺跡 遺構配置圖 (S=1/300)

なお、発掘調査および報告書作成に際し、株式会社ハヤシ、各工事関係者、各関係機関に多大な御協力を頂いた。また、下記の方々・各機関からは調査・整理作業に際し、貴重な御教示・御指導を頂いた。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

小田 和利、小川 泰樹（福岡県教育庁）、徳永 貞紹、白木原 宣（佐賀県教育庁）、山村 信榮、高橋 学、森田 レイ子（太宰府市教育委員会）、中村 渉（大牟田市教育委員会）、大田黒 保位

第2章 位置と環境

1 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

2 遺跡周辺の地理的環境

筑後市大字中折地は筑後市の西部に位置している。地勢的には筑後川水系花宗川の左岸に広がる標高5～7.5mの平野部で、主に米・麦の二毛作が盛んな水田地帯が広がる農業地域である。以前は筑紫平野を象徴するクレークが発達した、小区画の農地と狭い農道が入り組んだ地域であったが、筑後川下流域農業開発計画に基づく県営ほ場整備事業下妻地区（昭和50年～平成2年）、干拓地等農地整備事業筑後西部地区（昭和61年～平成7年）などの実施により、現在では近代的な農業経営に適した景観が広がっている。また、近年の農業形態の変化に伴い、イチゴや蔬菜などの栽培を行なうビニルハウスも見られるようになってきている。

3 歴史的環境

先史時代の遺跡については、周辺での旧石器時代の遺跡の確認報告は今の所はない。縄文時代についても同様である（註1）。弥生時代については水田杉ノ元遺跡（85・105）や水田山伏遺跡（31・46）弥生中期～後期の集落跡が（註2）、水田上平臺石遺跡（149）から弥生時代前期～中期初頭の支石墓が確認されている（註3）。

古代、当地は律令体制下で下妻郡に編成された。当時の条里区画はその一部が歴史地理学の立場から復元されている（註4）。また、南に位置する大字下妻には郡衙があったと考えられている（註5）。

中世、この地域は水田荘に属し、南に位置する下妻荘と共に筑前太宰府の天満宮安楽寺の支配下にあった。周辺の折地長間寺遺跡（117）や水田下桜町遺跡（98）からは当時の溝が（註6）、水田上仁業遺跡（141・145）からは井戸が確認されている（註7）。

近世の初期、下妻郡の領主は安定しなかったが、元和6年（1620）以降は久留米藩有馬氏の領地となった。歴史上中折地の地名が始めて出てくるのもこの頃である。有馬氏は庄屋・大庄屋の制度を設け、各農村の行政にあたらせた。享保7年（1722）、中折地村は大田黒氏が大庄屋となり、下妻郡19ヶ所村支配の中心として幕末まで栄えた。

明治22年（1889）、下妻村に編成され、中折地に村役場が置かれた。初代村長は最後の大庄屋、大田黒子之吉である。

（奥村 太郎）

註 中折地内業遺跡の周辺、特に遺跡の南・西部において、大規模なほ場整備事業が行なわれているにも関わらず遺跡の調査事例は少ない。これはこの地域の開発が、筑後市の歴史文化財に関する体制が成立する以前のものであることも関係するであろうが、福岡県の遺跡分布調査（1979年・昭和54年刊行）でも、この地域には歴史文化財は確認されていない状況であった。この状況は筑後市が近年行なった遺跡分布調査でもほぼ変更

されない所だが、このような状況はこの一部の遺跡が、地表面より1mを超える深さにあるため、地表面の観察のみでは不十分であることに起因するもので、今後の開発により新たに遺跡が発見される可能性が残されている。

- 1 常用地区の遺跡からは近年の整理作業の進展によって夜臼系の土器が出土していた事が明らかとなっているが、その所属時期については慎重にならざるを得ないため、ここでは提示していない。
- 2 この他にも水田地区の南に位置する常用地区、北に位置する古島地区・下北島において弥生時代の集落遺跡が確認されている。常用地区には常用日田行遺跡(弥生後期を中心とする集落遺跡、旧称常用遺跡、90・95・154)・梅島遺跡(弥生後期を中心とする集落遺跡、不定形周溝状遺構を多く検出、19・24)・常用長田遺跡(弥生時代全般の集落遺跡、93・96)、古島には古島榎崎遺跡(100・134・136)、下北島は下北島榎崎遺跡(29)・下北島久清遺跡(23)がある。水田地区はこの他に水田上平雲石遺跡第1次・第2次(137・143)、水田伊勢ノ輪遺跡(弥生後期、112)がある。
- 3 この地区には小字名の由来となった「平雲石」というテーブル状の石層片岩の巨石が所在し、「イボ神様」として地域住民から信仰の対象として祭られている。地元郷土史会の記録によると、この巨石を移動した際、この下から壘積が発見され、中から人骨および陶器石を4個出土したとの記録がある。この陶器石は現在、平雲石の下に埋納されている。また、巨石の一部が江戸時代に中折地八幡宮の境内に運ばれたという記述があり、この中支石墓がこの他にも数基存在したのではないかと指摘されている。筑後市教育委員会の調査は地盤整備事業に伴う形で行われ、以前平雲石が所在したと思われる場所から壘積を確認している(水田上平雲石遺跡第3次、149)。字平雲石の北側に位置する字居流には弥生時代の集落および壘積群が所在したという記録もみられる。地元の人々からの話によるとこれに隣接する筑後中学校(字上居流、留主)の建築工事の際、多くの壘積が発見されたが未調査のまま取り壊されたことであり、中学校敷地内の水田山伏遺跡第1次調査(31)では、平墳した壘積が発見されている。平雲石の南側、常用日田行遺跡、常用長田遺跡においてもいくつかの壘積が確認されている。
- 4 現在この地域の桑理復元については再考する動きもあり、明確に復元されているとは言えない。
- 5 郡衛が所在したと考えられている拠地としては、ここが下妻郡の遺跡地であり、小字名「群女」「蔵屋敷」「中道」の微高地をその所在地としている。ただし、これも案のひとつであり、郡衛の所在地を筑後市中部に比定する案も唱えられている。
- 6 この他に水田伊勢ノ輪遺跡でも同時期の溝を確認している。調査担当者はこれらを水田荘の土地区画に伴うものではないかと推論している。
- 7 水田上仁良集遺跡第1次調査検出の井戸は時期を特定しうる遺物の出土を伴わず、調査担当者の埋土観察による推察である。

【参考文献】

- | | | | |
|--------------|----------------------------|-------------------|------|
| 福岡県教育委員会・編 | 『福岡県遺跡等分布地図(大川市・筑後市・三漕郡編)』 | 福岡県教育委員会 | 1979 |
| 右田乙次郎・編 | 『水田校区郷土史』 | 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 | 1981 |
| 右田乙次郎 | 『筑後下妻郷土史』 | 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 | 1985 |
| 水見秀徳 | 『梅島遺跡』 | 筑後市教育委員会 | 1992 |
| 筑後市史編さん委員会・編 | 『筑後市史』 | 筑後市史編さん委員会 | 1998 |
| 小林勇作・編 | 『筑後西部地区遺跡群Ⅱ』 | 筑後市教育委員会 | 2000 |
| 小林勇作・編 | 『筑後市内遺跡群Ⅱ』 | 筑後市教育委員会 | 2001 |
| 立石真二 | 『筑後西部第2地区遺跡群Ⅳ』 | 筑後市教育委員会 | 2001 |
| 水見秀徳 | 『筑後市文化財分布地図』 | 筑後市教育委員会 | 2002 |
| 上村英士 | 『筑後市内遺跡群Ⅲ』 | 筑後市教育委員会 | 2002 |
| 水見秀徳 | 『筑後西部第2地区遺跡群Ⅵ』 | 筑後市教育委員会 | 2003 |

第3章 調査成果

1 基本層序

本調査区は調査前は北側は標高4.7mの水田、南側は標高5.0mの住宅地であったが、調査に入る数年前から建築廃材などを含む残土置き場として利用されていた。この残土は標高5.5m近くまで積み上げられていた。調査区北側では残土の層が地表から0.8mほど堆積し、標高4.5mほどで褐色の土壤に変化した。この層を0.1mほど掘り下げた所で遺構面となった。遺構面は標高約4.5mである。南側は旧地表面と思われる標高5.3m前後までは残土が堆積していたが、この下からは盛り土と思われる砂礫層に変化する。この砂礫層は0.5mほど堆積し、北側と同じく褐色土に変化、その下0.1mほどで遺構面となった。南側の遺構面の高さは標高4.7mである。遺構面は筑後市の南西部に広く分布する海性の青灰色粘土（シルト）である。

調査区内の境界部分にはコンクリートブロックにより境界が設けられていたが、遺構面をわずかに傷める程度に掘り込まれていた。またこの境界部分において段差等は確認できず、遺構面は南から北へ緩やかに低くなるものであった。

2 検出遺構

本調査では柵列2条、掘立柱建物4棟、溝状遺構10条、井戸1基、大型土壇2基、不明遺構1基、ピット多数を検出した。

柵列

SA080 (Fig.5)

D8～13グリットから南北方向に6間分を検出した。全長約13.4m。それぞれの柱穴間の距離はP1-P2間約2.55m、P2-P3間約2.0m、P3-P4間約2.6m、P4-P5間約2.45m、P5-P6間約1.55m、P6-P7間約2.0m、主軸の傾きはN-2°-Eを測る。P3・4・6・7は段を有する。

この遺構からはP1 (S007)・P4 (S011)より土師器片、P6 (S018)より焼粘土塊と土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

SA090 (Fig.5)

D4～7グリットから南北方向に4間分を検出した。全長約8.2m。それぞれの柱穴間の距離はP1-P2間約2.4m、P2-P3間約2.0m、P3-P4間約2.05m (P3-P4'間約1.95m)、P4-P5間約1.9m (P4'-P5間約2.05m)、主軸の傾きはN-3°-Eを測る。P1・3 (・4')は段を有する。

この遺構からはP4 (S042)より焼粘土塊、P5 (S041)より土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

掘立柱建物

SB070 (Fig.6)

D15～16グリットから西辺と南辺の一部を検出した。南北棟と思われる建物である。調査時には柵列としたが、東西軸1間+ α ×南北軸3間の掘立柱建物の可能性も出てきたので、ここに報告する。西辺は全長約4.4m、南辺約2.2m+ α 。それぞれの柱穴間の距離はP1-P2間約1.6m、P2-P3間約1.6m、P3-P4間約1.0m、P4-P5間約2.2m。主軸の傾きはN-0°30'-E。床面積は約10.4m²+ α

(約3.1坪 + a) を測る。P 2 は段を有する。埋土はいずれも単一の灰茶色粘質土で、柱痕は認められなかった。

この遺構からは P 1 (S012) より土師器片、P 4 (S004) より黒耀石片と木杭、P 5 (S003) からは土師器片が出土したが、いずれも図化しうるものではない。

SB075 (Fig. 6)

C17～D19グリットから西辺と南辺の一部を検出した、南北棟であろうと思われる建物である。調査時点では構列の可能性があると見て調査したが、その後東西軸1間 + a × 南北軸2間の掘立柱建物となる可能性も出てきたので、ここに報告する。西辺は全長約4.1m、南辺約2.1m + a 。それぞれの柱穴間の距離は P 1 - P 2 間約2.0m、P 2 - P 3 間約2.1m、P 3 - P 4 間2.0m。主軸の傾きは N - 2°30' - E。床面積は約7.0㎡ + a (約2.1坪 + a) を測る。P 1、P 4 は段を有する。埋土はいずれも単一の灰茶色粘質土で、柱痕は認められなかった。

この遺構からの出土遺物はない。

SB085 (Fig. 7)

C12～D13グリットから検出された、東西軸1間 × 南北軸3間の南北棟の掘立柱建物である。東辺には柱穴がコーナー部分しか見られないため、調査時には建物として認識していなかった。東辺は全長約4.5m、西辺は全長約4.3m、南辺は全長約3.0m、北辺は全長約3.0m。それぞれの柱穴間の距離は P 1 - P 2 間約1.8m、P 2 - P 3 間約1.2m、P 3 - P 4 間約1.4m、P 5 - P 6 間約4.5m、P 1 - P 5 間約3.0m、P 4 - P 6 間約3.0m。主軸の傾きは N - 2° - E。床面積は約13.6㎡ (約4.1坪) を測る。P 1・

2・6にはすぐ脇に別の柱穴が見られるが、支柱の痕跡か立て替えの際の痕跡かは判然としない。また、SA080と切り合い関係にあるが、出土遺物、主軸方向などからは前後関係を確認する事は出来なかった。

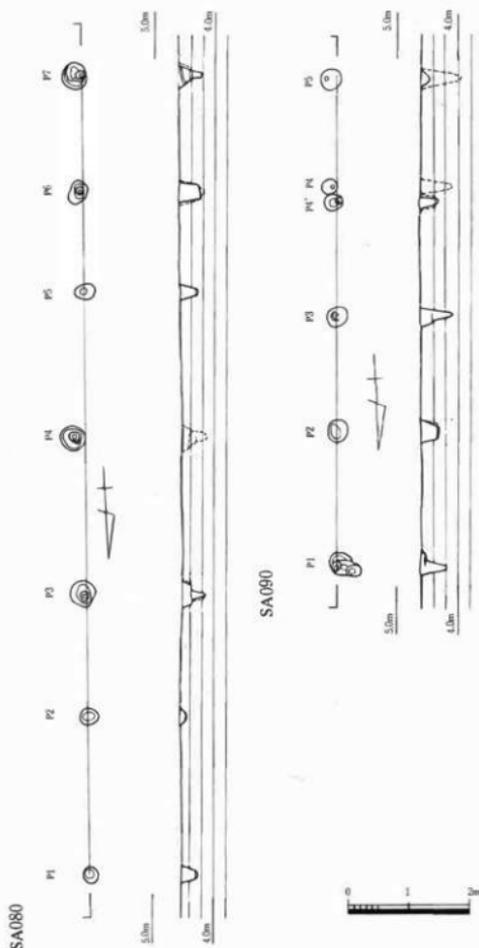
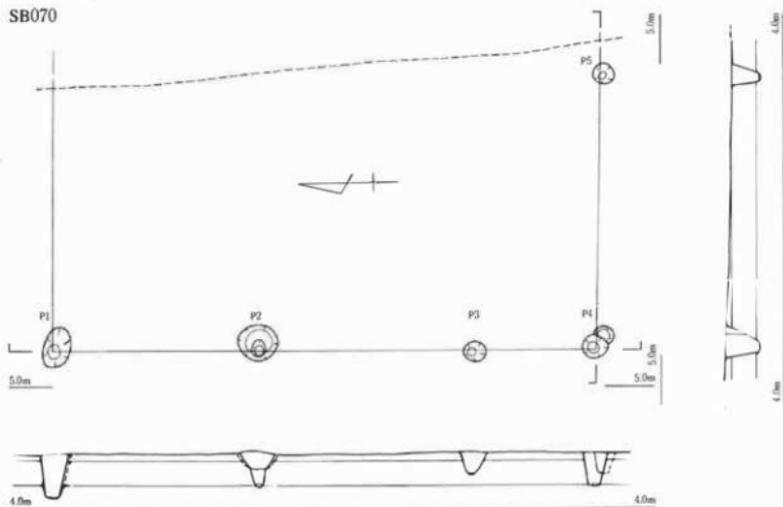


Fig. 5 SA080・090 (S = 1/80)

SB070



SB075

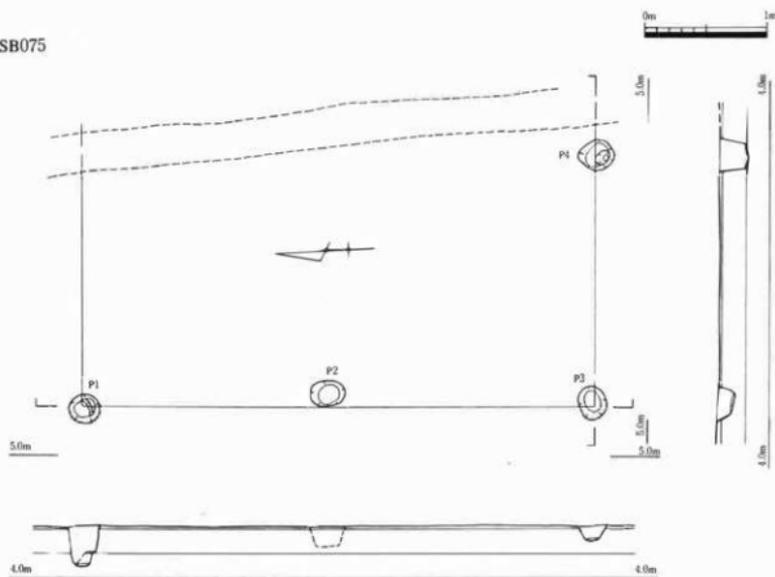


Fig.6 SB070 · 075 (S=1/40)

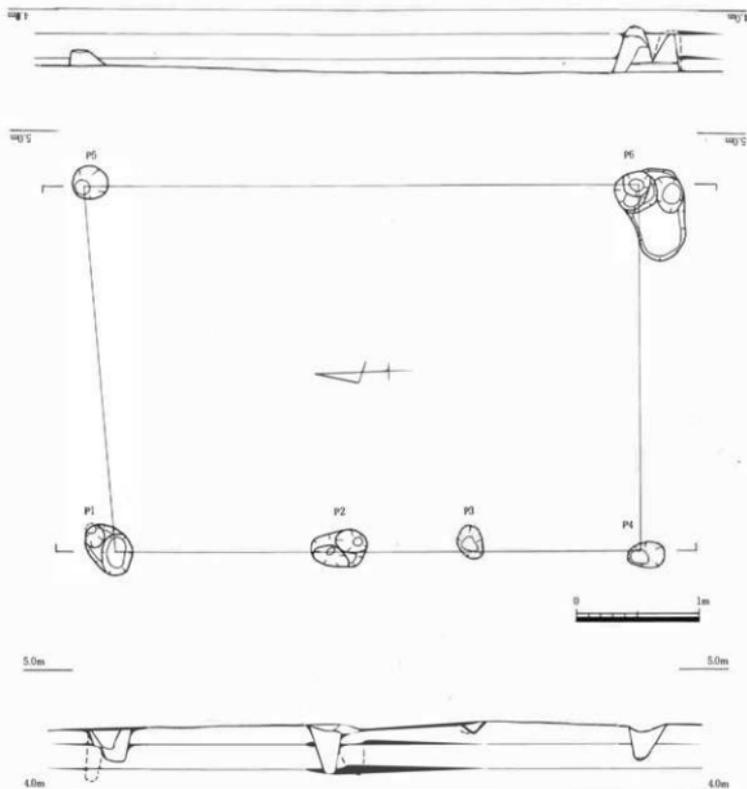


Fig. 7 SB085 (S=1/40)

この遺構からの出土遺物はない。

SB095 (Fig. 8)

D9～E10グリッドから検出された、1間×1間の掘立柱建物である。調査時には建物として認識しておらず、図面整理の際に確認された。それぞれの柱穴間の距離はP1-P2間（西辺）約2.4m、P3-P4間（東辺）約2.5m、P1-P3間（北辺）約2.6m、P2-P4間（南辺）約2.6m。主軸の傾きはN-1°30'-E。床面積は約6.3m²（約1.9坪）を測る。P1・2は段を有する。

この遺構からはP2（S031）より木枕（Fig. 27-1）が出土している。

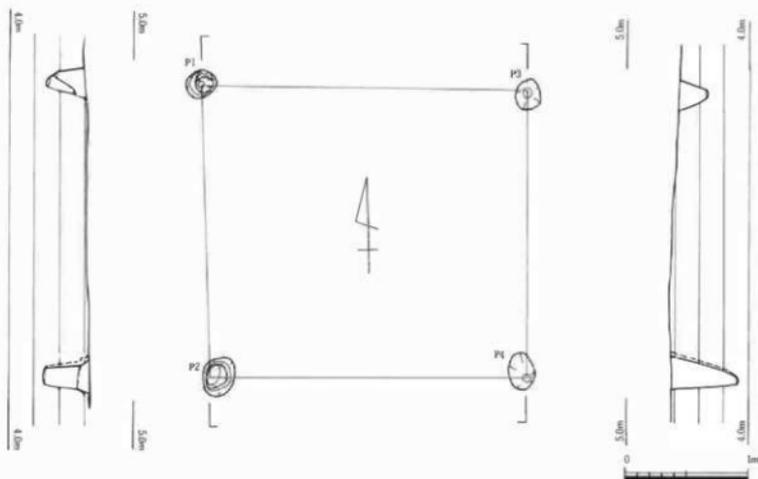


Fig.8 SB095 (S=1/40)

SB100 (Fig.9, P1.2-2)

B4～C5グリットから検出された遺構である。当初は1間×1間の建物として調査したが、東西軸1間×南北軸2間の南北棟の建物になる可能性を残す。この場合、北東コーナー部分は調査区外へ伸びる。1間×2間とした場合の法量は、東辺約 $3.5 + \alpha$ m、西辺約3.9m、南辺約3.0m、北辺約 $2.5 + \alpha$ m。それぞれの柱穴間の距離はP1-P2間約1.9m、P2-P3間約1.6m、P4-P5間約1.6m、P2-P4間約2.8m、P3-P5間約2.5m。主軸の傾きは $N-0^{\circ}30'-E$ 。床面積は約 $8.5\text{m}^2 + \alpha$ (約2.6坪 $+$ α)を測る。P3は段を有する。また、P2・4・5は複雑な掘形を有するが、柱の抜き取りもしくは立て替えに伴うものかは不明である。P1～4において土層観察を行なったが、柱根らしき痕跡を明確に確認する事は出来なかった。

この遺構からはP1より土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

SB105 (Fig.10・11, P1.3-1)

B1～D4グリットから検出された、東西軸1間×南北軸3間の南北棟の掘立柱建物である。東辺は全長約6.2m、西辺は全長約6.2m、南辺は全長約3.9m、北辺は全長約3.6m。それぞれの柱穴間の距離はP1-P2間約2.5m、P2-P3間約1.7m、P3-P4間約2.1m、P5-P6間約1.9m、P6-P7間約2.2m、P7-P8間約2.2m、P1-P5間約3.6m (=北辺)、P2-P6間約3.9m、P3-P7間約3.9m、P4-P8間約3.9m (=南辺)。主軸の傾きは $N-0^{\circ}30'-W$ 。床面積は約 23.8m^2 (約7.2坪)を測る。P1・3・4・5・8は段を有する。P2を除く全ての柱穴で土層観察を行なったが、柱根らしき痕跡を明確に確認する事は出来なかった。

この遺構からはP1 (S039)より土師器土鍋 (Fig.27-3)、土師器片・瓦質土器茶釜 (2)、P3 (S024)より土師器片・瓦質土器片、P4 (S034)より土師器片、P5 (S038)より土師器片、P7 (S036)より土師器片を出土しているが、P1出土品以外は図化しうる物ではない。

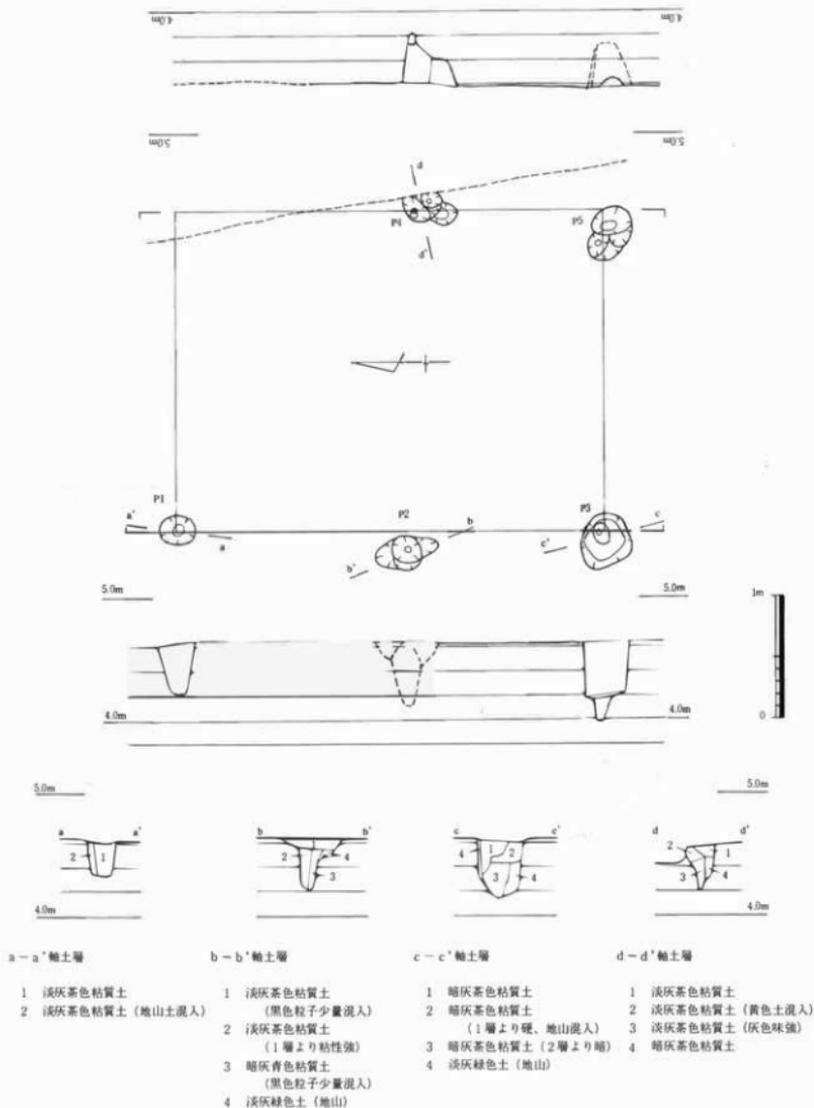


Fig.9 SB100 (S=1/40)

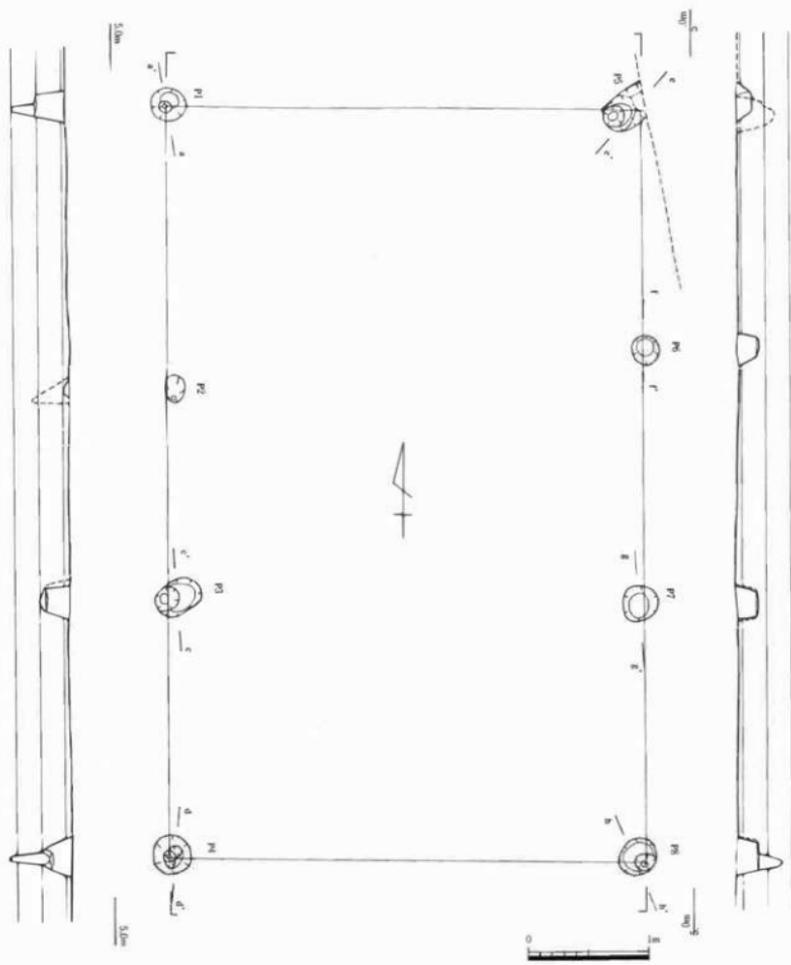


Fig.10 SB105 (S = 1/40)

SB110 (Fig.12・13、P I.3-2)

D2～E5グリッドから検出された、東西軸1間×南北軸2間の南北棟の掘立柱建物である。東辺は全長4.1m、西辺は全長約4.2m、南辺は全長約2.1m、北辺は全長約2.1m。それぞれの柱穴間の距離はP

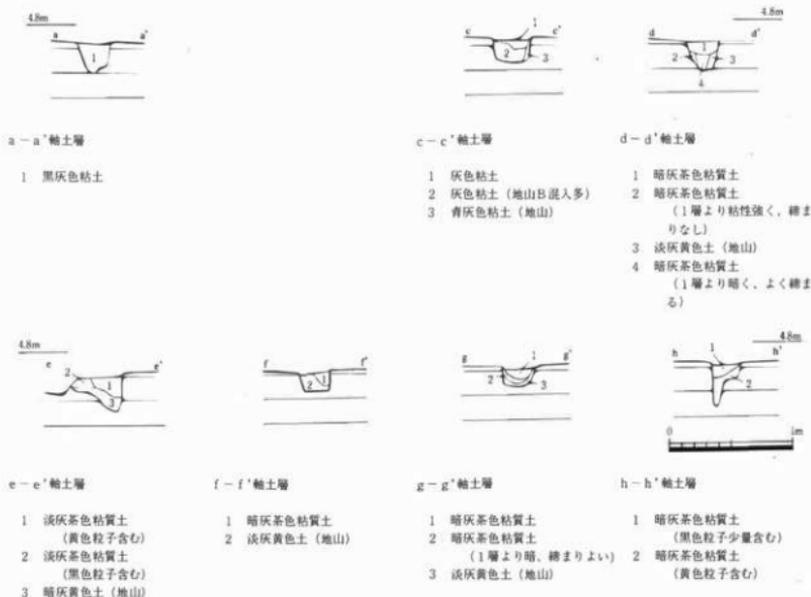


Fig. 11 SB105 柱穴土層断面 (S = 1/40)

1-P2間約2.2m、P2-P3間約2.0m、P4-P5間約2.1m、P5-P6間約2.0m、P1-P4間 (=北辺) 約2.1m、P2-P5間約2.1m、P3-P6間 (=南辺) 約2.1m。主軸の傾きはN-1°-E。床面積は約9.0m² (約2.7坪)を測る。全ての柱穴が段を有し、P3はひとつの柱穴に2つの柱痕跡と思われる小ピットを有する。この小ピットの法量はほぼ等しいため、建物を復元した際に違和感のない西側のものを主柱穴とした。ここでは全ての柱穴において土層観察を行なった結果、P2を除く全ての柱穴において柱痕跡を確認した。その結果、P1・3・4・5は柱の除去後、人為的に埋め戻されており、立て替えは行なわれていないと判断される。

この遺構からは、P4 (S044)より焼粘土塊、P5 (S043)より土師器片、P6 (S019)より焼粘土塊 (Fig. 27-4)と土師器片を出土したが、P6の焼粘土塊以外は固化する物ではなかった。

SB115 (Fig. 14, P1.4-1)

E3~F4グリッドから検出された、東西1間×南北2間の南北棟の掘立柱建物である。東辺の中央部には、西辺中央部のP2とほぼ同じ大きさの円形のシミが確認されており、ここに簡易的な柱を設けていた可能性がある。このシミ部分は数cm掘り下げると地山土となった為、遺構として固化してはいない。東辺の全長約3.6m、西辺の全長約3.9m、南辺の全長約2.9m、北辺の全長約2.9m。それぞれの柱穴間の距離はP1-P2間約2.0m、P2-P3間約1.9m、P4-P5間 (=東辺) 約3.6m、P1-P4間 (=北辺) 約2.9m、P3-P5間 (=南辺) 約2.9m。主軸の傾きはN-0°30'-E。床面積は約10.7m² (約3.2坪)を測る。全ての柱穴に段を有する。ここでは西辺のP1~3において土層観察を行なった

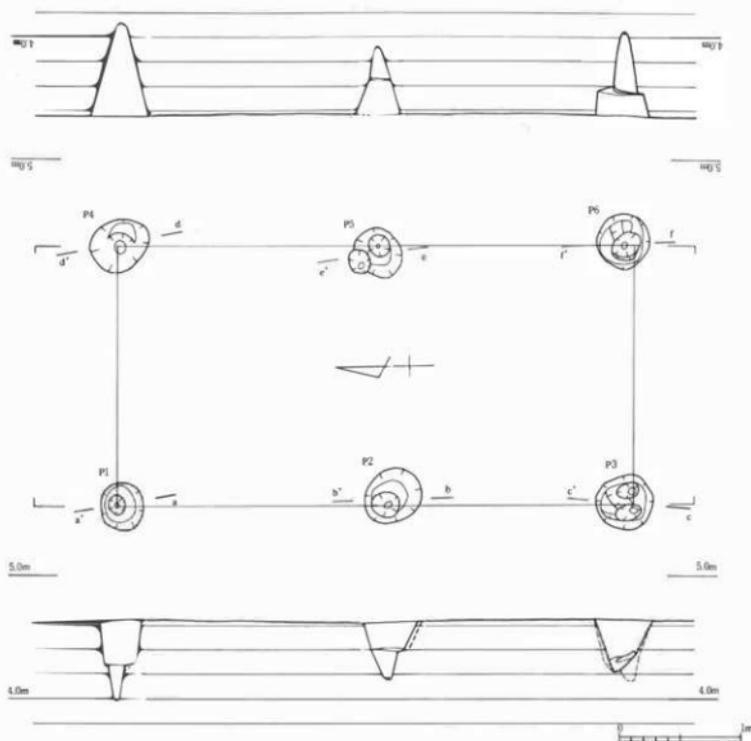


Fig. 12 SB110 (S=1/40)

が、十分に掘り下げていなかった為、立て替えや柱材の抜き取り痕などは確認できなかった。
この遺構からはP1 (S047) より瓦質土器片を出土したが、図化しうる物ではない。

溝状遺構

SD001 (Fig. 15, P1.4-2, 5-1)

調査区の北端、D21～J21にかけて検出された東西方向に伸びる溝状の遺構である。検出部分の全長約18.2m、上幅約1.5m+a、下幅約0.4～1.2m+a、検出面からの深さ約0.05～0.35m。主軸の傾きはN-86°-Wを測る。断面形は箇所毎に異なっており様ではない。西側はSX010により切られ、東側はD21グリットで完全に調査区外へと抜ける。また北半分は検出時点から調査区外であり、その全景は見えていない。2ヶ所において土層の観察を行ない、数回の掘り直しが行なわれている事が確認できた。またH21グリット部分で円形と思われる下位遺構 (SK064) を確認したが、調査時のミスにより、遺物の選別はほとんど出来ていない。

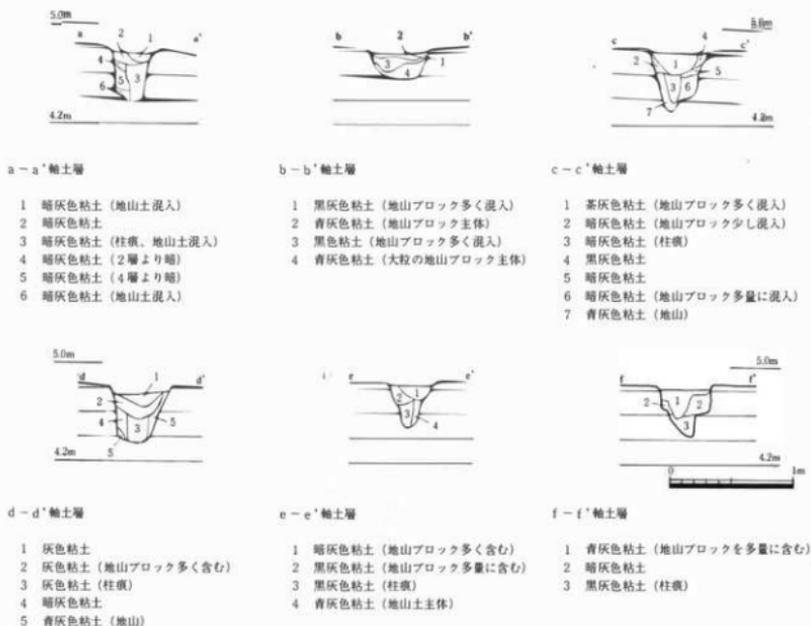


Fig. 13 SB110 柱穴土層断面 (S=1/40)

この遺構からは弥生後期の甕の口縁部、須恵器鉢?、土師器土鍋・茶釜・小皿・土師器片、瓦質土器茶釜・把手・火鉢・瓦質土器片、赤瓦、陶器片、焼石が出土している (Fig. 28)。また、SK064からも土鍋や土鉢を出土したが、これらは調査時に壁面の崩落によって混入した可能性が高い (Fig. 28)。

SD005 (Fig. 16・17, P1.5-2~8-1)

J1~19グリットにかけて検出された、南北方向に伸びる溝状の遺構である。南端は調査区外へ伸び、途中SD030・027・025・017と接続しながら若干東側に振れた後、SX010に向かい西側に弧状に走る。北端部はSX010の東南コーナー部に接している。検出部分の全長約55.1m、上幅約1.1~1.7m、下幅約0.7~1.2m。検出面からの深さ約0.25~0.6m。主軸の傾きは直線部分でN-2°-E、北端部分でN-28°-Wを測る。断面形は部分毎に様ではないが、逆台形状の箇所が最も多い。検出時点では一本の溝として検出されたが、遺構下部において北側はSD025と、南側はSD027と一連の遺構となり、両者の間はかなり浅くなっている事が判明した。埋土からは、これが水を伴う遺構であり、掘り直しも幾度か行なわれて、自然埋没したことが窺われる。

この遺構の遺物は下位遺構の関係からSD025との接点に近いd-d'軸より北と南でとりあえず分離はしているが、分層面に拠った立体的な取り上げは行なえていない。出土品にはd-d'軸以北より須恵器播鉢、土師器茶釜・皿・播鉢・鉢・鍋、土師器片、瓦質土器茶釜・羽釜・鉢・鍋・火鉢、白磁碗・皿、青磁碗、染付、陶器皿、陶器片、焼石、板材、艶白を (Fig. 29~31)、d-d'軸以南からは須恵器播鉢、

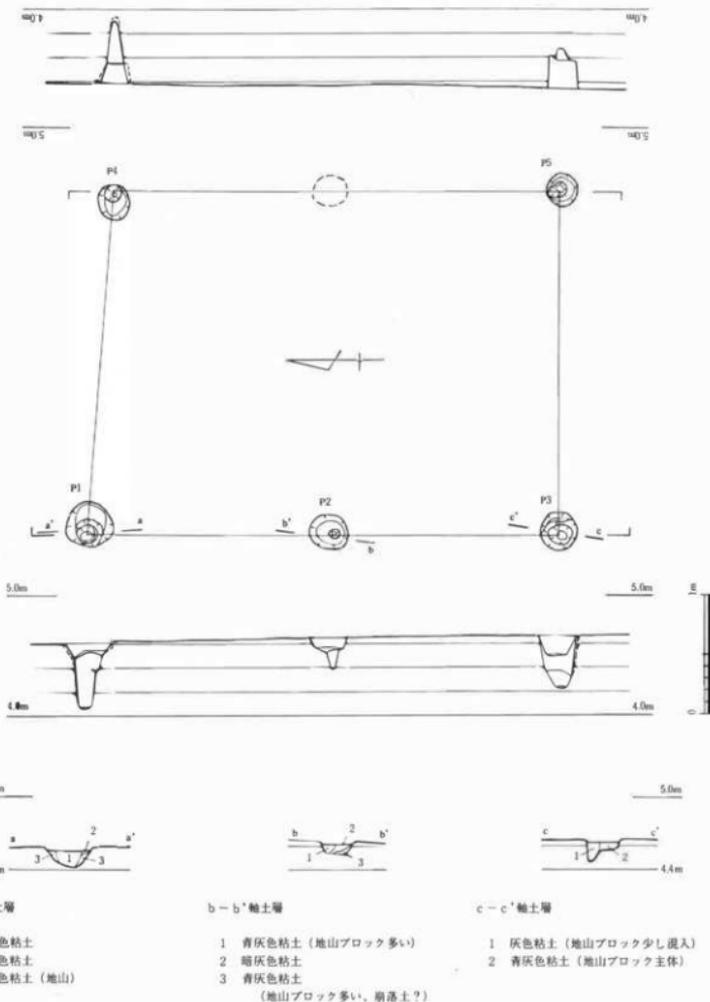
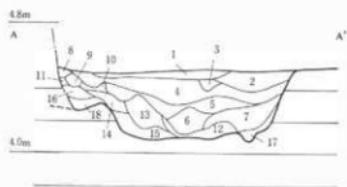


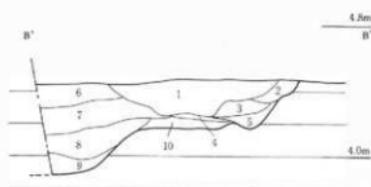
Fig. 14 SB 115 (S = 1/40)

須恵器片、土師器鍋・皿・茶釜、土師器片、瓦質土器茶釜・羽釜・火鉢・鍋・捏ね鉢・鉢、瓦質土器片、白磁皿、青磁碗、青磁片、染付片、焼石、堯臼を出土している (Fig. 32~33)。



A-A' 軸土層

- 1 灰色粘土・暗灰色粘土混合層
- 2 暗灰色粘土
- 3 暗灰色粘土・黒色粘土混合層
- 4 灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 5 灰色粘土 (地山土の混入に因り黄色味を帯びる、マンガン粒多い)
- 6 黒色粘土 (マンガン粒多い)
- 7 灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 8 灰色粘土 (4層よりマンガン粒少なめ)
- 9 黄色粘土 (地山ブロック)
- 10 黒灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 11 黒灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 12 白灰色粘土 (マンガン粒・炭化物を含む)
- 13 黒灰色粘土 (マンガン粒多い、地山ブロックを少量含む)
- 14 暗灰色粘土 (マンガン粒多い、地山ブロックを少量含む)
- 15 白灰色粘土 (マンガン粒・炭化物を含む)
- 16 灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 17 灰色粘土 (暗灰色粘土ブロック・黒灰色粘土ブロックを含む)
- 18 オリーブ色粘土 (マンガン粒多い)

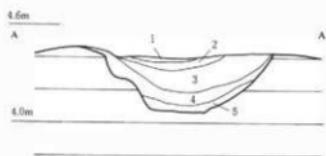


B-B' 軸土層

- 1 暗灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 2 暗灰色粘土 (マンガン粒多い、地山ブロック含む)
- 3 灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 4 灰色粘土 (3層より色調明)
- 5 灰色粘土 (4層より色調明、マンガン粒多い)
- 6 灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 7 黄灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 8 灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 9 灰色粘土
- 10 灰色粘土 (地山ブロック多く混入)

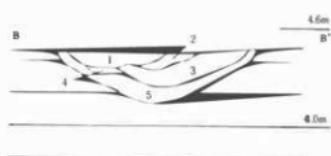


Fig. 15 SD001 土層断面 (S=1/30)



A-A' 軸土層

- 1 暗灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 2 灰色粘土 (マンガン粒・炭化物多い)
- 3 明灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 4 灰色粘土 (マンガン粒多い)
- 5 灰色粘土・地山ブロック混合層

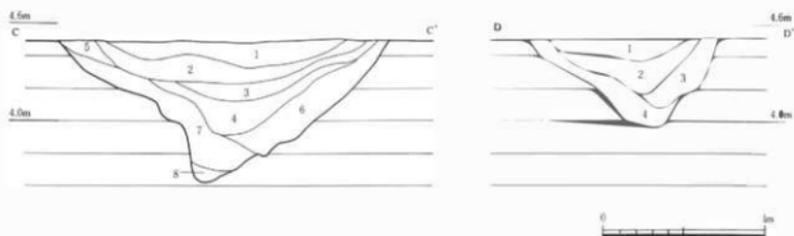


B-B' 軸土層

- 1 暗灰茶色粘質土 (酸化鉄含む)
- 2 暗灰茶色粘質土 (1層より締まり強い、酸化鉄含む)
- 3 暗灰黄色粘質土 (酸化鉄多く含む、炭化物を少量含む)
- 4 暗灰茶色粘質土 (1・2層より茶色味が強い、酸化鉄含む)
- 5 暗灰茶色粘質土 (1・2層より色調暗、下部に地山ブロック含む)



Fig. 16 SD005 土層断面 (1) (S=1/30)

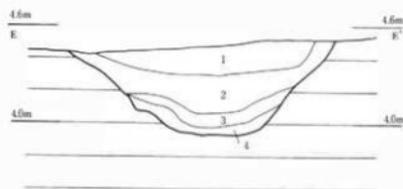


C-C'軸土層

- 1 灰色粘土（褐色粘土を多く含む）
- 2 灰色粘土（マンガン粒多い、褐色粘土を少し含む）
- 3 灰色粘土（ラミナ状堆積）
- 4 灰色粘土
- 5 灰色粘土
- 6 灰色粘土・白色粘土混合層（地山土主体）
- 7 灰色粘土・白色粘土混合層（埋土主体）
- 8 青灰色シルト

D-D'軸土層

- 1 青灰色粘土（マンガン粒多い）
- 2 暗灰色粘土（炭化粒少し含む）
- 3 暗灰色粘土（炭化物を少し含む、小粒の粘土塊を多く含む）
- 4 暗灰色粘土・地山粘土混合層



E-E'軸土層

- 1 赤灰色粘土（マンガン粒多い）
- 2 灰色粘土（マンガン粒少し含む）
- 3 灰色粘土（ラミナ状、結まり強い）
- 4 灰色粘土（地山ブロック多い）

Fig. 17 S D 0 0 5 土層断面（2）（S = 1/30）

S D 0 1 7 (Fig.18)

H13～I14グリットから検出された、東西方向に伸びてS D 005とS K 015を結ぶ、溝状の遺構である。検出部分の全長約2.4m、上場幅約0.5～1.7m、下場幅約0.1～0.2m、検出面からの深さ約0.2～0.35m。主軸の傾きはN-87°-Wを測る。断面形は逆台形だが、S K 015側に向かい平面、断面共にラッパ状に広がっている。用途的にはS D 005より水をS K 015へ引き入れる為の物と考えられるが、埋土は灰色粘土からなる単一埋土で、黒色粘土・白色粘土ブロックの混入が多く、流水を伴う状況ではない。

この遺構からは土師器土鍋、土師器片、瓦質土器片を出土している（Fig.34-1～3）。

S D 0 2 0 (Fig.19, P.1.8-2, 9-1)

F17～H17グリットにかけて検出された、東西方向に走る溝状の遺構である。南側でS K 015に切られているが、切り合い状況は調査中に遺構の埋土が崩落した為一部不明確である。全長約6.7m、上場幅約0.8～0.95m、下場幅約0.35～0.6m、検出面からの深さ約0.15～0.25m。主軸はほぼ東西方向に測る。断面

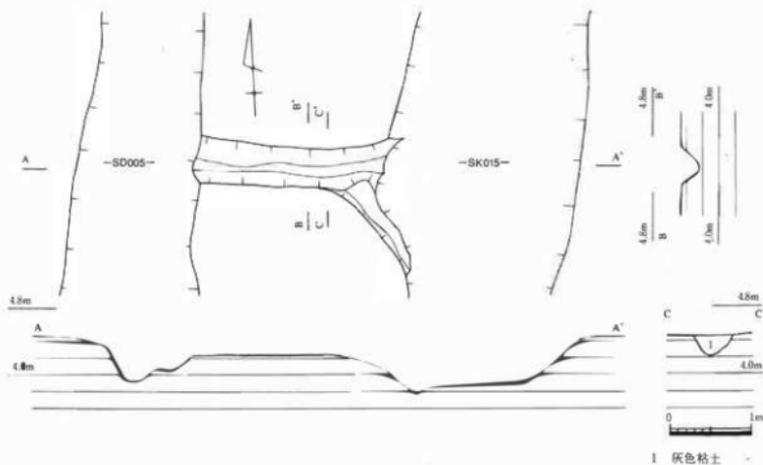


Fig.18 SD017 (S=1/60)

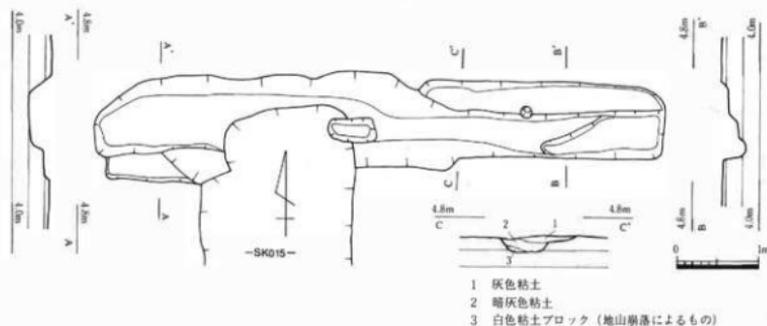


Fig.19 SD020 (S=1/60)

形は逆台形状となるが、東側では北に、西側では南側にテラス状の段を有している。この段は埋土観察の結果、掘り直しの際に拡張されたものと推察される。埋土の状況から流水に伴うような埋土は確認できず、埋没状況も不明である。

この遺構からは土師器鍋・茶釜・羽釜・火鉢、土師器片、瓦質土器鉢、瓦器片、青磁片、染付碗、焼粘土塊などが出土している (Fig.34-4-10)。

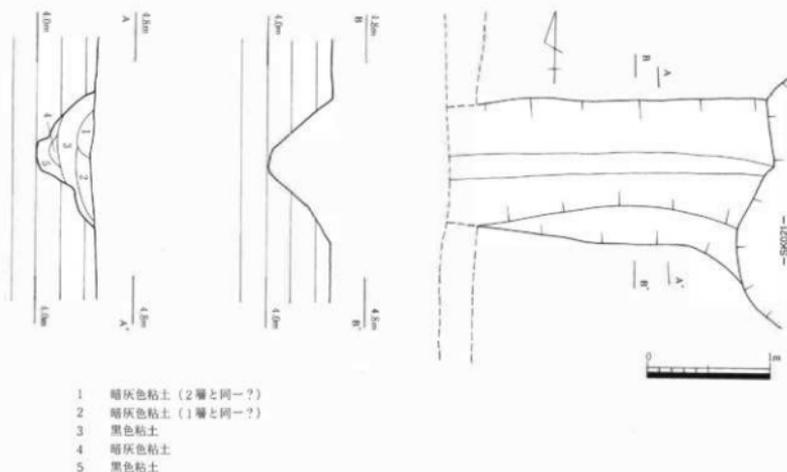


Fig. 20 SD022 (S=1/40)

SD022 (Fig. 20, P. 1.9-2)

K7~L7グリットから検出された、東西方向に伸びる溝状の遺構である。東側はSK021と接しており、西側は調査区外へ伸びる。検出部分の全長約2.6m、上場幅約1.0~1.5m、下場幅約0.1~0.2m、検出面からの深さ約0.5m。主軸の傾きはN-87°30'-Wを測る。断面形は逆台形状だが、南面には角が付随している。東側へ向かい緩やかに傾斜しており、用途的にはSD017同様、SK021へ導水する為の施設だと考えられるが、埋土からは流水の痕跡は認められない。埋土観察の結果、一度の掘り直しが行なわれたものと考えられる。埋没状況は自然埋没と思われるが明確ではない。

この遺構からは土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

SD025群 (Fig. 21, P. 1.10)

C7~J8グリットから検出された、東西方向に伸びる溝の一群で、SD025~028がこれに当たる。西側ではそれぞれ分離した溝となっているが、東部分で分離できない状態となっているのでここではひとつのグループとして報告する。検出時に確認したSD029は後にSD027と同一であることが確認された為、SD027に統合した。

SD025はC7~J8グリット、遺構群の北に位置しており、検出時点では最も明確だった遺構である。西側はSD005に切られているが、遺構下部ではSD005北側と同一の溝であることが確認された。東側は調査区外へと伸びている。検出部分の全長約13.7m、上場幅約0.7m、下場幅約0.1~0.3m、検出面からの深さ約0.3~0.4m。主軸の傾きはN-84°-Wを測る。断面形はほぼ逆台形となる。この溝は最低3回程掘り直しが行なわれており、2回目の際の埋土には滞水の痕跡が認められる。

この遺構からの出土遺物には須恵器甕・播鉢、土師器鍋・茶釜・鉢、土師器片、瓦質土器捏ね鉢・茶釜・羽釜・鉢・鍋、瓦器片、青磁碗・壺、青磁片、磁器片、陶器碗、砥石、挽臼、焼石などがある (Fig. 35・36)。

SD026はH7~J7グリットから検出された。SD025とSD027に挟まれ、東側のSD028と同一の

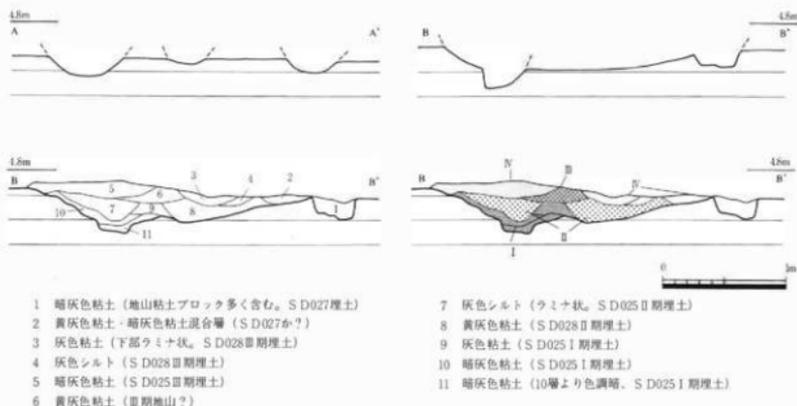


Fig. 21 SD025群 (S=1/40)

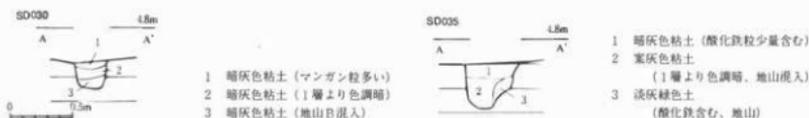


Fig. 22 SD030・035土層断面 (S=1/40)

遺構とも考えられる。検出部分の全長約2.5m上場幅約0.2~0.35m、下場幅約0.1~0.25m、検出面からの深さ約0.05m。主軸の傾きはN-84°-Wを測る。断面形は浅い皿状となる。遺構の残存状態が極めて悪く、埋土観察には至っていない。

この遺構からは土師器片を出土しているが、図化する物ではなかった。

SD027はC7-J7グリッドから検出された。遺構群の中では最も南側に位置する遺構である。検出当初は試掘トレンチが遺構を分断していた為、東側をSD029、西側をSD027としたが、トレンチ下部で両者が同一遺構である事が判明したので以後SD027に統一された。西側はSD005に切られているが、遺構下部ではSD005南側と同一の溝となる。東側はSD025と異なり、C7グリッドで切れている。検出部分での全長約13.3m、上場幅約0.4~0.75m、下場幅約0.1~0.4m、検出面からの深さ約0.1~0.25m。主軸の傾きはN-85°-Wを測る。断面形は方形、もしくは逆台形状となる。埋土観察の結果、1層と2層の関係を明瞭に出来ず、掘り直しの有無は判断できない。

この遺構からは土師器土鍋、土師器片、瓦質土器片、黒曜石などを出土している (Fig.37-4~6)。

SD028はD7-H7グリッドから検出された。SD025とSD027の間に挟まれ、前述のようにSD026と同一遺構とも考えられる。検出時点では遺構部分は明瞭であったが、完掘状況では不明瞭となり、形状は判然としない。検出時点での全長約8.0m、上場幅約0.4m、下場幅約0.3m、検出面からの深さ約0.1m。主軸の傾きはN-87°30'-Wを測る。断面形は不定形である。この遺構も数回の掘り直しが認められるが、最初に形成されたのはSD025の1ないし2回目の掘り直しの際である。

この遺構からは土師器土鍋、土師器片、瓦質土器片、陶器碗を出土している。陶器碗はSD025出土の物と同一個体である可能性が高い (Fig. 37-1~3)。

SD030 (Fig. 22)

G2～J2グリットから検出された東西方向に伸びる細長い溝で、西側はSD005に切られる。全長約6.7m、上場幅約0.25～0.3m、下場幅約0.15～0.2m、検出面からの深さ約0.3～0.35m。主軸の傾きはN-86°-Wを測る。断面形は長方形に近い逆台形となる。埋土からは滞水などの痕跡は認められない。区画のみの溝か。

この遺構からは土師器鍋・火鉢、焼粘土塊、土師器片などを出土している (Fig. 37-7～9)。

SD035 (Fig. 22, P I.11-1)

D1～G2グリットから検出された、東西方向に伸びる溝である。中央付近でSE040に切られ、その西側でカギ状に北に折れている。西側の延長には軸を同じうしてSD030があり、両者の間になんらかの共通した意図を感じられる。SD030とSD035の間は約0.5mである。全長約7.5m、上場幅約0.3～0.5m、下場幅約0.2～0.3m、検出面からの深さ約0.15～0.3m。主軸の傾きはN-87°-Wを測る。断面形は長方形に近い逆台形状となる。埋土観察における滞水などの有無は不明である。SD030と同様、区画のみの溝か。

この遺構からは須恵器鉢、土師器皿・坏・鍋、土師器片、瓦質土師鉢、軽石、焼石を出土している (Fig. 38)。

井戸

SE040 (Fig. 23, P I.11-2, 12-1)

F1～2グリットから検出された遺構である。検出時点での形状は円形で、南側のSD035を切っている。直径約1.0～1.1m。検出面より約1.0mまで掘り下げたが湧水もあり、これ以上は危険と判断した。その為、断面形や下場の状況は不明である。人為的に埋没しており、検出面から約0.4mほど掘り下げた所には円礫の投げ込みが集中して見られた。

この遺構からは須恵器鍋、土師器皿・坏・鍋、土師器片、瓦質土器羽釜・釜、瓦器片、青磁碗、焼石、焼粘土塊が出土している (Fig. 39)。

大型土壌

SK015 (Fig. 24, P I.12-2～14-1)

G13～H17グリットから検出された大型の土壌である。北側でSD020を切り、南側でSX016・SD017に接している。平面形は長楕円形と思われるが、SD020との切り合い関係は一部不明のままである。長軸約12.0m、短軸約1.5～2.5m、検出面からの深さ約0.5～0.9m。主軸の傾きはN-10°-Eを測る。断面形は逆台形状となる。埋土観察から、この遺構は自然埋没をしたものと考えられ、2回ほど掘り直しが行なわれたと思われる。第1段階の埋土(8・9層)より植物遺体を、第2・第3段階の埋土にラミナ状堆積を確認した。このことから、この土壌は貯水を目的とした施設と考えられる。

この遺構からは須恵器播鉢、須恵器片、土師器皿・播鉢・火鉢・鍋・羽釜、土師器片、瓦質土器甕・鉢・播鉢・茶釜・鍋、瓦器片、青磁碗・壺・皿、青磁片、白磁碗、染付皿、陶器甕、砥石、挽臼、焼石、板材などを出土した。染付皿は第3段階の埋土より出土している (Fig. 40～45)。

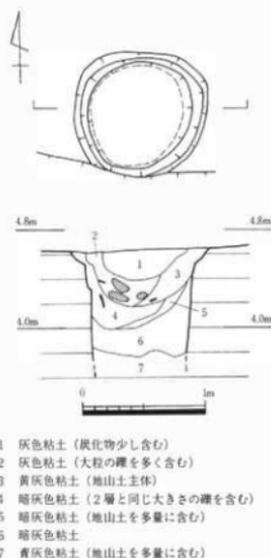


Fig. 23 SE040 (S=1/40)

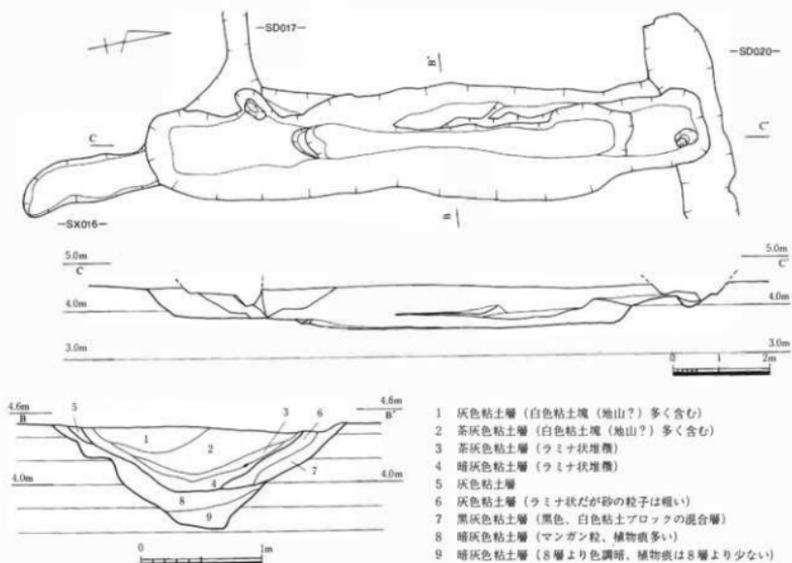


Fig. 24 SK015 (S = 1/100 · 1/40)

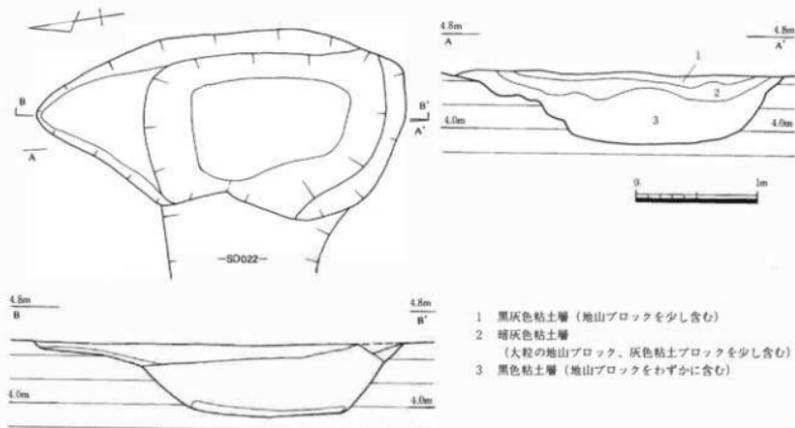


Fig. 25 SK021 (S = 1/40)

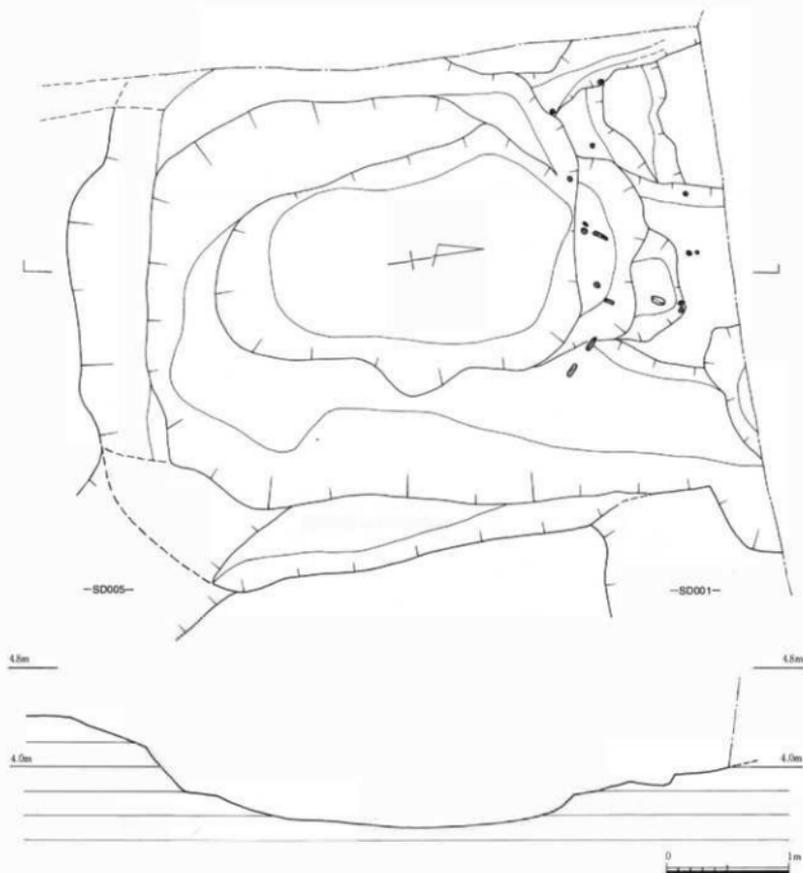


Fig. 26 SX010 (S=1/40)

SX015の南側に、舌状に伸びるSX016は深さ0.05~0.15mと残りが悪く、SX015との関係を明確にはできなかった。出土遺物には土師器鍋、土師器片がある (Fig. 47)。

SX021 (Fig. 25, P 1.14-2)

K6~7グリットから検出された、平面卵型の土坑である。西側にSD022が接している。長軸約3.0m、短軸約1.6m、検出面からの深さ約0.6m。主軸の傾きはN-10°-Eを測る。北側部分はなだらかに南側へ落ちるテラス状となり、南側の主体部は隅丸長方形である。断面形は逆台形状となる。埋土観察

から自然埋没で遺構の掘り直しは認められない。また、SD022との下場部分の高低差が0.1mしかないためか、滞水痕跡は認められない。

この遺構からは土師器片を出土したが、図化しうるものではなかった。

不明土壌

S X 0 1 0 (Fig. 26, P 1.15~16)

調査区の北西角、K19~L21グリットから確認された溜め池状の遺構である。調査開始時点で大型の溝状遺構と判断し、調査区壁面での土層確認を予定していたため、埋没状況を確認をできない状態にしてしまった。今調査では東南角を中心に検出している。東北部分でSD001と、南東角でSD005と接しているが、北壁面を見ると北西部分に一本、東北部分にはもう一本北側に伸びる溝が接していた様である。検出部分での長軸 $5.4+a$ m、短軸 $4.0+a$ m、検出面からの深さ約1.0m。主軸の傾きは $N-10^{\circ}-E$ を測る。断面形はレンズ状になり、東側を中心にテラスを有している。北側は階段状となり、土留めのためと思われる杭の痕跡が認められた。

この遺構からは須恵器坏・播鉢、土師器皿・坏・鉢・鍋、土師器片、瓦質土器鍋・羽釜・火鉢、瓦器片、白磁片、青磁片、陶器播鉢、木材(杭、板など)、植物種子(桃?)、獣骨(ろっ骨、四肢骨)を出

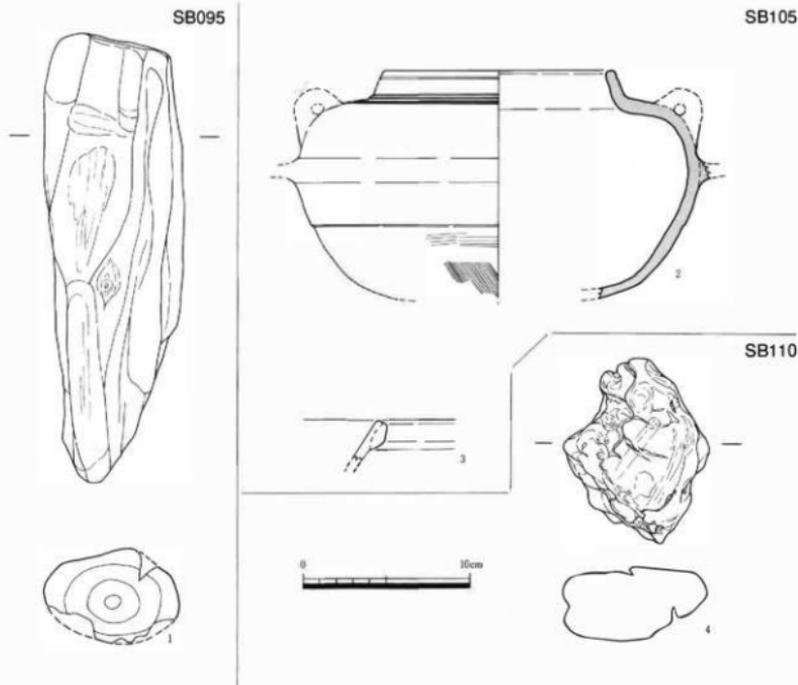


Fig. 27 掘立柱建物 柱穴出土遺物 (S = 1/3)

土している (Fig.46)。

3 出土遺物

出土遺物の焼き物に関しては弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器がある。「土師質」と「瓦質」土器に関しては、燻され灰色化したものは「瓦器」、赤橙色のものは「土師器」としている。

SB095 出土遺物 (Fig. 27)

1は木杭である。先端部は風化が激しく加工痕跡は見えないが、胴部の面取痕と上面の加工痕の残りは良い。柱を支える為の添木か。

SB105 出土遺物 (Fig. 27, P 1.17-1)

2は瓦質土器の茶釜である。羽部より下は厚く煤が付着する。3は土師鍋の口縁部細片である。

SB110 出土遺物 (Fig. 27)

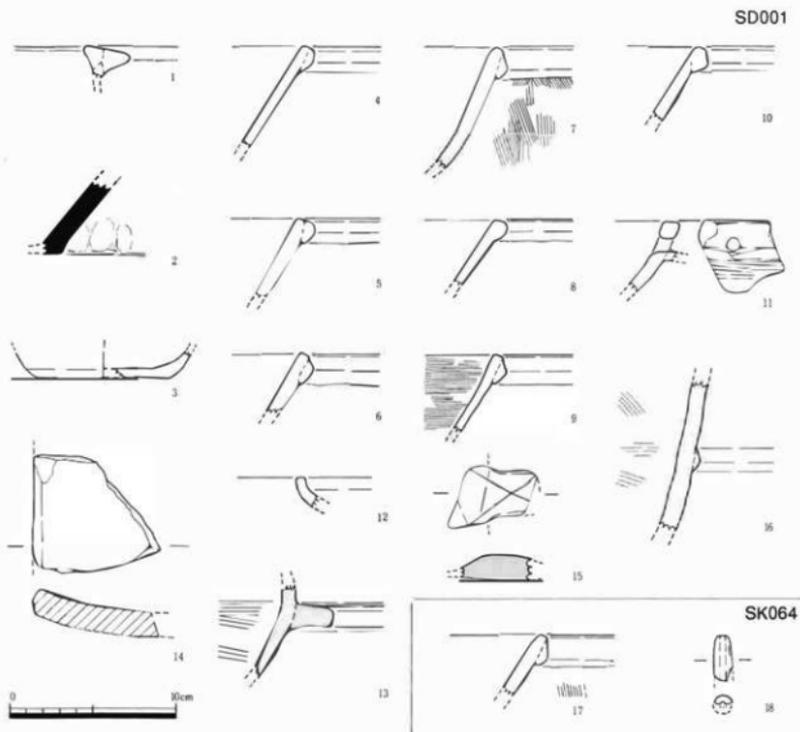


Fig.28 SD001・SK064 出土遺物 (S=1/3)

4は焼粘土塊である。元来は円形をしていたかは不明。胎土は密でなく、比較的軽い。

SD001出土遺物 (Fig. 28, P 1.17-2)

- 1は弥生土器の甕の口縁部細片である。弥生中期後半。
- 2は須恵器の鉢の底部細片である。
- 3は土師器の皿の破片である。底部は回転系が見られる。
- 4~10は土師器の鍋の口縁部細片である。いずれも口縁部を玉縁状に仕上げる。
- 11は土師器の鍋の「耳鍋」細片である。鈔は体部外面に付くが、大部分は欠落する。穿孔も一ヶ所のみ残存している。
- 12は土師器の茶釜の口縁部細片である。
- 13は瓦質土器の茶釜の胴部細片である。鈔より下部には煤が付着する。
- 14は素焼きの赤瓦の破片である。桶巻きの技法で作られ、外面に切り込みを入れた後分割、切断部分に軽くナデを施している。上面、下面とも工具ナデ。色調は赤橙色。胎土は精良。在地の水田焼。近世以降の所産。
- 15は瓦質の不明土製品である。片面に「×」状の沈線を施す。フライパン状の焙烙の把手か？
- 16は瓦質土器の火鉢の胴部破片である。

SK064出土遺物 (Fig. 28)

SK064はSD001の下位遺構と考えられる。出土遺物は壁面崩落土を除去する際に出土している。崩落土は調査区壁面、SD001、SK064の埋土のいずれかになるため、遺構の性格を示す可能性は低い。SD001との関連性が捨てられない為、SD001出土遺物と一緒に掲載した。

- 17は土師器の鍋の口縁部細片である。口縁部を玉縁状に仕上げる。
- 18は土錘である。

SD005D軸以北出土遺物 (Fig. 29~31, P 1.18~19)

SD005出土遺物は、遺構部分で報告した通り、旧来は北と南で別々に方形区画を形成していたと思われる。このため、北側区画の西南コーナー部に近い土層D軸より北と南で遺物を分けて報告する。

- 1~3は須恵器の播鉢の口縁部である。1・3が若干外反気味なものに対し、2は直線的。
- 4・5は土師器の小皿である。5には口縁部内側に薄く油煙の痕跡が残る。
- 6~15は土師器の鍋である。7は薄手で瓦質にも感じられる。6・7は素口縁で時期は新しい。8~15はいずれも口縁部を玉縁状に仕上げる。
- 16は土師器の茶釜の口縁部である。
- 21は土師器の播鉢の口縁部である。口縁部の一部が片口状に外反し始めている。22は土師器の播鉢の胴部破片である。
- 17は瓦質土器の鍋の口縁部細片である。素口縁で体部が薄くなることから、焙烙となる可能性もある。
- 18も瓦質土器の鍋の口縁部細片で、玉縁状となる。
- 19は瓦質土器の耳鍋の口縁部細片である。鈔は上方へ強く屈曲する。
- 20は瓦質土器の播鉢である。口縁部は肉厚で玉縁状となる。
- 23・24は瓦質土器の火鉢の口縁部細片である。23は2本の断面三角形の貼り付け突帯の間に菊花文のスタンプを施す。24は肥厚した口縁端部と断面三角形の貼り付け突帯との間にスタンプを施すが、摩滅が激しい。菊花文か。
- 25は瓦質土器の浅鉢もしくは火鉢である。
- 26~30は瓦質土器の茶釜である。26は肩部のくびれ部に断面三角形の突帯を有し、その下に半截竹管文を施す。27は肩部のくびれ部に花菱文、その下方に菊花文のスタンプを施す。28は肩部のくびれ部に三条の沈線を施しその下にU字状の単文を施す。

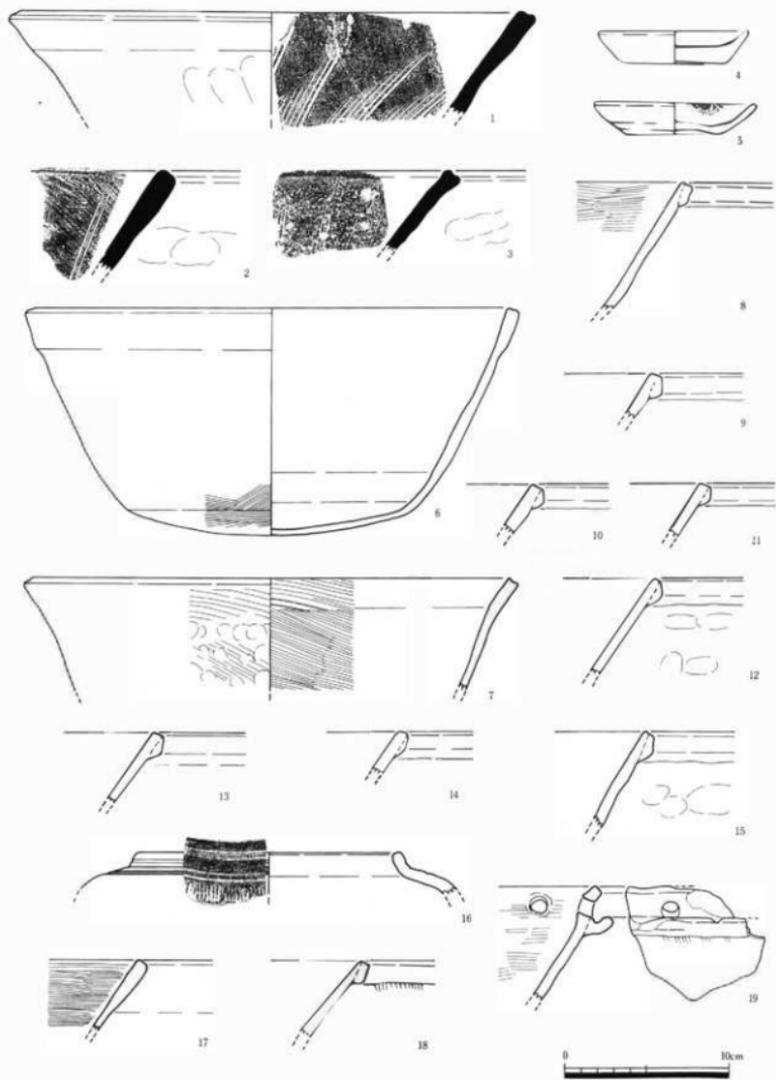


Fig. 29 SD005 D軸以北出土遺物(1)(S=1/3)

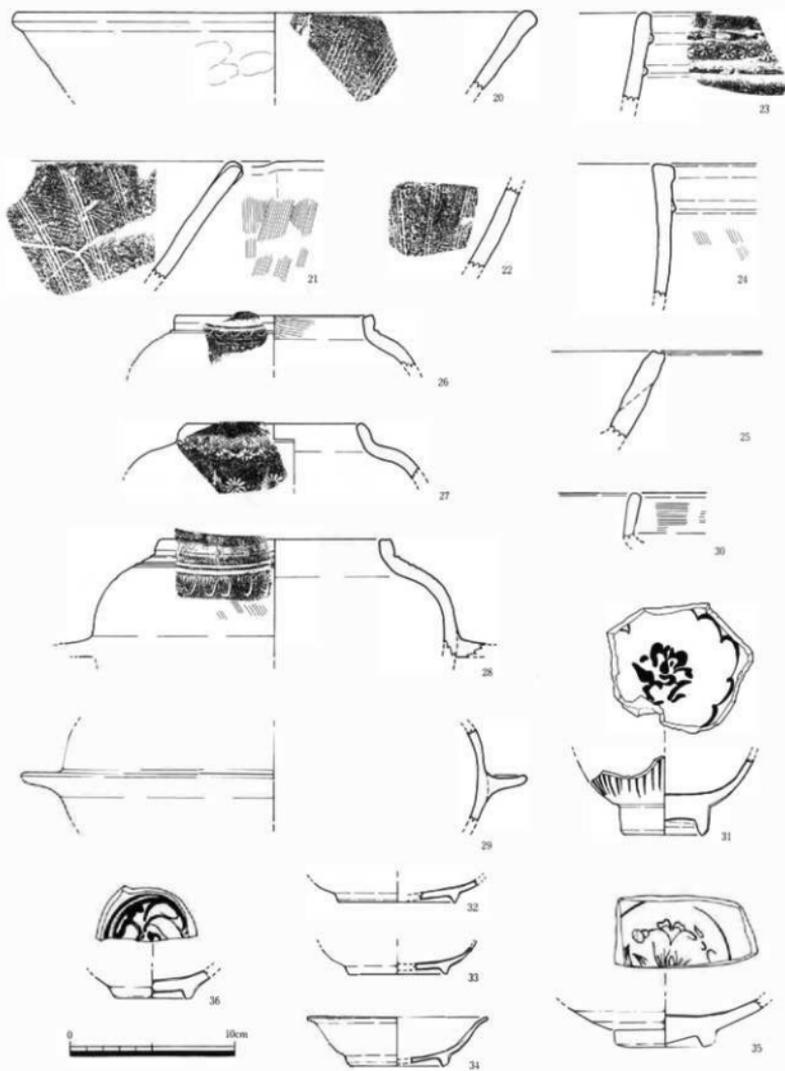


Fig. 30 SD005 D軸以北出土遺物(2)(S=1/3)

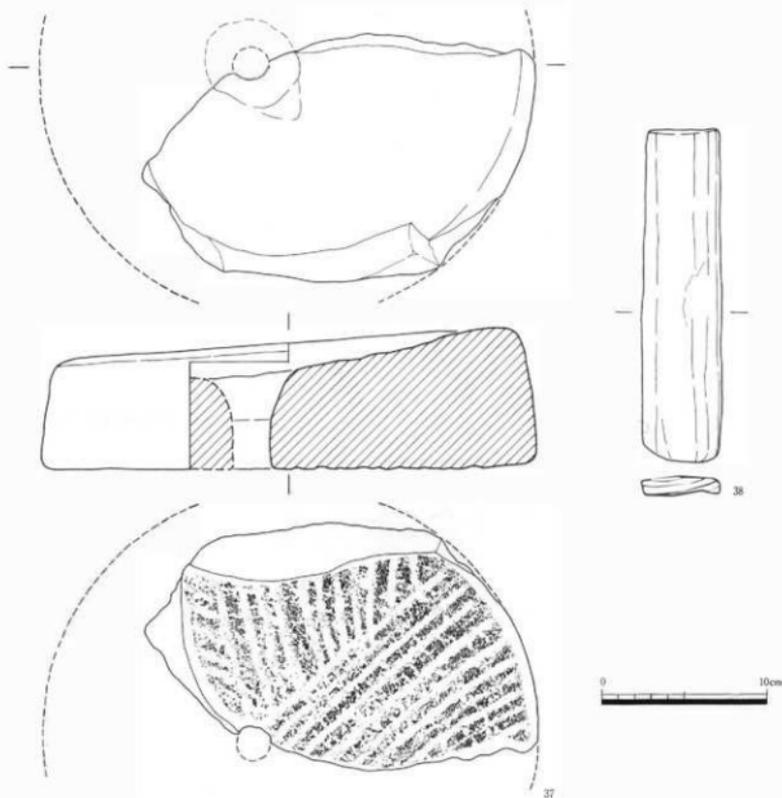


Fig. 31 SD005 D軸以北出土物(3) (S=1/3)

31は青磁碗の底部である。外面は幅の狭い蓮弁文か。内面見込には輪花状の区画の中に花文を施している。焼成は悪く、底部の胎土は淡橙色。外底面内部は施軸後に軸を掻き取る。15世紀後半～16世紀にかけてのものか。

32～34は磁器の皿である。32は青味がかった軸を施され、貫入が発達。33は焼成不良により軸葉がガラス化せず、乳白色。34は白色で高台に砂が付着。器形は16世紀代の染付皿に酷似。

35は白磁碗の底部である。内面見込にはほぼ円形の区画を施し、その中に草花文を施す。外面は、体部下半より下には施軸しない。口縁部がないがC類か。

36は染付の碗である。全面施軸後、高台下部の軸を掻き取る。

37は挽き白の上白である。上部は傾いており、供給口も中心より少しずれる。欠損部分に緩い彎曲が

認められ、この部分が把手の取り付け部分か。目の粗い凝灰岩製。

38は板材である。目立った加工痕跡はない。

SD005D軸以南出土遺物 (Fig. 32・33、P1.20-1)

- 1は須恵器の播鉢である。
- 2は土師器の鍋である。口縁端部を玉縁状に仕上げ、体部外面には厚く煤が付着する。形が大きく深さが無い。握ね鉢からの転用か。
- 3-12は土師器の鍋の口縁部細片である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。
- 13は土師器の鍋の底部破片である。
- 14は土師器の耳鍋の口縁部細片である。外側より穿孔。鐔の形状は不明。
- 15は土師器の鉢である。

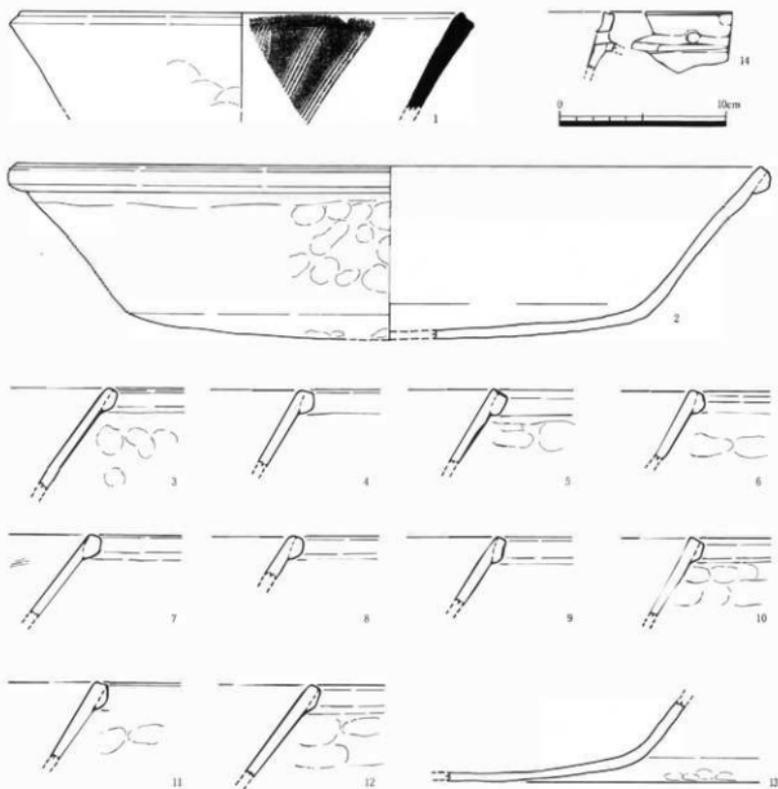


Fig. 32 SD005 D軸以南出土遺物 (1) (S=1/3)

16は瓦質土器の鍋の口縁部細片である。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

17は瓦質土器の火鉢の口縁部細片である。口縁端部に断面カマボコ状の突帯、その下に2条の断面三角突帯を持ち、それぞれの上に上から菊花文スタンプ、刺突文、半散竹管文を施す。

18は瓦質土器の火鉢もしくは火消壺の底部細片である。体部下位に断面三角形の貼り付け突帯を有する。

19は瓦質土器の浅鉢である。

20～22は瓦質土器の茶釜の口縁部である。いずれも肩部に2条の沈線を有するが、20は更に肩部のくびれ部に1条の沈線を施す。

23は青磁の碗の口縁部細片である。胎土は灰色～赤橙色を呈し、軸調も灰色がかった緑色。蓮弁はほとんど確認できないが、省略を受けた印象はない。

24は磁器の皿である。胎土は粗く黄白色。軸調は白味がかった緑色で、高台外面まで施軸するが、軸の一部は底部外面までかかる。

25は白磁の口縁部細片である。碗か。胎土は乳白色で黒色粒子を多く含む。軸調は白灰色で、軸は半透明で、粘性が非常に高く、大粒の軸垂れが見られる。施軸は丁寧ではなく、一部露胎する。

SD 0 1 7 出土遺物 (Fig. 34, P 1.20-2)

1～3は土師器の鍋である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げ、外面に煤の付着が見られるが、1が最も煤の付着が厚い。

SD 0 2 0 出土遺物 (Fig. 34, P 1.20-2)

4・5は土師器の鍋の口縁部である。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

6は土師器の鍋の底部細片である。底部外面には粗いハケ目を施している。

7は土師器の茶釜である。器面は磨耗している。

8は瓦質土器の鉢で、磨耗が激しい。

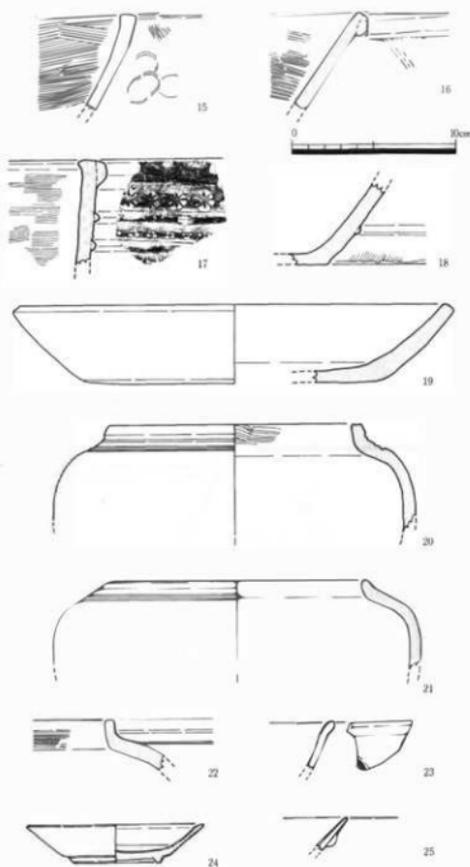


Fig. 33 SD 0 0 5 D軸以南出土遺物 (2)
(S = 1 / 3)

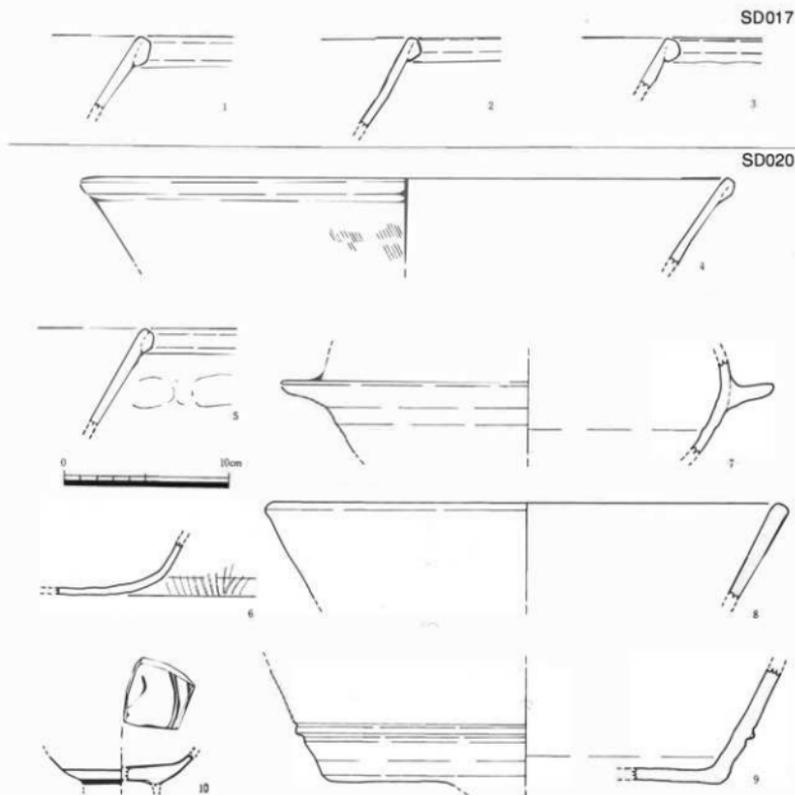


Fig.34 SD017・020出土遺物 (S=1/3)

9は瓦質土器の火鉢の底部である。色調は淡赤橙色。体部下方に三角突帯を貼り付け、その上下に2条の沈線を施す。

10は染付けの碗の底部である。内外面ともに呉須で円形の線を描き、内面見込には絵を施す。高台部を欠損しているが、底部外面まで青色の軸が施されている。

SD025出土遺物 (Fig.35~36、P1.21)

1は須恵器の甕の口縁部である。外面に格子タタキ、内面に工具ナデ痕跡が残る。

2は須恵器の播鉢の口縁部である。

3~7は土師器の鍋の口縁部である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。

8は土師器鍋の底部破片で、外面に厚く煤が付着する。

9は土師器の坏で、外面に4条の沈線を有する。

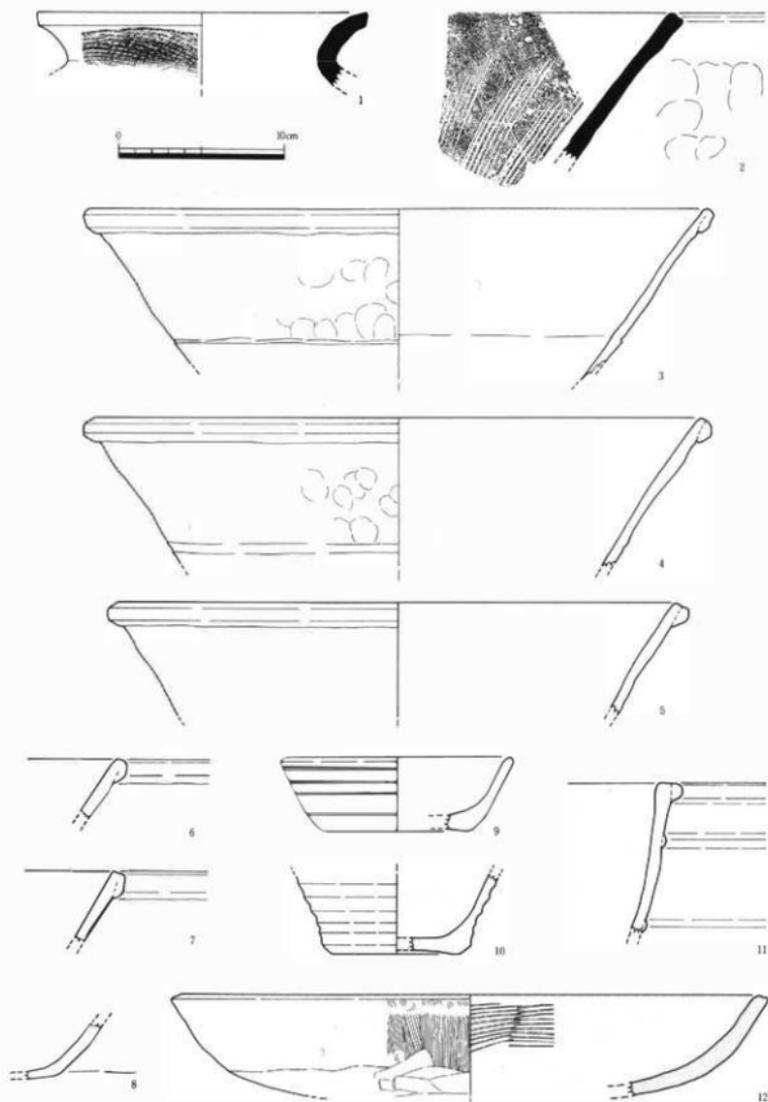


Fig 35 SD025出土遺物(1)(S=1/3)

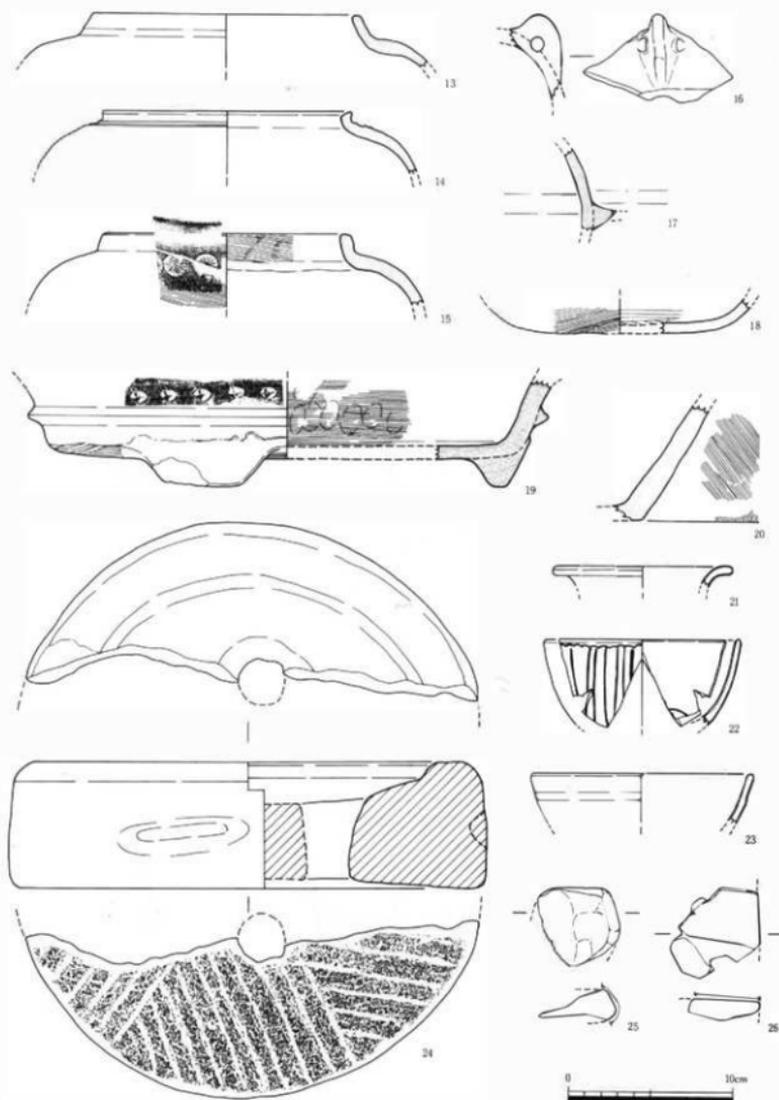


Fig. 36 SD 0 2 5 出土遺物 (2) (S=1/3)

- 10は土師器の坏もしくは壺の底部破片である。成形時の指の単位が強く残る。
- 11は土師器の火鉢である。口縁端部外面に断面カマボコ状の突帯、胴部外面に2条の突帯を貼り付ける。
- 12は瓦質土器の捏ね鉢である。底部はハケ目の後ヘラケズリ。
- 13～15は瓦質土器の茶釜の口縁部である。14は肩部外面のくびれ部より幅広の沈線と細い沈線により小さな突帯を表現し、その下に爪形文を施す。15は肩部外面にスタンプで菊花文を施す。
- 16・17は瓦質土器の茶釜の破片で、16は把手部分、17は鐙の部分である。
- 18は瓦質土器の茶釜の底部である。
- 19・20は瓦質土器の火鉢の底部である。19は三ヶ所に逆台形の脚を有すると思われる。胴部下方に三角突帯を有するが、断面の形状から本来は断面付近にもう1条の突帯を有していたと思われ、突帯の間に紐の結び目のようなスタンプを施している。
- 21は青磁の壺の口縁部破片である。乳白色の素地に明緑色の透明釉を施し、やや細かい貫入が発達する。
- 22は青磁の碗の口縁部である。淡灰色の素地に暗緑色の釉を施し、貫入が発達する。陰刻された蓮弁は細く、簡略化されている。内面にも陰刻が施されているが、どのような模様かは不明。
- 23は施軸陶器の碗の口縁部である。乳茶色の素地に淡緑茶色の釉を施し、貫入が発達する。SD028から同一個体と思われる施軸陶器の碗を出土しているが、接点が見当たらず、大きさもほぼ等しい為それぞれに掲載した。
- 24は挽き白の上白破片である。胴部側面に窪みを有するが、持ち運びの為の把手か。上面は縁の部分に堤防状の突起を有する。石材は良質の凝灰岩もしくは安山岩製。
- 25・26は砥石である。両者ともに白色の肌理の細かな石材である。

SD027出土遺物 (Fig. 37, P. 1.22-1)

4・5は土師器の鍋の口縁部細片である。ともに口縁端部を玉縁状に仕上げる。

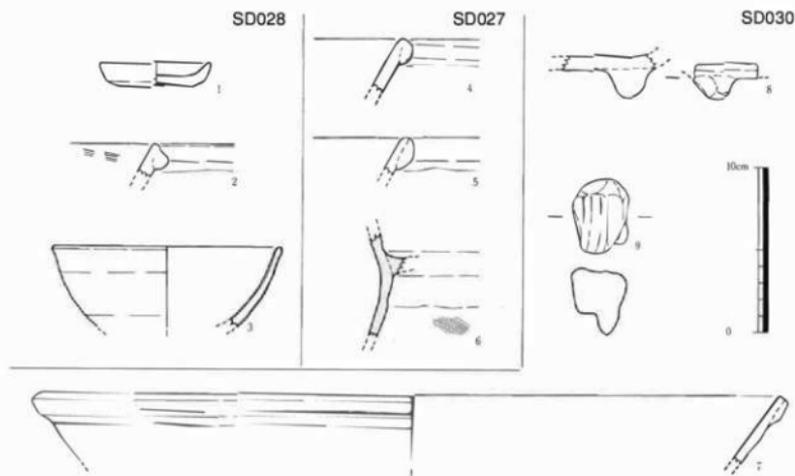


Fig. 37 SD027・028・030出土遺物 (S=1/3)

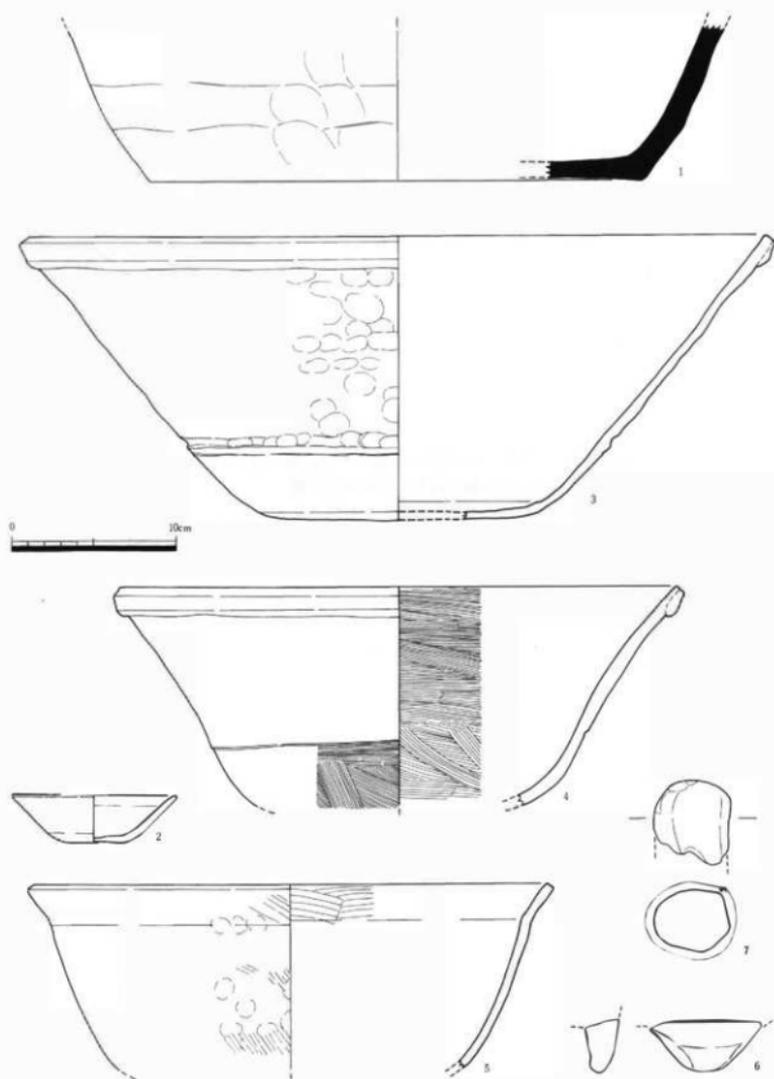


Fig. 38 SD035 出土遺物 (S=1/3)

6は瓦器の茶釜の胴部破片である。鈎の部分は欠落している。

SD028出土遺物 (Fig. 37, P I.22-1)

1は土師器の小皿である。底部回転糸切。

2は土師器の鍋の口縁部細片である。口縁端部より僅かに下がった所に玉縁を有する。

3は施釉陶器の口縁部細片で、SD025出土品 (Fig. 26-23) と同一個体の可能性が高い。

SD030出土遺物 (Fig. 37, P I.22-1)

7は土師器の鍋の口縁部で、口縁端部を玉縁状に仕上げる。

8は土師器の底部破片で、小さな脚を有する。香炉か。

9は焼粘土塊である。

SD035出土遺物 (Fig. 38, P I.22-2)

1は須恵器の甕の底部である。破片の一部はSD005から出土。SD035出土の破片は破損後に二次焼成を受けている。色調は外面赤茶色、内面赤紫色。胎土は粗く、3mm大の小石を含む。

2は土師器の坏である。

3・4は土師器の鍋である。口縁端部を玉縁状に仕上げ、体部下半部に1条の沈線を施す。

5は瓦質土器の鉢である。

6は瓦質土器の鉢の脚部で、弧状の平面を持つ。

7は軽石である。この辺では自然に産しないのでここに掲載した。面取りを受けているように見えるが用途は不明。浮子か。

SE040出土遺物 (Fig. 39, P I.22-3)

1は須恵器の鉢の口縁部である。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

2・3は土師器の坏である。2は回転糸切後、底部を粘土に付着させた痕跡が見られる。

4～6は土師器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。

7・8は瓦質土器の茶釜の胴部破片である。

9は瓦質土器の茶釜の口縁部～胴部破片である。口縁部に1条、肩部くびれ部に1条、肩部に2条の

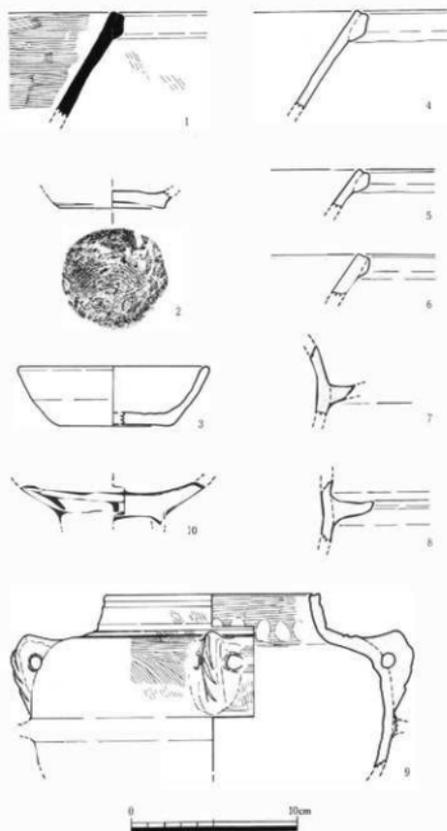


Fig. 39 SE040出土遺物 (S=1/3)

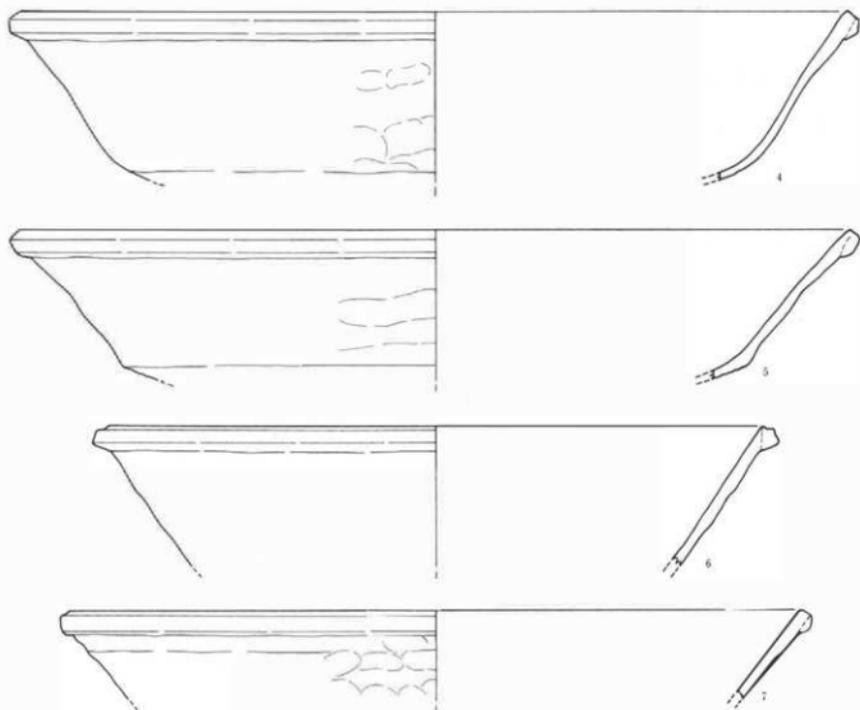
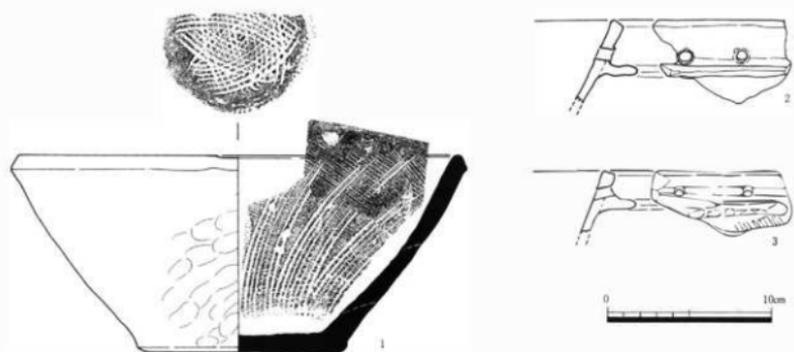


Fig. 40 SK 015 出土遺物 (1) (S=1/3)

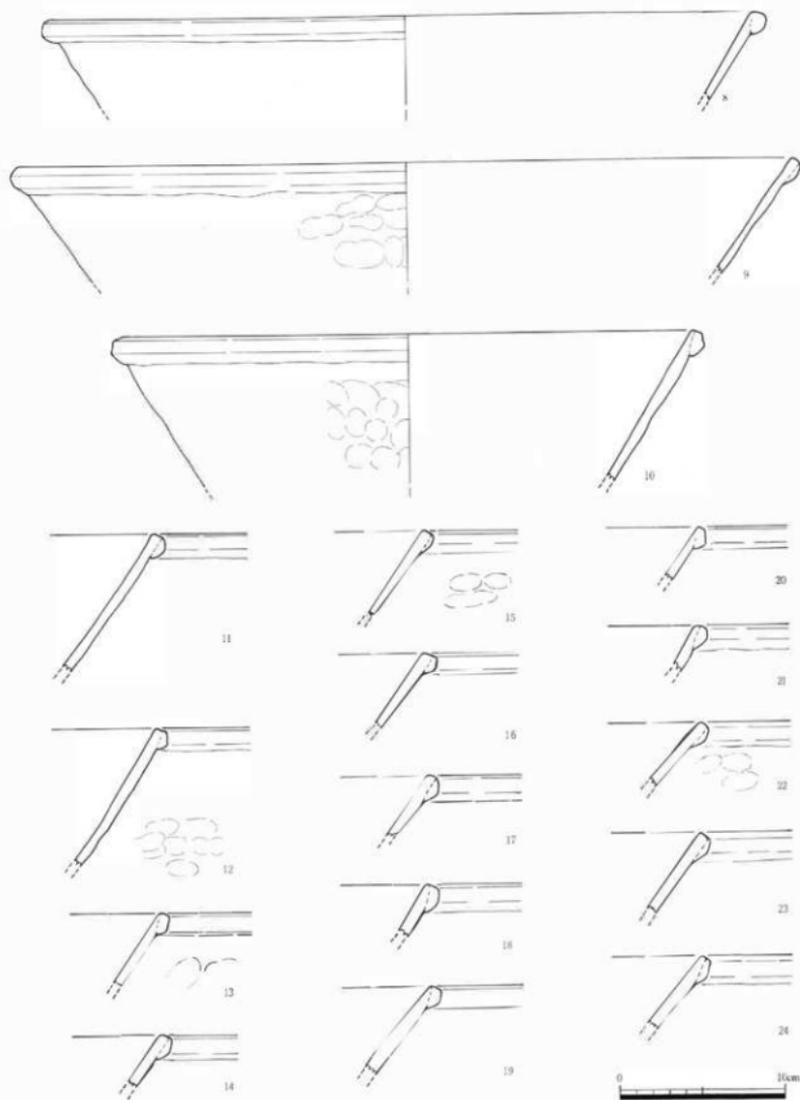


Fig. 41 SK 015出土遺物(2)(S=1/3)

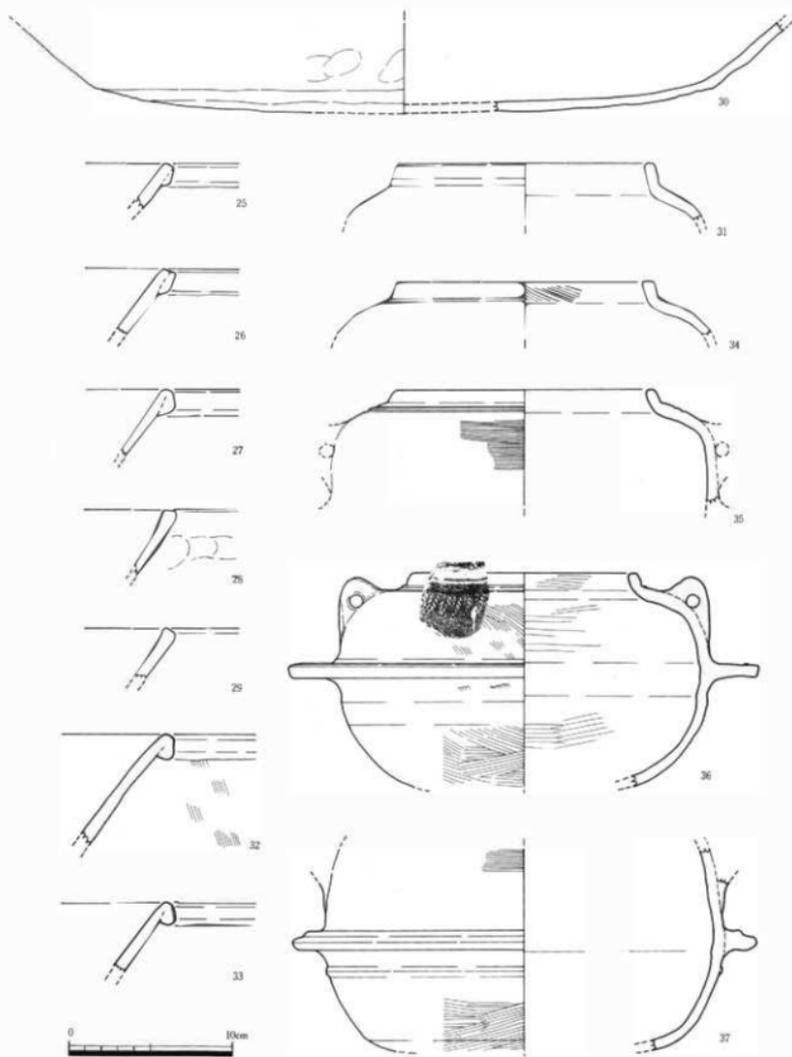


Fig. 42 SK 015 出土遺物 (3) (S = 1/3)

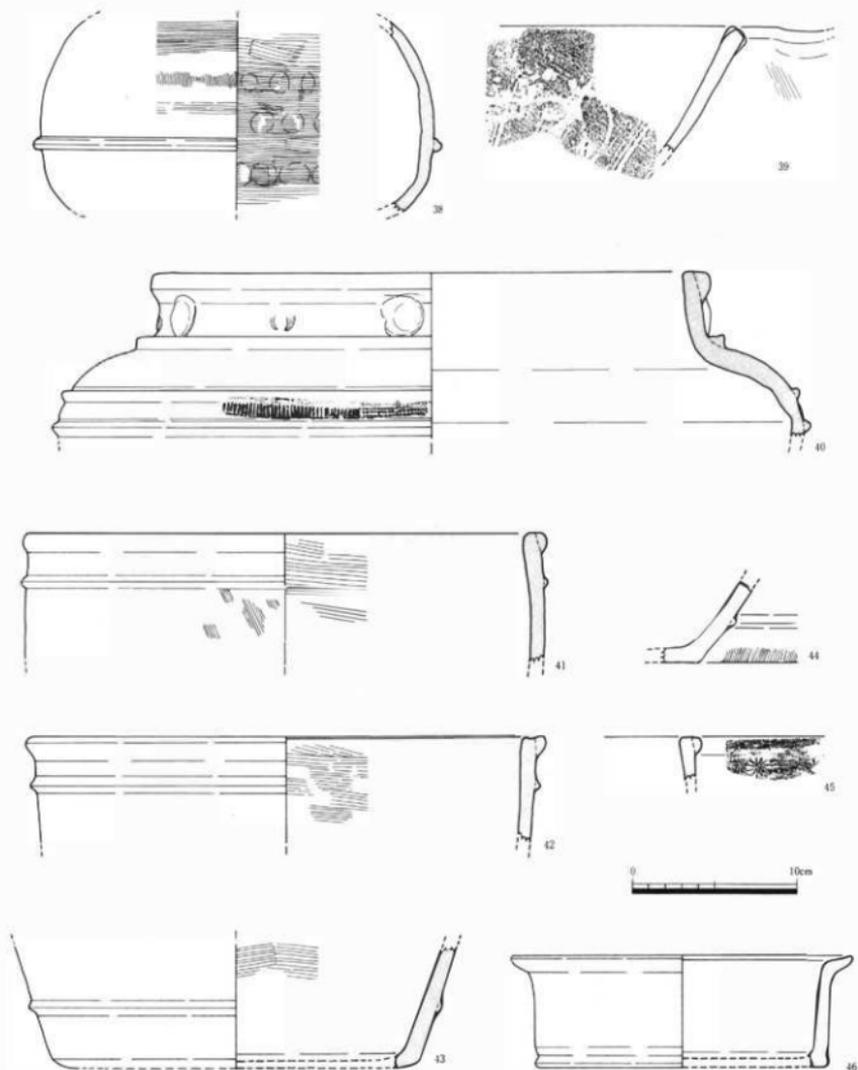


Fig. 43 SK 015 出土遺物 (4) (S = 1/3)

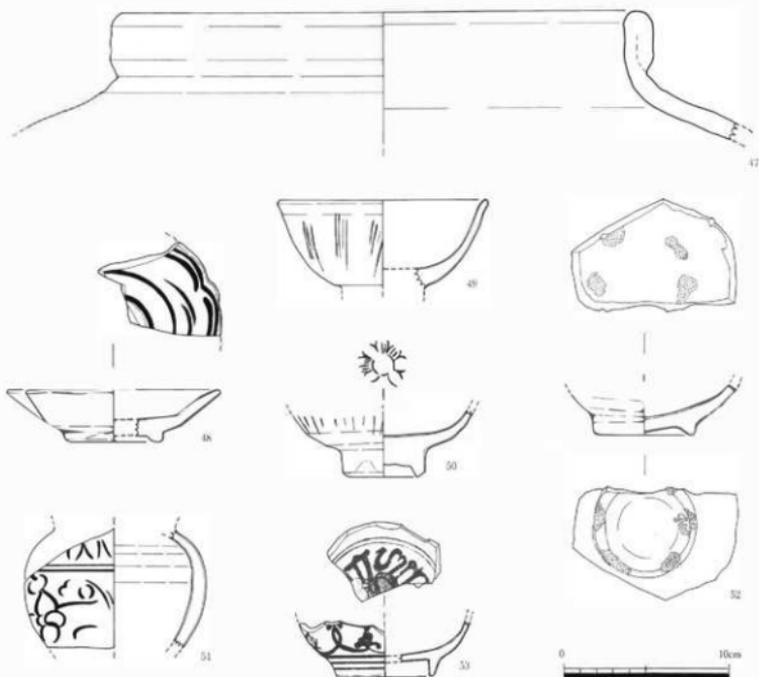


Fig. 44 SK 015 出土遺物 (5) (S=1/3)

沈線を施し、把手の部分には斜方向に3条の刻目を入れる。銜は欠損し、痕跡を残すのみ。

10は青磁の碗の底部破片である。外面に陰刻された文様が見られるが、蓮弁文か分割線かは不明。おそらく後者のものと思われる。胎土は黒色粒子を含む淡灰色。軸調は淡緑青色。残存する高台部分は内外面に施軸されているが、底部外面は軸を掻き取り赤色顔料を施す。底部内面は成形時の指ナデ痕跡が渦巻状に見られる。

S K 0 1 5 出土遺物 (Fig. 40~45, P l. 23~26-1)

1は須恵器の播鉢である。

2・3は土師器の耳鍋の口縁部破片である。2は内側から穿孔、3は外面から穿孔する。

4~29は土師器の鍋の口縁部破片である。4~27は口縁端部外面を玉縁状に仕上げる。28・29は内湾気味の素口縁。

30は土師器の鍋の底部である。底部外周は一段低く、未調整。

31は土師器の茶釜である。

32・33は瓦質土器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部外面を玉縁状に仕上げる。

34~36は瓦質土器の茶釜の口縁部破片である。34は肩部に小さな三角突帯を有する。35は肩部に2条

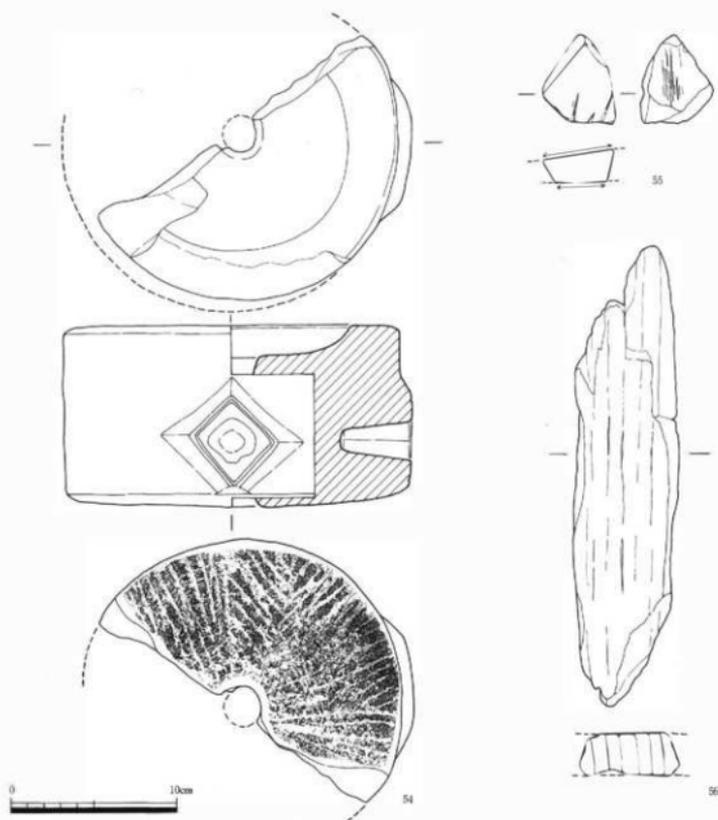


Fig. 45 SK015出土遺物(6)(S=1/3)

の沈線を施す。把手及び鐙は欠損。36は肩部くびれ部に2条の沈線、中にU字状に半葎竹管文、下位に下がり藤状のスタンプを施す。

37・38は瓦質土器の茶釜の胴部破片である。37は把手を欠損する。38は胴部に鏝をもたず、三角突帯を1条施す。

39は瓦質土器の搦鉢の口縁部破片である。片口となるが、この部分で欠損しており、どの程度張り出しているかは不明。

40は瓦質土器の甕の口縁部破片である。口縁部外面、肩部くびれ部に突帯を巡らし、その間に粘土円盤と円形様のスタンプを交互に施す。肩部にも2条の突帯を施し、その間に刻目を施す。

41・42は瓦質土器の火鉢の口縁部破片である。いずれも口縁部外面とその下位に突帯を施す。

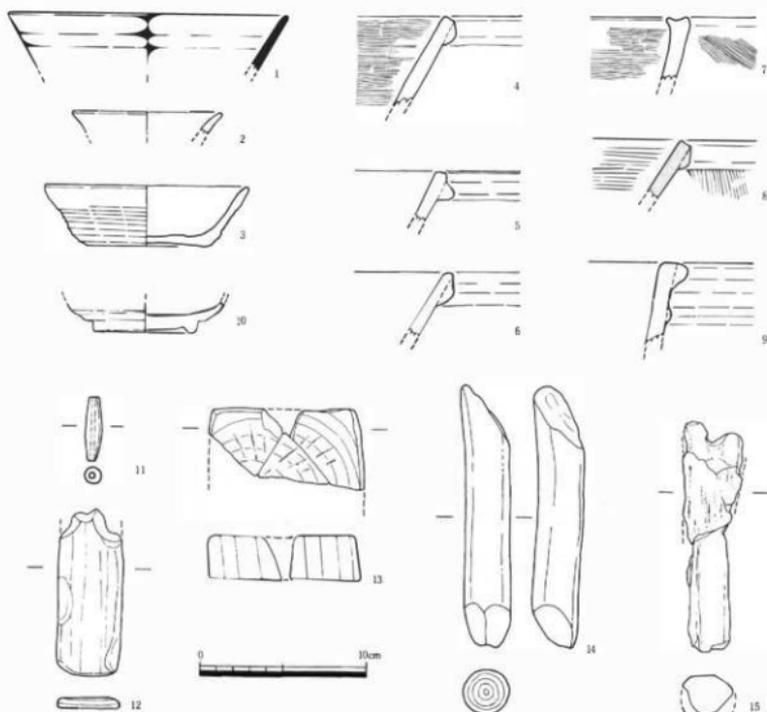


Fig. 46 SX010 出土遺物 (S=1/3)

- 43・44は瓦質土器の火鉢の底部破片である。いずれも下位に三角突帯を施す。
- 45は瓦質土器の鉢の口縁部破片である。口縁端部外面に突帯を施し、その下に菊花文スタンプを施す。
- 46は瓦質土器の浅鉢の破片である。口縁部を逆し字状に折り曲げ、端部を摘み上げる。
- 47は陶器の大甕の口縁部破片である。口縁部は粘土を折り曲げて肥厚させている。常滑焼の10期か。
- 48は青磁の輪花瓶である。胎土は淡灰色。軸調は淡青色の透明釉で貫入が発達。底部外面および高台内面と下部には施釉せず、高台外面も一部施釉されない。見込部分の釉は掻き取られている。内面は文様を陰刻するが、どのような物かは不明。
- 49は青磁の碗の口縁部破片である。胎土は淡灰色で黒色粒子を含む。軸調は淡灰緑色で粘性が強く内面には帯状に軸垂れが見られる。外面には4状の櫛目文を施している。
- 50は青磁の碗の底部破片である。胎土は淡灰色で、黒色粒子を含み粒子は粗い。軸調は青緑色の透明釉で貫入が発達。基本的に高台外面まで施釉する。外面には省略化された蓮弁文が施され、内面見込には花文を陰刻する。
- 51は青磁の水注の胴部破片である。胎土は淡灰色で黒色粒子を含む。軸調は暗茶緑色の透明釉で内外面ともに施し、貫入が見られる。体部外面には文様を陰刻するも影り込みが浅く不鮮明。

52は李朝の雑軸陶器の碗の底部である。胎土は淡茶色で黒色粒子を含む。軸調はやや青味がかった白色軸で、全面施軸。高台部および底部外面には気泡の痕跡が著しい。内面見込み部、高台底部および内面に砂目跡を残す。

53は染付けの皿の底部破片である。胎土は灰白色で黒色粒子を含む。呉須で施文の後やや青味がかった透明軸を施す。高台内部及び底部外面には不透明の白色軸を施す。高台畳付は露胎。呉須の色調から明染付と思われる。

54は艶き白の上白である。素材は肌理の細かな凝灰岩もしくは安山岩裂。上面は供給口に向かい皿状に窪み、周辺部を堤状に作る。把手の差し込み口は浮き彫りによる菱形の装飾が施される。出土した他の石臼に比べ精巧で径も小さい。茶白か。

55は砥石である。肌理の細かな白色の石材を用いている。

56は板材である。最下層からの出土。

SX010 出土遺物 (Fig.46, P1.26-2)

1は須恵器の坏の口縁部破片である。

2は土師器の皿の口縁部破片である。

3は土師器の坏である。SX010の北側テラス部分に直立する状態で出土。完形で、外面には煤の付着が見られる。

4～6は土師器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部外面を玉縁状に仕上げるが、他の遺構出土品に比べ、玉縁を下位に施している。

7は土師器の鉢である。

8は瓦質土器の鍋の口縁部破片である。口縁端部外面を玉縁状に作るが、突帯は小さい。

9は瓦質土器の鉢の口縁部破片である。口縁端部外面とその下位に突帯を施す。

10は白磁の皿の底部である。高台は削り出し高台。胎土は薄茶灰色で黒色粒子を含む。軸は淡灰緑色で内面および外面体部中位まで施す。内面は蛇の目状に軸を掻き取る。内面の軸を掻き取った部位および底部外面、高台には赤色顔料を施す。また内面には油煙状のものが付着する。

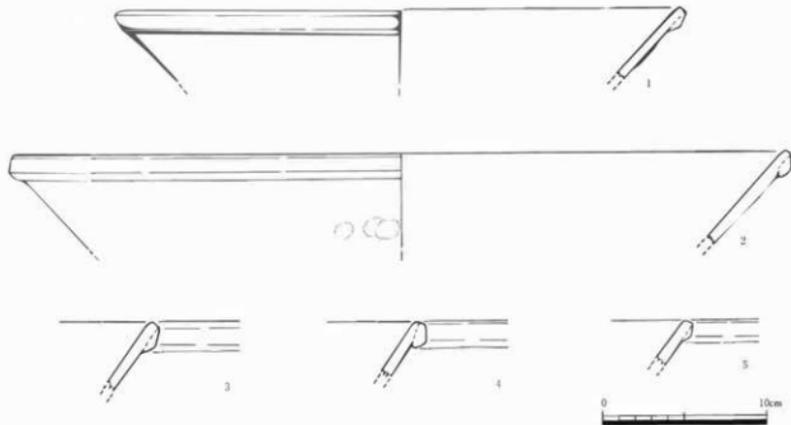
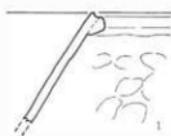


Fig. 47 SX016 出土遺物 (S=1/3)



11は土錘である。完存。

12～14は植物遺体である。12は板材、13は角材と思われる。14はSX010の北側に土留め状に巡らせてあった杭の一つである。この他に桃の種子を1点出土している。

15は獣骨の四肢骨である。片方の端部を欠損、周囲の鉄分を含み黄褐色に変化、風化が激しくどの部位であるかは判然としない。この他にろっ骨を出土したが、振り下げの際に破損してしまい固化しえない。ろっ骨は出土時には白色であったが、空気に触れた際に青色に変色している。

SX016 出土遺物 (Fig.47, P1.26-3)

1～5は土師器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。

Fig.48 その他の出土遺物 (S=1/3) その他の出土遺物 (Fig.48)

1は土師器の鍋の口縁部破片である。SP006出土。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

2は土錘である。検出時に出土。完存。

【参考文献】

森田 勉	『14～16世紀の白磁の形式分類と編年』	『貿易陶磁研究 2』	1982	日本貿易陶磁研究会
上田 秀夫	『14～16世紀の青磁の形式分類と編年』	『貿易陶磁研究 2』	1982	日本貿易陶磁研究会
小野 政敏	『14～16世紀の染付碗・皿の形式分類と編年』	『貿易陶磁研究 2』	1982	日本貿易陶磁研究会
中野 晴久	『中世陶器(常滑)』	『概説 中世の土器・陶磁器』	1995	中世土器研究会 編
宮崎 亮一 編	『太宰府発跡録Ⅲ-陶磁器分類編-』		2000	太宰府市教育委員会

第4章 結語

1 中折地内栗遺跡の性格について

文献に「折地」地名が初見されるのは『筑後市史』によると、筑後蒲池家文書の「宗歴・鎮連連署書状」である。この頃筑後平野では豊後大友氏と肥前龍造寺氏が争っており、名充人の山下城主上蒲池鎮連は龍造寺方から大友氏の武将戸次鎮連（立花道雪）に下り、早速龍造寺方の兵を撃ち破っている。これはその時の感状である。

前十三折地村付城近辺悪党相駱候所、被懸合、以一戦大手負被仕付、兩人打捕頸二持給候、御粉骨不及申候、弥無御油断、御才覚肝要候、猶重々可申述候、恐々謹言

九月十五日

宗歴（花押）

鎮連（花押）

鎮連参 御返人々申給へ

この文献には年号がないが、天正12年（1584）のことと解釈されている。これによれば16世紀後半に「折地村」が存在し、近くに「付城」が設けられていたことが分かる。筑後郷土史研究会の刊行物によると、元来折地と中折地はひとつの村落であったという。文禄4年（1595）12月、豊臣秀吉が立花宗茂に発した「筑後国知行方目録」（立花文書）には「おり地村」とあり、翌文禄5年4月、立花宗茂が家臣宛に発した知行宛行状には「中おり地村」と記載されている。この頃、両村の分村が行なわれた可能性があるが、明確ではない。また、調査区の北側には字折地小字「屋敷」が位置している。筑後市教育委員会では当初、小字の情況から中世居館の周辺部ではないかとして調査を行なった。

中折地内栗遺跡の横列、建物群の内、北側の区画のものについては全体像をつかめたとは言えない。調査区の東側には用水路が存在し、この水路を運搬路に利用したと考えれば、水路沿いに倉庫状の建造物を想定することも可能と考える。大型土壇SK015は土層観察の結果、滞水していたのは確実である。これを佐賀県佐賀市立野遺跡に見られる「溜め升遺構」と同じものと考えると、北側区画の空地は生産の為の空間と考えられる。

南側区画に関しては建築物が東辺と南辺に展開する。この部分では東側の用水路の終点部に近く、南側は昭和20年代の空中写真によれば宅地状になっている。調査区南端のSD035の筋は現在の土地区画の筋とはほぼおなじであり、これを東側に延長すると地光寺の西辺におつかる。この土地区画を意識させるものが遺跡成立時にも廻ることができると考えられないであろうか。ちなみに地光寺の創建は天文5年（1536）である。

調査区を縦横に走る各溝状遺構の内、SD001・005・020・030・035は、佐賀県神埼郡東脊振山村大曲A遺跡に見られるような、それぞれの空間を仕切る為の施設と考えられる。SD025群（025～029）も同様であろうが、検出しにくい埋土と同じ遺構と考えられるSD005との規格の違い、SD025とSD027（=029）の間にあるSD026・028の存在等、その有り様は同じとするには違和感を覚える。SD017はSK015へ水を導入する為の施設であるが、SD022はSK021との下場の高低差がなく、そのような機能を有していたとは考えられない。

SK010は調査区内ではSD001・005と接し、他にも2本の溝と接していたと考えられる。埋土観察は行なえなかったが、溜め池の護岸状の木杭列を確認している。これは佐賀県佐賀市立野遺跡に見られる「溜め井」と同じ構造を持った遺構と考えられる。

2 中折地内粟遺跡の出土遺物の年代について

今回の出土品中、磁器は白磁碗、白磁皿、青磁碗、青磁壺、明染付などが見られた。ここでは分類可能なものについて取り上げる。

S D 0 0 5 D軸以北出土の白磁碗 (Fig.30-35) については底部破片のみの出土であり、分類形式に当てはめ難い。軸調は灰色がかった透明軸で、体部外面中位まで施軸する。高台は削り出し高台で、高台底部外縁は浮き上がる。底部中央は大きく張り出しており、工具痕跡を明瞭に残している。内面見込は円筒状の沈線の中に花文の印文を持つ。軸調、施軸、印文などは太宰府分類 (森田分類) の白磁碗C-2群に近い印象を持つが、口縁部がない為、確証はない。白磁皿 (Fig.30-34) は外反した口縁部と高台を有し、砂敷の焼成である。器形的には上田編年の染付皿B群に近い。青磁碗 (Fig.30-31) は軸は全面施軸後底部外面を掻き取る。内面見込には輪花を陰刻し、花卉を印文する。外面には省略化された線刻蓮弁文を施している。上田分類のB-IV類。

S X 0 1 0 出土の白磁皿は太宰府分類の皿Ⅲ類に似ているが細部が異なり、これに当てはまらない。15世紀以降のものか。

S K 0 1 5 出土の青磁碗 (Fig.44-50) は内面見込に花卉印文、外面に線刻蓮弁文を施す。上田編年のB-IV類。もう一点の碗 (Fig.44-49) は、外面装飾が同安系青磁に近いが、軸は淡灰緑色で体部に全面施軸して。龍泉系の蓮弁文の省略形態と考えたい。青磁水注 (Fig.44-51) は福岡県久留米市安武城跡S K 44出土遺物と胎土・軸調に近い。

S D 0 2 5 出土の青磁碗 (Fig.36-22) は省略化された蓮弁文を有する。上田編年のB-IV類。

出土瓦器の分類は山村信榮の太宰府出土の瓦器分類に従う。茶釜はほとんどが球形のB類であり、箱形のA類は少ない。B類にはB-II類も見ることができる。火鉢も多くがA-II類で、他はほとんどない。播鉢はA-III類のみである。鍋は口縁端外面に突帯を施したE-a類である。

土師皿・土師碗の出土量は極めて少なく、十数点にすぎない。土師皿 (Fig.29-5) は久留米市の「海津城」分類では坏Aに入る。もう一点 (Fig.29-4) は磨滅が激しいが小皿D類となる。S X 0 1 0 出土土師碗 (Fig.46-3) は当てはめる所を見つけれなかったが山本編年に言う所の大坏の類か。

白磁碗C-2類は15世紀前後、青磁碗B-IV類は15世紀中葉から16世紀末、染付皿B群は15世紀後半から16世紀後半に位置付けられる。瓦器の茶釜B類はI-II類が共に存在するので16世紀前半か。鉢 (播鉢) は15世紀頃から増加するタイプのものである。鍋は14~15世紀のものである。これらから中折地内粟遺跡の年代は15世紀を中心とする中世後半と考えられる。

3 S X 0 1 0 出土の四肢骨について

S X 0 1 0 からは、鉄分が多く付着した風化の著しい四肢骨と、出土時点では白色であったが空気に触れ変色に変色したろっ骨片を出土した。このような四肢骨の出土例は筑後市内では2例目であり、1例目は2002年に実施した西牟田上京手遺跡がある。

西牟田出土例は報告書の刊行後、岡山理科大学の富岡直人氏に実現していただく機会を得た。西牟田資料は鉄分の付着により表面観察が不可能であり、僅かに残る海綿質により哺乳綱と判断された。部位は不明である。今後、薄片資料を作成し観察することで、目の同定やどの部位の資料であるかを判断することは可能とのことであった。

中折地資料も状況は極めて近く、部位の決定等は確実とは言えない。今後、この資料に関して御教示を頂けたら幸いである。

4 結び

筑後市内での大きな中世集落の調査事例は鶴田中市ノ塚遺跡、長崎坊田遺跡に次いで3例目となった。これらの時期は中世中～後期とされ、中折地内栗遺跡に近い。しかしながら、その性格は中世荘園と絡めて考察されており、遺構の配置状況から居館や防脚拠点として考えられている。

中折地内栗遺跡は、中世、水田荘(天満宮安楽寺領)に属し、南の下妻荘(天満宮安楽寺領)との境に近い。しかし佐賀平野の中世遺跡の調査事例と比較すると、中世居館(城館)ではなく中世聚落(村落)のあり方に共通点を見いだせる。しかしながら、今回の調査区内には人が居住しうる建物は多くなく、村落全体を復元し得る資料とはいえない。また、佐賀平野と筑後平野の聚落の明確な共通性・相違点を明確にできておらず、今後の聚落調査に多くの課題を残したと言える。

【参考文献】

- | | | | |
|--------------|---------------------------------|------|-------------------|
| 筑紫 豊 監修 | 『筑後市神社仏閣調査書(八女郡水田村篇)』 | 1968 | 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 |
| 森田 勉 | 『14～16世紀の白磁の形式分類と編年』 | | |
| | 『貿易陶磁研究 2』 | 1982 | 日本貿易陶磁研究会 |
| 上田 秀夫 | 『14～16世紀の青磁碗の分類について』 | | |
| | 『貿易陶磁研究 2』 | 1982 | 日本貿易陶磁研究会 |
| 小野 政敏 | 『14～16世紀の宋付碗・皿の分類とその年代』 | | |
| | 『貿易陶磁研究 2』 | 1982 | 日本貿易陶磁研究会 |
| 山本 信夫 | 『統計上の土器 - 歴史時代土器の編年研究によせて -』 | | |
| | 『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』 | 1985 | 乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 |
| 右田 乙次郎 | 『筑後古島郷土史』 | 1985 | 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 |
| 右田 乙次郎 | 『筑後下妻郷土史』 | 1985 | 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 |
| 山村 俊榮 | 『太宰府出土の瓦質土器』 『中近世土器の基礎研究 VI』 | 1990 | 日本中世土器研究会 |
| 白木 守 編 | 『安武遺跡群Ⅱ』 | 1994 | 久留米市教育委員会 |
| 中野 晴久 | 『中世陶器(常滑)』 『概説 中世の土器・陶磁器』 | 1995 | 中世土器研究会 編 |
| 宮武 正登 | 『佐賀平野の村と館 - 中世村落の成立と変化 -』 | | |
| | 『中世の風景を読む 7 東シナ海を囲む中世世界』 | 1995 | 新人物往來社 |
| 前田 達男 | 『増田遺跡群Ⅱ』 『N-4』 | 1995 | 佐賀市教育委員会 |
| 角 信一郎 | 『浦田遺跡』 | 1995 | 佐賀市教育委員会 |
| 西田 敏 | 『御手水遺跡』 『川久保松原遺跡1・2・3区 3-(3)』 | | |
| | 『川久保遺跡1区 3-(3)』 | 1995 | 佐賀市教育委員会 |
| 前田 達男 | 『友貞遺跡』 『-7区の調査-』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 山口 一郎 | 『野田遺跡』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 古賀 章彦 | 『東迎寺2・3区 若宮原遺跡』 『東迎寺遺跡3区の記録』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 三代 俊幸 | 『西千布遺跡1区 友貞遺跡8・9・10・11区』 『VI-5』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 角 信一郎 | 『修理田遺跡』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 角 信一郎 | 『忠兵衛屋敷遺跡』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 角 信一郎 編 | 『下和泉一本館遺跡』 『V-3』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 前田 達男 編 | 『東千布遺跡Ⅱ』 | 1996 | 佐賀市教育委員会 |
| 前田 達男 | 『東千布遺跡Ⅲ』 | 1997 | 佐賀市教育委員会 |
| 前田 達男 編 | 『西千布遺跡2～7区 友貞遺跡7・12区』 『V.』 | 1997 | 佐賀市教育委員会 |
| 筑後市史編さん委員会・編 | 『筑後市史』 | 1998 | 筑後市史編さん委員会 |
| 橋本 征士 編 | 『久富遺跡2区 友貞遺跡13～17区 東千布遺跡4A～4B区』 | | |
| | 『N. 久富遺跡2区の記録』 | 1998 | 佐賀市教育委員会 |
| 小林 勇作 | 『長崎坊田遺跡』 | 1999 | 筑後市教育委員会 |
| 橋本 征士 編 | 『江瀬遺跡9区 森田遺跡1区』 『V.』～『X.』 | 1999 | 佐賀市教育委員会 |
| 古賀 章彦 | 『長瀬一本杉遺跡 高木城跡』 『N.』 | 1999 | 佐賀市教育委員会 |
| 古賀 章彦 編 | 『江瀬遺跡1～8区』 | 1999 | 佐賀市教育委員会 |
| 宮崎 亮一 編 | 『太宰府桑坊跡Ⅳ - 陶磁器分類編 -』 | 2000 | 太宰府市教育委員会 |
| 小林 勇作 | 『筑後市内遺跡群 N』 | 2002 | 筑後市教育委員会 |
| 立石 真二 | 『西牟田上京手遺跡』 | 2003 | 筑後市教育委員会 |

Tab.2 掘立柱建物一覧

序	遺構番号	アフリット	直径 (mm)	総長 (m)	直径 (m)	土層	平面形状	遺 出	時期	備考
6	SB070	D15-D16	4.4	22+α	104+α	S/F 20E	3期木1期+α	土師器、瓦類、石片、土釘		S.P003-004-012
6	SB075	C17-D18	4.1	21+α	70+α	S/F 20E	2期木1期+α			
7	SB085	C12-D13	4.5-4.3	3	13.6	N/F 2E	3期木1期			
6	SB095	D9-E10	2.6	24-2.5	6.3	S/F 20E	1期木1期	木釘		S.P001
9	SB100	B4-C5	3.9	3	8.5+α	N/F 20E	2期木1期	土師器		S.P007
10-11	SB105	B1~D4	6.2	39-34	23.8	N/F 20E	3期木1期	土師器、瓦類		S.P001-004-036-038-039
12-13	SB110	D2-E5	4.1-4.2	2.1	9	N/F 2E	2期木1期	土師器、焼酎土甕		S.P019-043-044
14	SB115	E3-F4	3.9-3.6	2.9	10.7	S/F 20E	2期木1期	瓦類		S.P047

Tab.3 出土土器一覧

序	No.	遺構	種類	形状	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	残存	数量 (1/10)	出土	出土	時期	備考	
25	2	SB105	瓦器土器	赤瓦	(12.0)	(17.0)	(4.0)	欠片	1/5	赤褐色	残片	中世	中世	S.P039, 赤瓦7片、厚板瓦1片、山打土瓦類
27	3	SB105	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	S.P039, 土師器1個、山打土瓦類
27	4	SB110	焼酎土甕	焼酎土甕	11.0	8.8	4.5	1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	S.P019, 9, 245, 0
28	1	SD001	焼酎土甕	焼酎土甕				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	赤瓦、土師器
28	2	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	3	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	4	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	5	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	6	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	7	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	8	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	9	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	10	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	11	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	12	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	13	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	14	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	15	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	16	SD001	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	17	SK044	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
28	18	SK044	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	中世	中世	土師器
29	1	SD095D01	土師器	土師器	(12.0)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	2	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	3	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	4	SD095D01	土師器	土師器	19.2)	6.2	21	1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	5	SD095D01	土師器	土師器	10.0	5.7	20.0	1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	6	SD095D01	土師器	土師器	(12.0)	17.5	14.1	1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	7	SD095D01	土師器	土師器	(12.0)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	8	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	9	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	10	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	11	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	12	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	13	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	14	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	15	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	16	SD095D01	土師器	土師器	(12.0)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	17	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	18	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	19	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	20	SD095D01	土師器	土師器	(12.0)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	21	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	22	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	23	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	24	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	25	SD095D01	土師器	土師器	(12.0)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	26	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	27	SD095D01	土師器	土師器	(10.0)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	28	SD095D01	土師器	土師器	(14.3)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	29	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	30	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	31	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	32	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	33	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	34	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	35	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
29	36	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	1	SD095D01	土師器	土師器	(29.0)			1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	2	SD095D01	土師器	土師器	(14.0)	11.1	10.7	1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	3	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	4	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	5	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	6	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	7	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器
32	8	SD095D01	土師器	土師器				1/1	1/1	赤褐色	1個	良好	良好	土師器

Fig.	No.	遺物	種類	形状	寸法 (mm)	厚さ (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	材質	色調・形状	加工	出土	備考 (時期)
40	5	S.K.O.1.5	土師器	鉢	φ210	130.0			1種磁器06	黄褐色	1~2mmの粒状少量、角閃石、金粟母	良好	土師、弥生前期、内陸部化物件
40	6	S.K.O.1.5	土師器	鉢	φ210				1種磁器06	黄褐色	磁粒粒少量、金粟母	良好	土師、弥生前期
40	7	S.K.O.1.5	土師器	鉢	φ210				1種磁器06	黄褐色	1~2mmの粒状少量、角閃石、金粟母	中々良	土師
41	8	S.K.O.1.5	土師器	鉢	φ180				1種磁器02	黄褐色	磁粒粒少量、角閃石、金粟母	中々良	土師、弥生前期、内陸部化物件
41	9	S.K.O.1.5	土師器	鉢	φ180				1種磁器02	黄褐色	1mmの粒状中々多い、金粟母	中々良	土師、弥生前期、内陸部化物件
41	10	S.K.O.1.5	土師器	鉢	φ180				1種磁器06	黄褐色	磁粒粒少量、金粟母	良好	土師、弥生前期、内陸部化物件
41	11	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	磁粒粒少量、角閃石、金粟母	中々良	土師、弥生前期、内陸部化物件
41	12	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状、角閃石、金粟母	中々良	土師、弥生前期
41	13	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状中々多い、金粟母	中々良	土師
41	14	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状	中々良	土師、弥生前期
41	15	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	磁粒粒少ない、金粟母	良好	土師、弥生前期
41	16	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状多い、金粟母	中々良	土師
41	17	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状中々多い、金粟母	中々良	土師、弥生前期
41	18	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	明赤褐色	磁粒粒少量、赤色粒、金粟母	中々良	土師
41	19	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1mmの粒状中々多い、角閃石、金粟母	中々良	土師、弥生前期
41	20	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状多い、角閃石、金粟母	中々良	土師、弥生前期
41	21	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1mmの粒状少量、金粟母	中々良	土師
41	22	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	磁粒粒少ない、金粟母	中々良	土師、弥生前期
41	23	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1mmの粒状、角閃石中々多い	中々良	土師、弥生前期
41	24	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状中々多い	中々良	土師、弥生前期
42	25	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状、金粟母	中々良	土師、弥生前期
42	26	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	磁粒粒少ない、金粟母	中々良	土師、弥生前期
42	27	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	赤褐色	1~2mmの粒状中々多い	中々良	土師
42	28	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1~2mmの粒状中々多い、金粟母	中々良	弥生前期
42	29	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1mmの粒状中々多い、角閃石、金粟母	中々良	弥生前期、内陸部化物件
42	30	S.K.O.1.5	土師器	鉢					1種磁器07	黄褐色	1mmの粒状少量、角閃石、金粟母	良好	弥生前期、内陸部化物件
42	31	S.K.O.1.5	土師器	高足	φ160				1種磁器08	明赤褐色	磁粒	中々良	弥生前期、内陸部化物件
42	32	S.K.O.1.5	瓦葺土器	鉢					1種磁器07	黄褐色/赤褐色	磁粒	中々良	土師
42	33	S.K.O.1.5	瓦葺土器	鉢					1種磁器07	赤褐色/赤褐色	磁粒	中々良	土師
42	34	S.K.O.1.5	瓦葺土器	高足	φ160				1種磁器08	赤褐色/赤褐色	磁粒	中々良	土師
42	35	S.K.O.1.5	瓦葺土器	高足	φ160				1種磁器04	赤褐色	磁粒	中々良	山形A期
42	36	S.K.O.1.5	瓦葺土器	高足	φ160				1種磁器08	赤褐色	磁粒	良好	山形B期後継器土器A期、弥生前期、弥生前期
42	37	S.K.O.1.5	瓦葺土器	高足		19.2			1種磁器02	赤褐色	磁粒	良好	山形B期?
42	38	S.K.O.1.5	瓦葺土器	加					1種磁器06	赤褐色	磁粒粒粒少量	中々良	
42	39	S.K.O.1.5	瓦葺土器	罐形					1種磁器07	赤褐色	1~2mmの粒状中々多い	不良	山形A期、山形B期、彌生前期
42	40	S.K.O.1.5	瓦葺土器	大甕	φ140				1種磁器04	赤褐色	磁粒	中々良	山形B期、彌生前期
42	41	S.K.O.1.5	瓦葺土器	大甕	φ120				1種磁器06	明赤褐色	磁粒	中々良	土師
42	42	S.K.O.1.5	瓦葺土器	大甕	φ120				1種磁器06	赤褐色/赤褐色	磁粒	中々良	土師
42	43	S.K.O.1.5	瓦葺土器	大甕	φ120				1種磁器06	赤褐色	赤色粒少量	中々良	土師
42	44	S.K.O.1.5	瓦葺土器	大甕					1種磁器07	赤褐色	磁粒	良好	
42	45	S.K.O.1.5	瓦葺土器	大甕	φ120				1種磁器07	赤褐色	磁粒	中々良	弥生A期、土師
42	46	S.K.O.1.5	瓦葺土器	浅鉢	φ100	6.8			1種磁器06	赤褐色	磁粒	中々良	土師
42	47	S.K.O.1.5	黄銅鍍	壺	φ130				1種磁器08	黄褐色	1~2mmの粒状少量	良好	山形、山形B期
42	48	S.K.O.1.5	黄銅鍍	壺	φ130	16.0	3.2		1種磁器08	赤褐色/赤褐色	磁粒	良好	内陸部、弥生前期、弥生前期
42	49	S.K.O.1.5	黄銅鍍	壺	φ120				1種磁器04	赤褐色/赤褐色	赤褐色粒少量	良好	山形B期後の彌生前期
42	50	S.K.O.1.5	黄銅鍍	壺	φ120	15.0			1種磁器06	赤褐色/赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期、内陸部化物件、土師、弥生前期
42	51	S.K.O.1.5	黄銅鍍	水注					1種磁器06	赤褐色/赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期、内陸部化物件
42	52	S.K.O.1.5	黄銅鍍	壺		6.3			1種磁器06	赤褐色/赤褐色	赤褐色/赤褐色	良好	山形、内陸部、山形B期、弥生前期
42	53	S.K.O.1.5	黄銅鍍	壺		16.0			1種磁器06	赤褐色/赤褐色	赤褐色/赤褐色	良好	山形B期後の弥生前期
42	54	S.K.O.1.0	黄銅鍍	壺	φ170				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	55	S.K.O.1.0	黄銅鍍	小甕	φ100				1種磁器04	黄褐色	黄褐色	良好	弥生前期
42	56	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ124	7.2	3.7		1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期、弥生前期、弥生前期
42	57	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	58	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	1~2mmの粒状中々多い	中々良	土師
42	59	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	1~2mmの粒状中々多い、角閃石、金粟母	不良	土師
42	60	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	1mmの粒状中々多い、角閃石	良好	土師
42	61	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色/赤褐色	磁粒	中々良	土師、弥生前期
42	62	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色/赤褐色	磁粒	不良	土師
42	63	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器06	赤褐色	磁粒	良好	弥生前期、弥生前期、弥生前期
42	64	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器06	赤褐色	1~2mmの粒状中々多い、金粟母、角閃石	中々良	土師
42	65	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	66	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	67	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	68	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	69	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	70	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕					1種磁器06	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期、弥生前期、弥生前期
42	71	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	72	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	73	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	74	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	75	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	76	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	77	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	78	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	79	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	80	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	81	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	82	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	83	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	84	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	85	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	86	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	87	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	88	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	89	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	90	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	91	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	92	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	93	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	94	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	95	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	96	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	97	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	98	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	99	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期
42	100	S.K.O.1.0	黄銅鍍	甕	φ110				1種磁器07	赤褐色	赤褐色	良好	弥生前期

Tab.4 出土土器一覽

Fig.	No.	遺物	種類	形状	全長 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	材質	出土	時期	備考
31	37	S.D.0.3.5	黄銅鍍	壺	φ110				6.7~6.5	黄銅鍍	弥生前期		
32	38	S.D.0.2.5	黄銅鍍	壺	φ123			7.2		黄銅鍍	弥生前期		
33	25	S.D.0.2.5	黄銅鍍	壺					28.0	黄銅鍍	弥生前期		中央2号内陸部・弥生前期、彌生前期、弥生前期
34	26	S.D.0.2.5	黄銅鍍	壺					34.7	黄銅鍍	弥生前期		
35	39	S.D.0.3.5	黄銅鍍	壺					16.4	黄銅鍍	弥生前期		山形?
43	54	S.K.O.1.5	黄銅鍍	甕	φ110	φ90.4		11.0		黄銅鍍	弥生前期		山形B期

Fig.	No.	遺物	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	器厚 (cm)	重量 (g)	材質	保存量	時期	備考
43	55	SX015	磁石					磁石 (瓦葺破?)	破片		

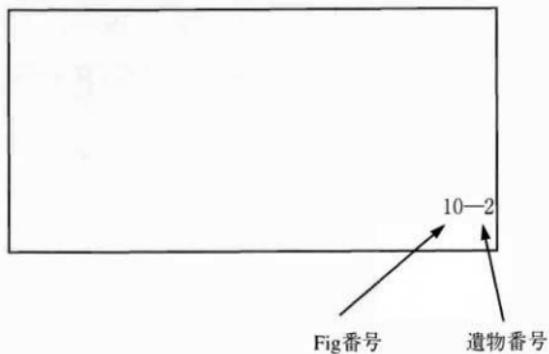
Tab.5 出土木器一覽

Fig.	No.	遺物	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	器厚 (cm)	断面形	木材	保存量	備考
22	1	S0005	木杵	27.2	6.0~8.0		楕円形		炭化腐風化激しいが、良好	S P103, 柱を突く為の遺物?
31	36	S1115磁石	磁石	20.2	4.8	1.1	正方形			
45	56	SX015	磁石	22.0	6.2	2.5	台形		炭化激しい	
46	17	SX010	磁石	10.0	3.8	0.7				
46	13	SX010	磁石	9.2		2.7			炭化激しい	
46	14	SX010	木杵	14.0	2.7		円形		炭化腐のA	遺物用木杵列

P L A T E

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



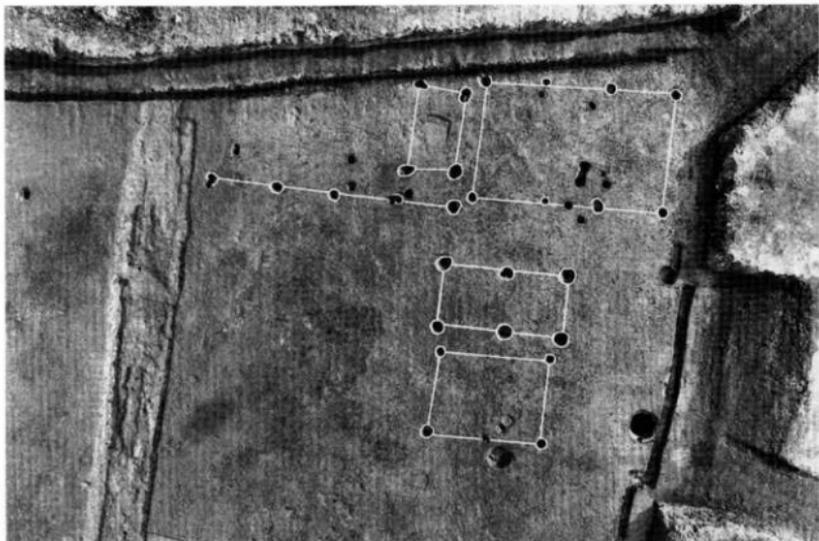
Pl. 1



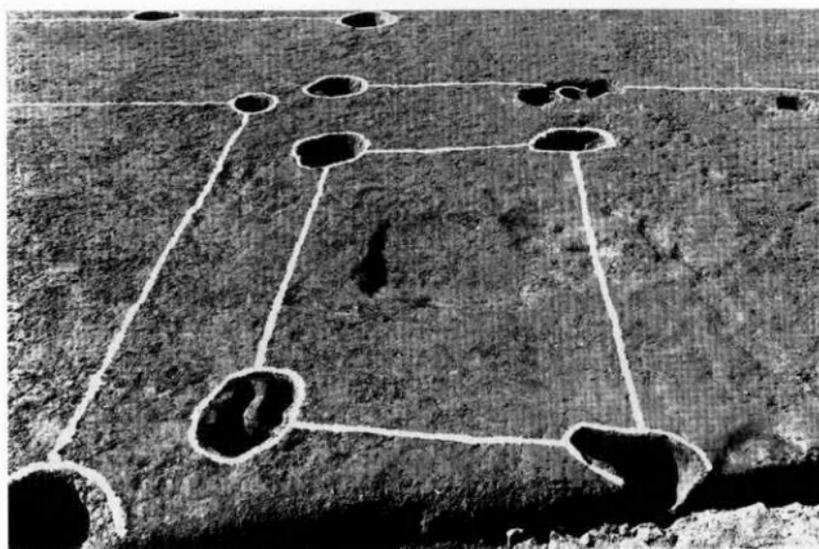
1 中折地内渠遺跡 全景 (南から)



2 中折地内渠遺跡 全景 (上空から・画面上方が東)

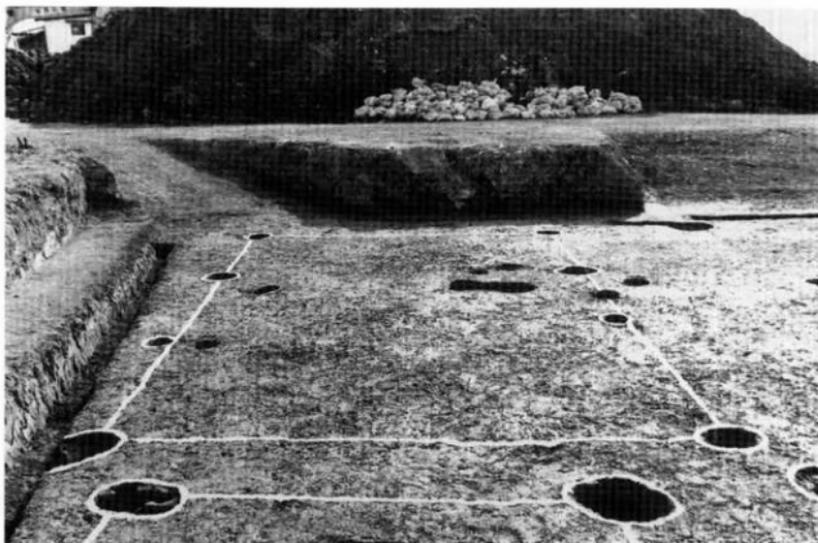


1 南側掘立柱建物群 (上空から・画面上方が東)

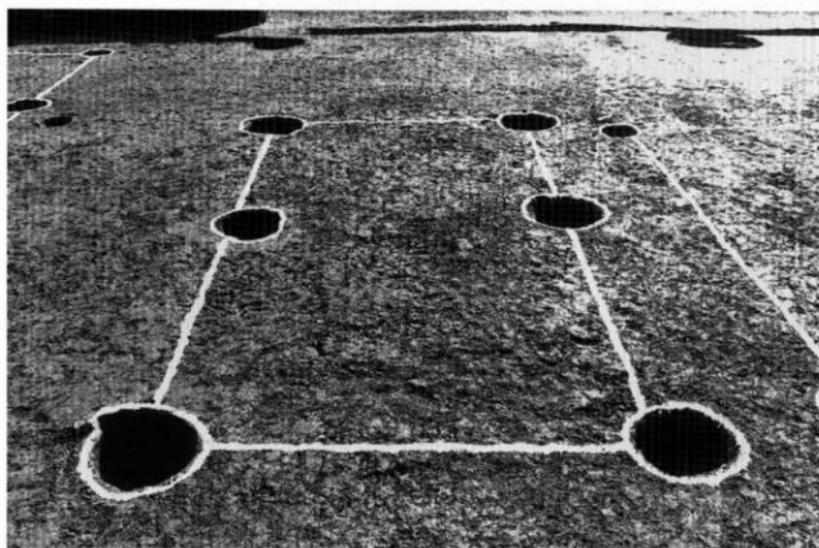


2 SB100 (東から)

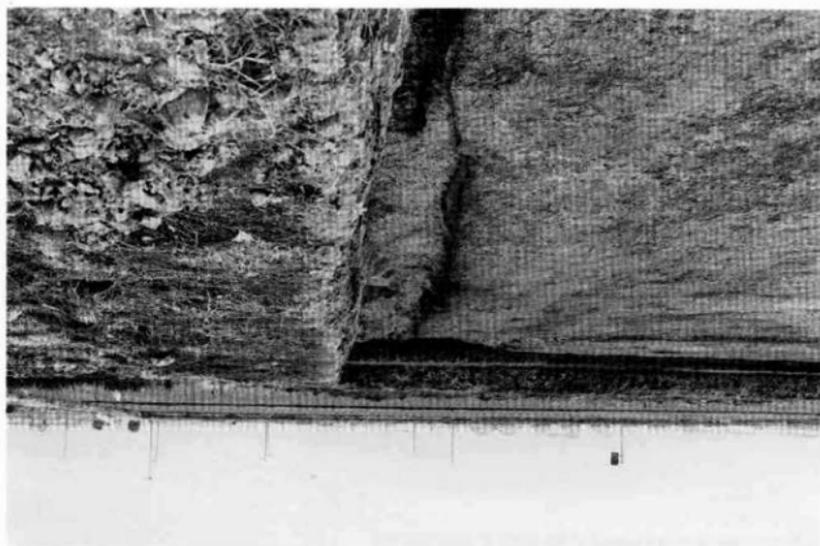
Pl. 3



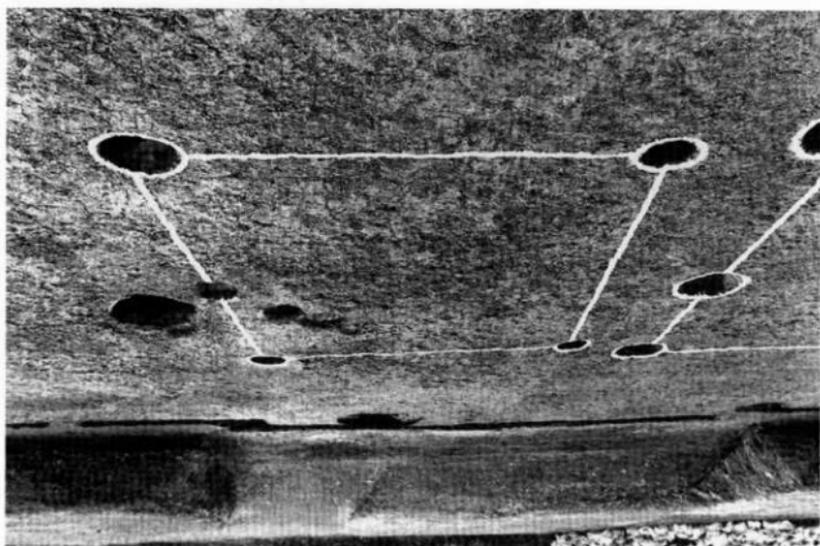
1 SB105 (北から)



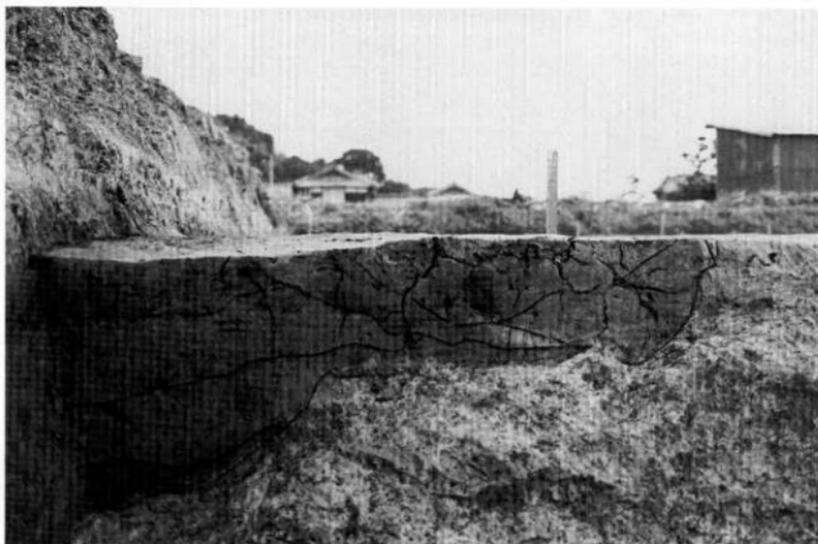
2 SB110 (北から)



1 SB115 (北から)



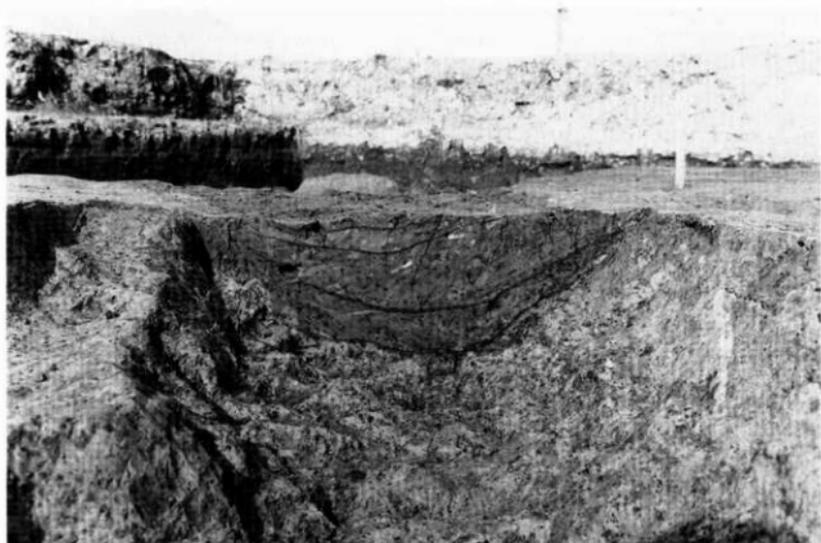
Pl.5



1 SD001 A軸土層断面 (西から)



2 SD005 完掘状況 (南から)



1 SD005 A軸土層断面 (南から)



2 SD005 B軸土層断面 (南から)



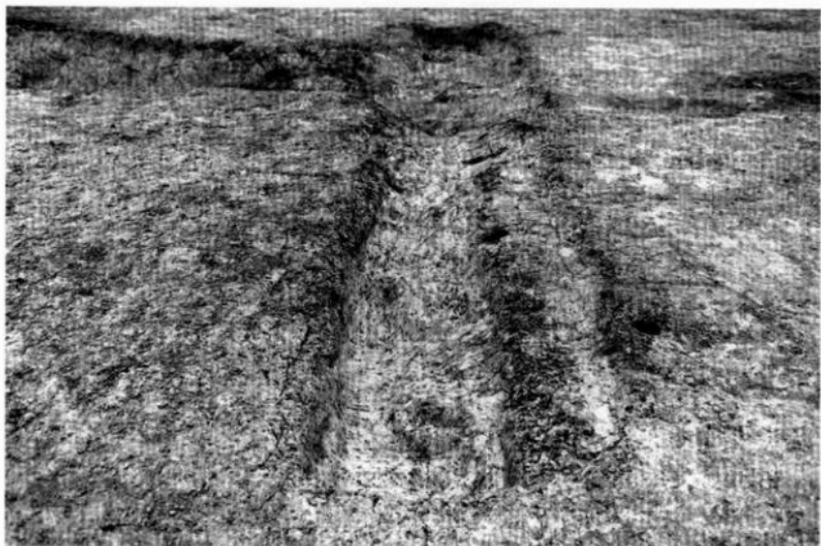
1 SD005 C軸土層断面 (南から)



2 SD005 D軸土層断面 (南から)



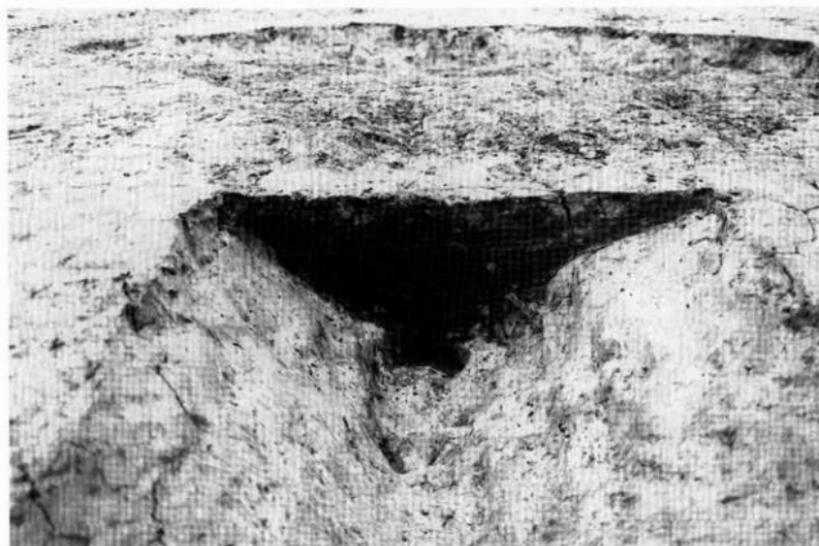
1 SD005 E軸土層断面 (南から)



2 SD020 完掘状況 (東から)



1 SD020 土層断面 (東から)



2 SD022 土層断面 (西から)



1 SD025群 完掘状況 (東から)

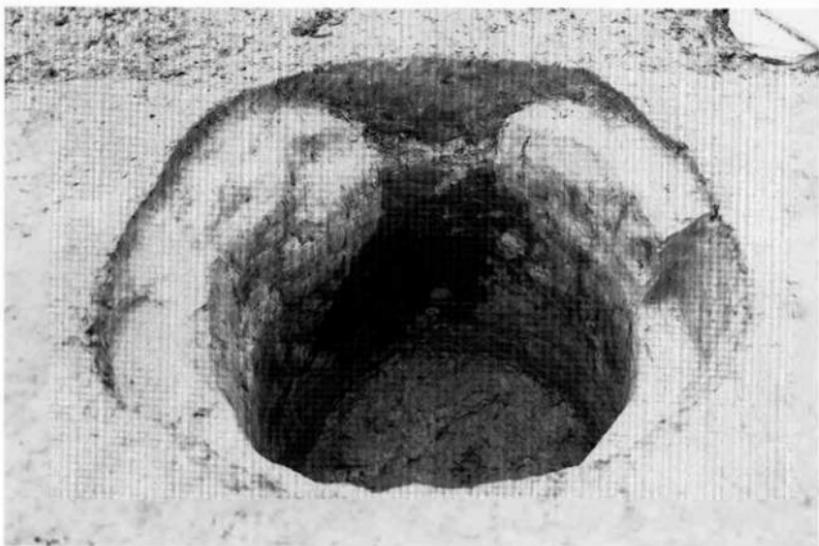


2 SD025・028・029 土層断面 (西から)

Pl.11



1 SD035 土層断面 (東から)



2 SE040 (北から)

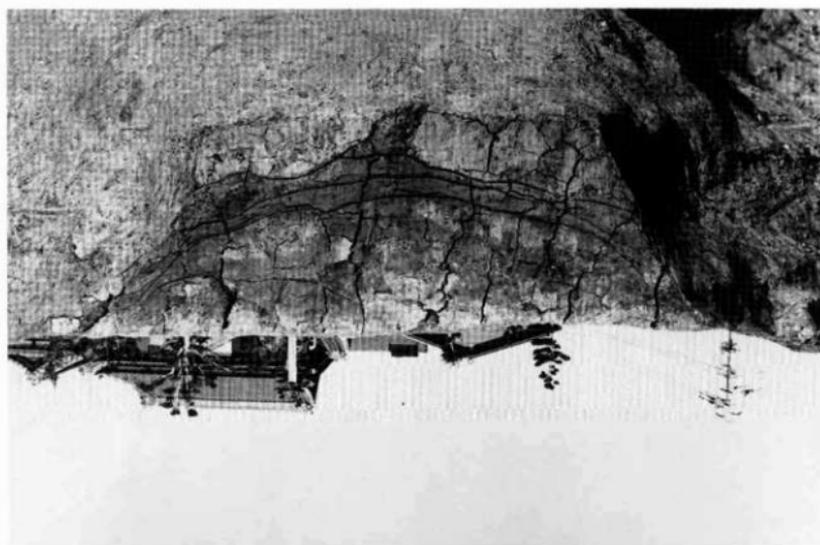


1 SE040 土層断面 (北から)

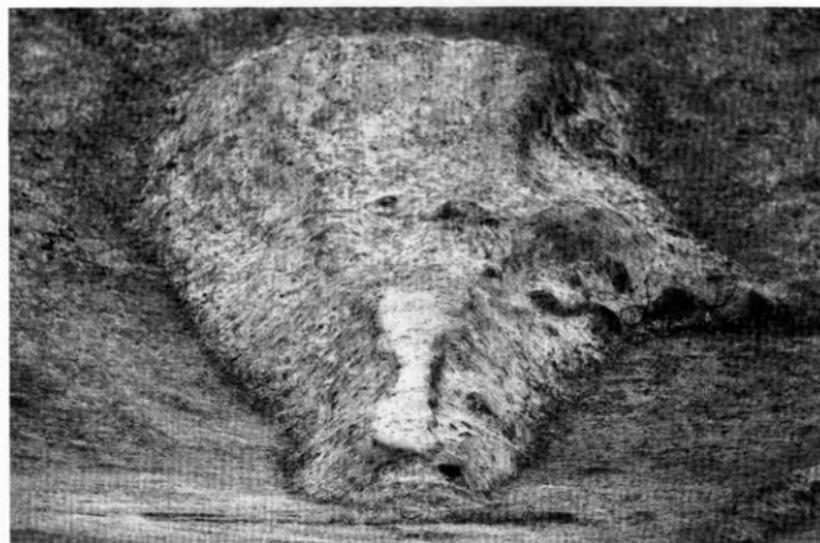


2 SK015・SX016・SD017・020 完掘状況 (上空から・上方が東)

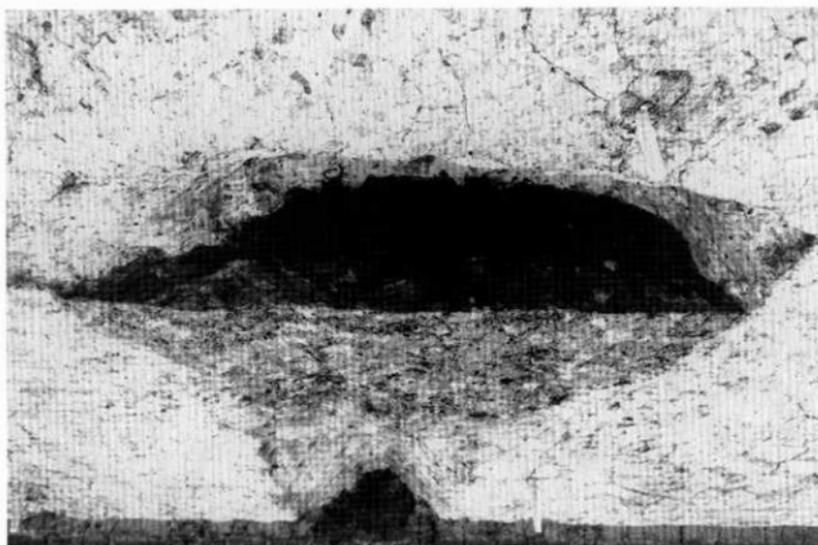
2 SK015 A軸土層断面 (南から)



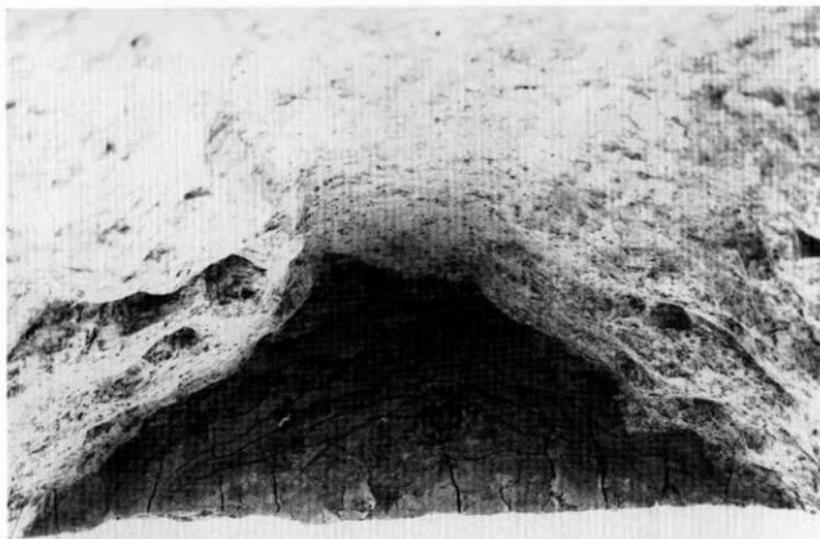
1 SK015 完掘状況 (南から)



2 SK021 土層断面 (東から)

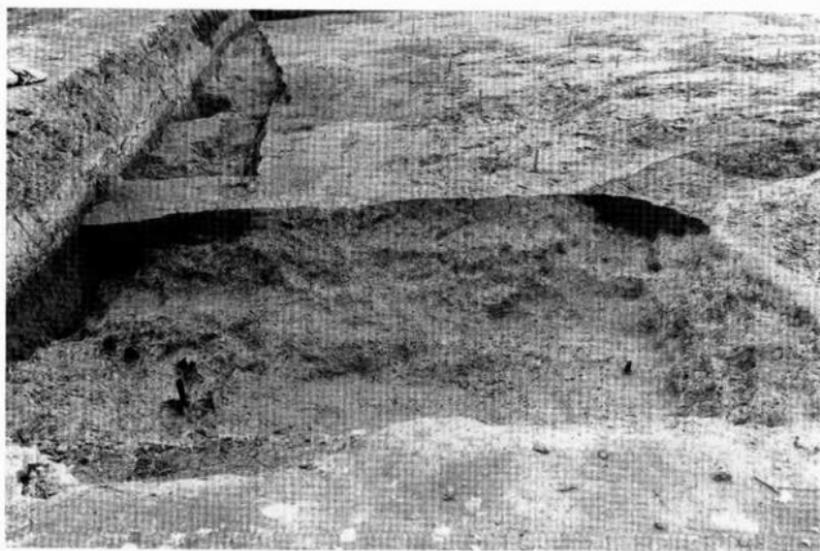


1 SK015 B軸土層断面 (北から)





1 SX010 完掘状況 (北から)



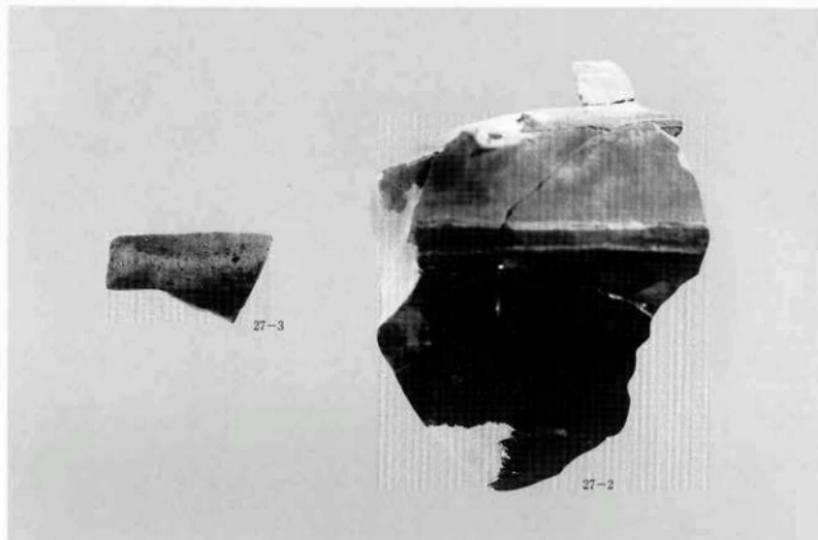
2 SX010 完掘状況 (西から)



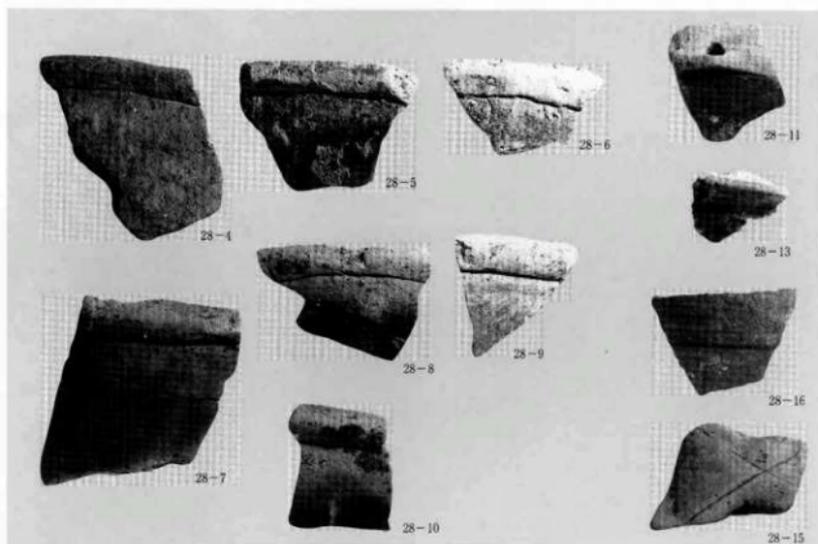
1 SX010 遺物出土状況(骨片) (南東から)



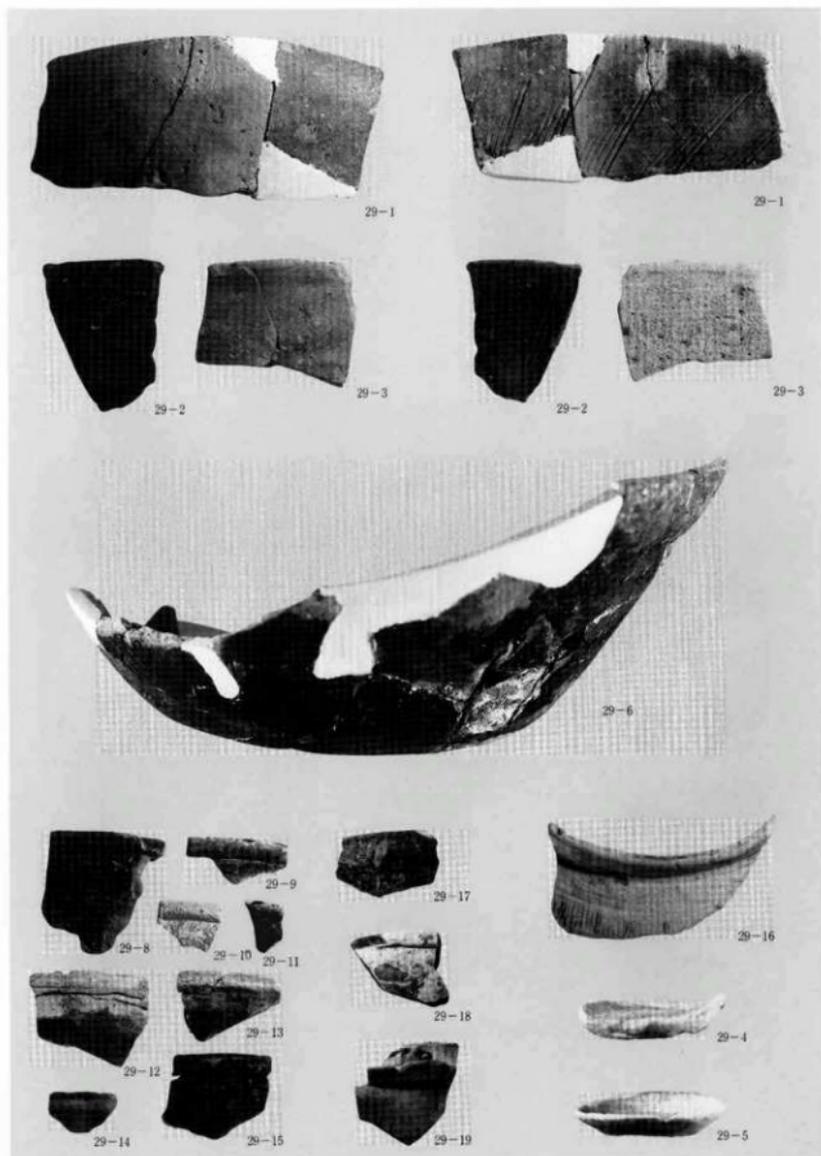
2 SX010 土師器坏出土状況 (南東から)



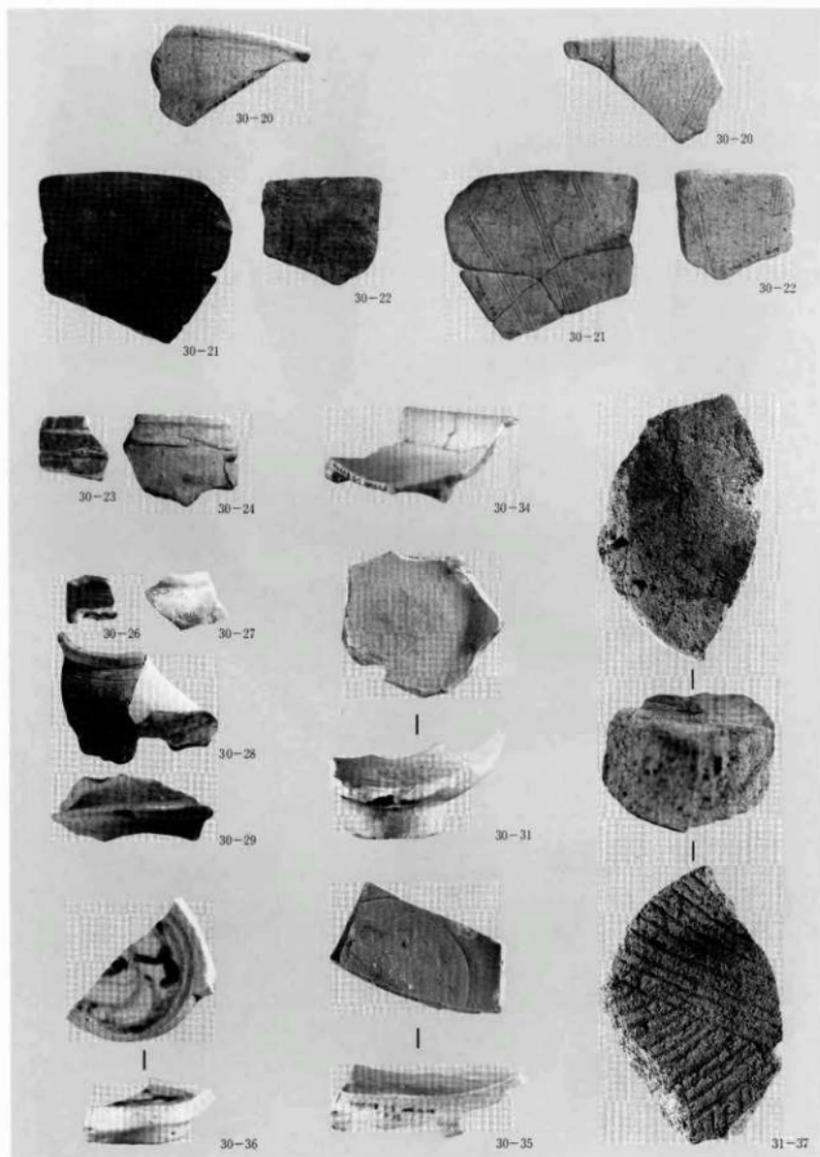
1 掘立柱建物群 出土遺物



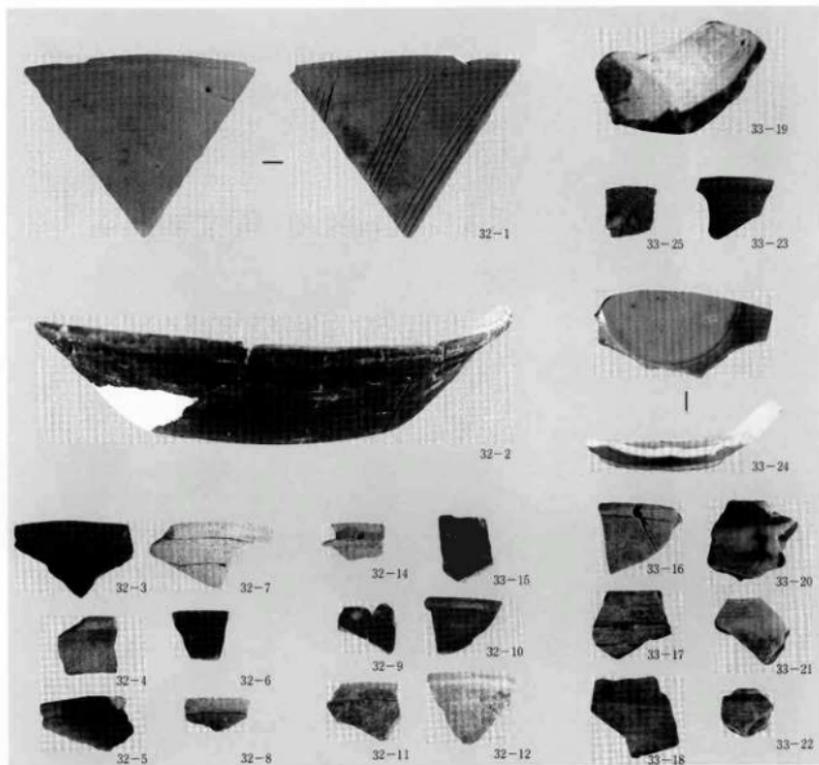
2 SD001 出土遺物



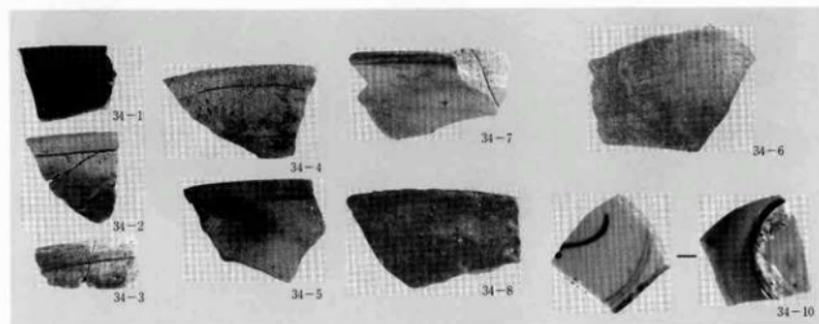
1 SD005D軸以北出土遺物(1)



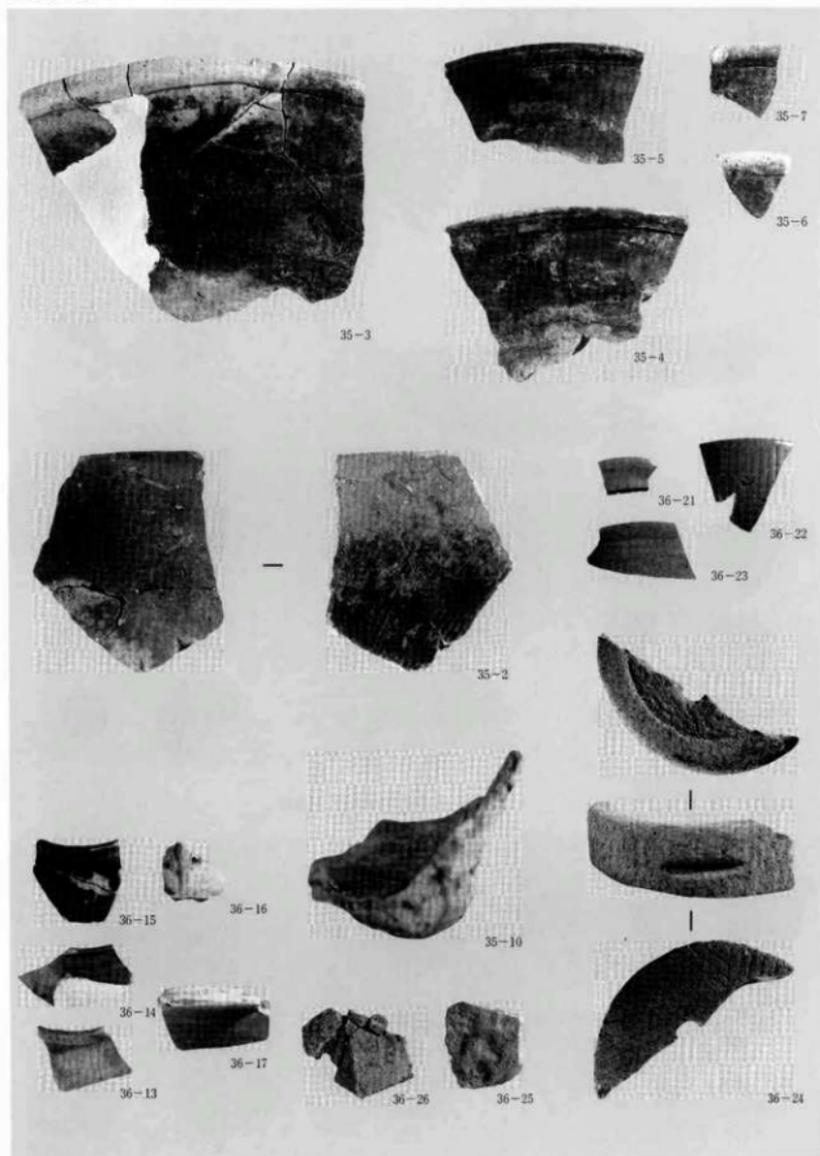
1 SD005D軸以北出土遺物(2)

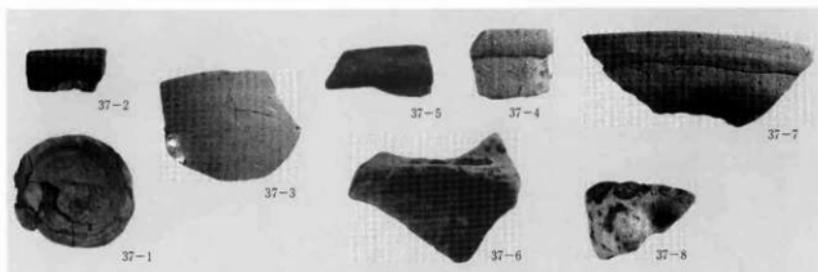


1 SD005D 輪以南出土遺物

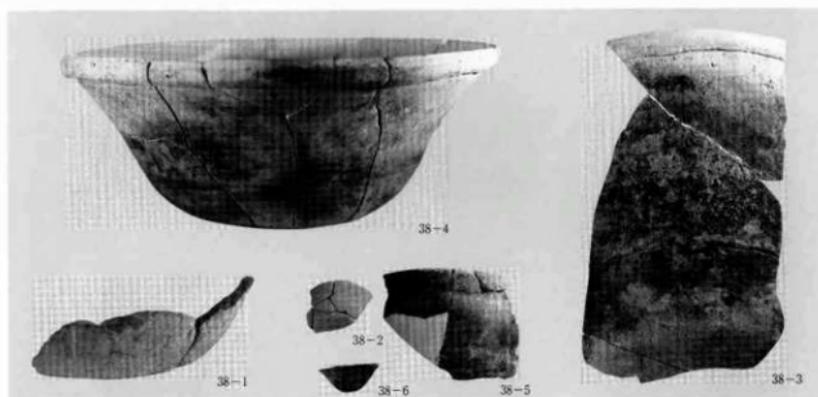


2 SD017.020 出土遺物

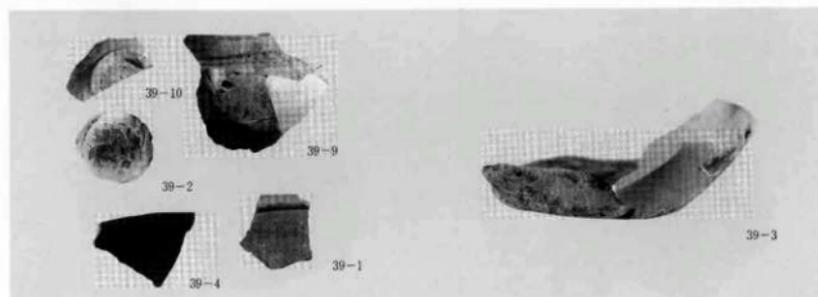




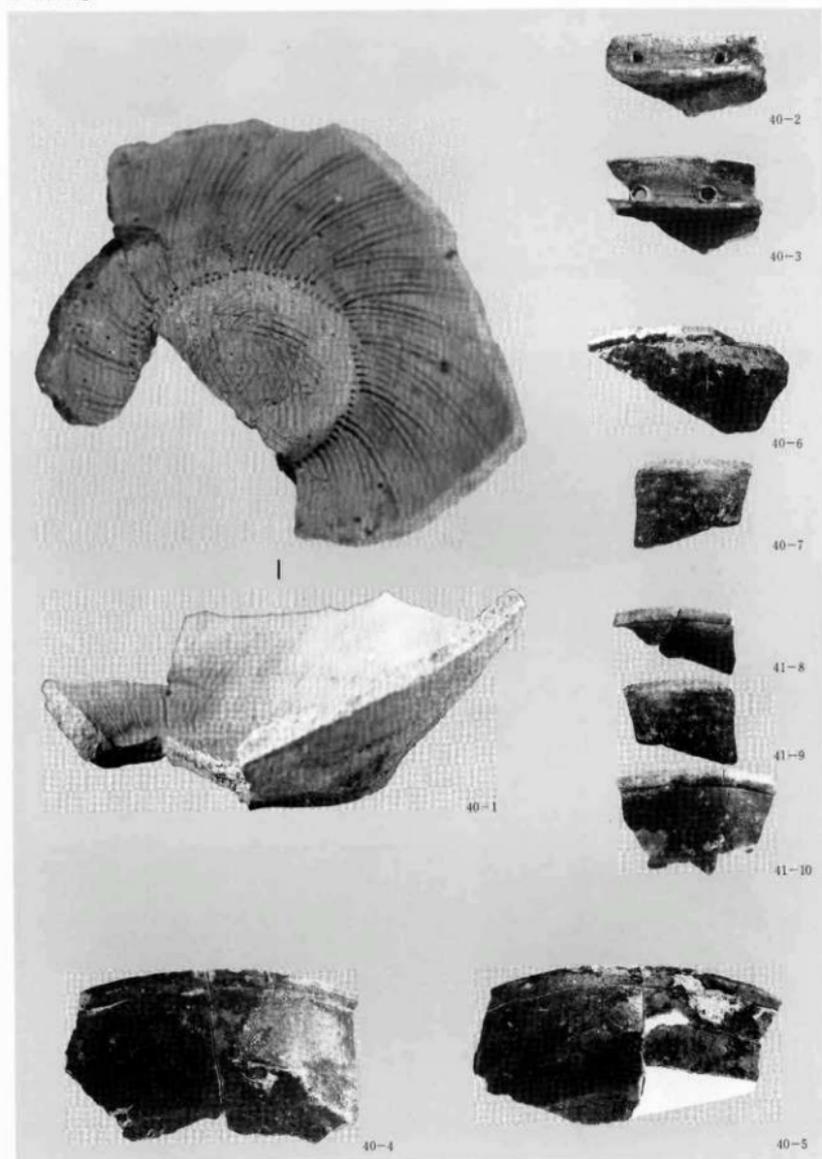
1 SD027·028·030出土遺物



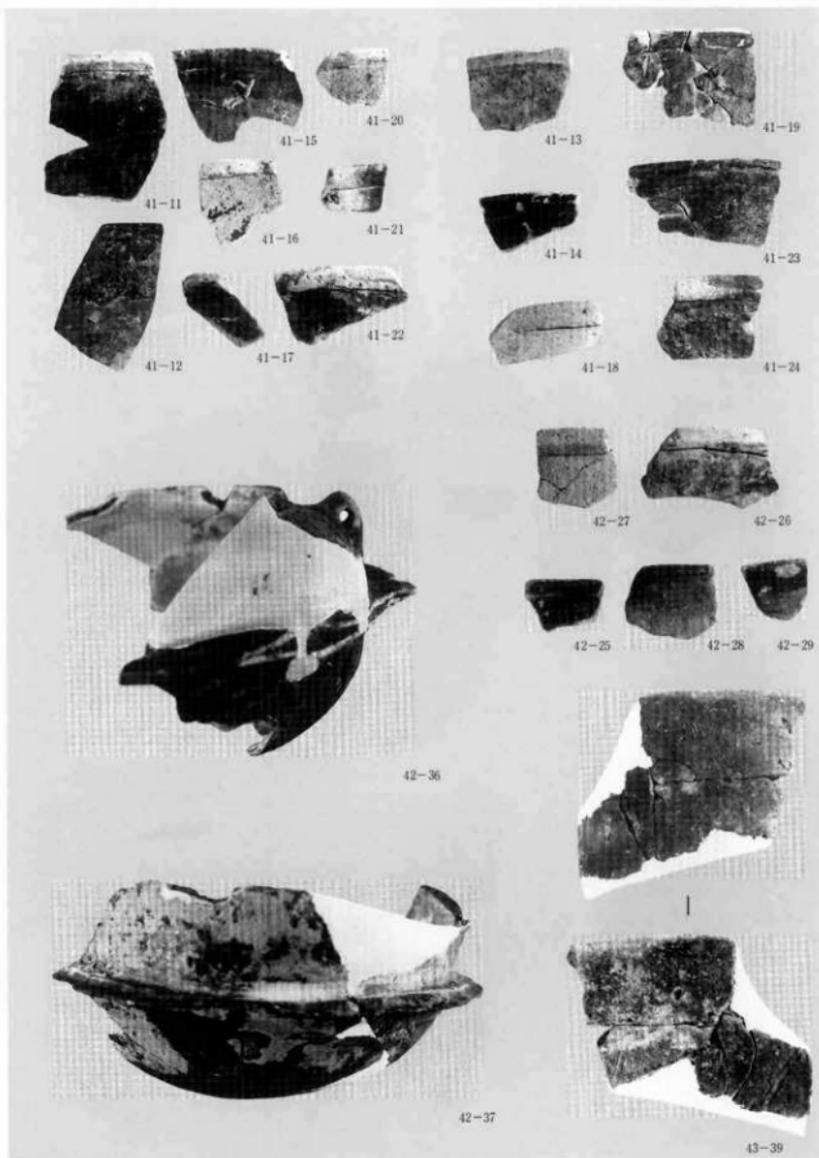
2 SD035出土遺物



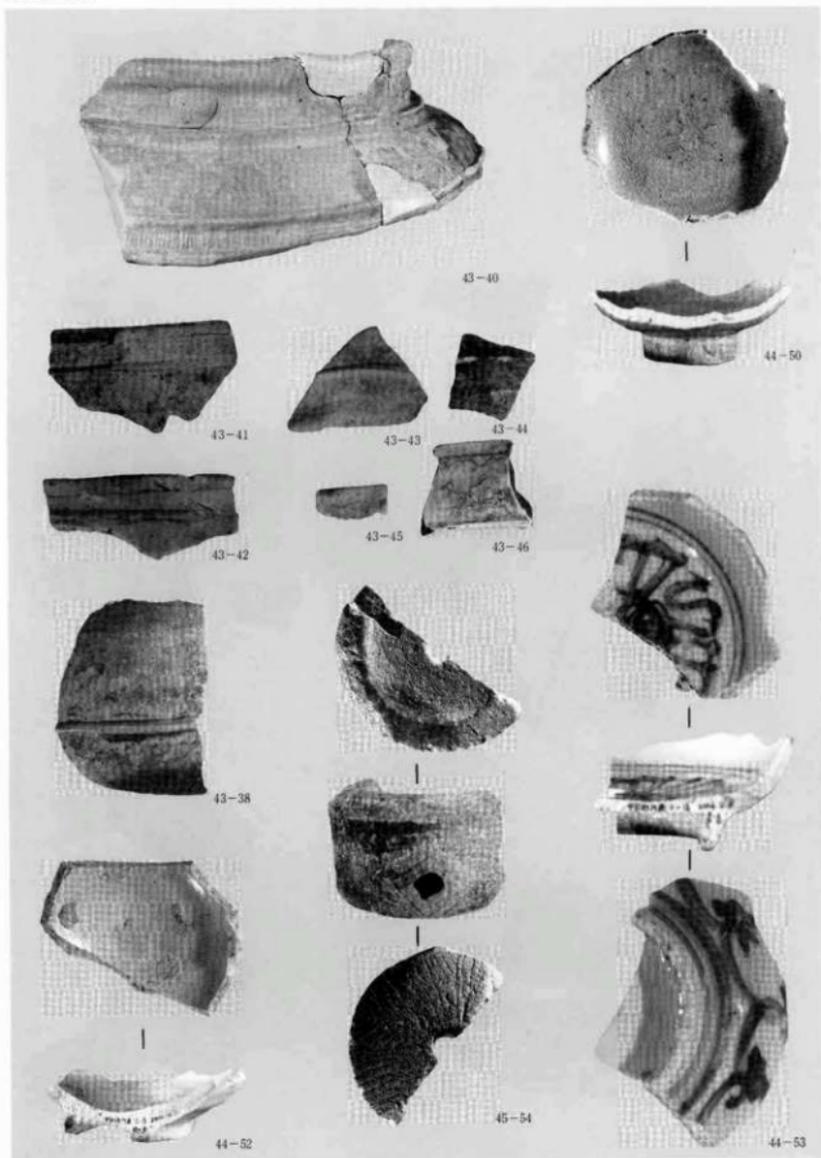
3 SE040出土遺物



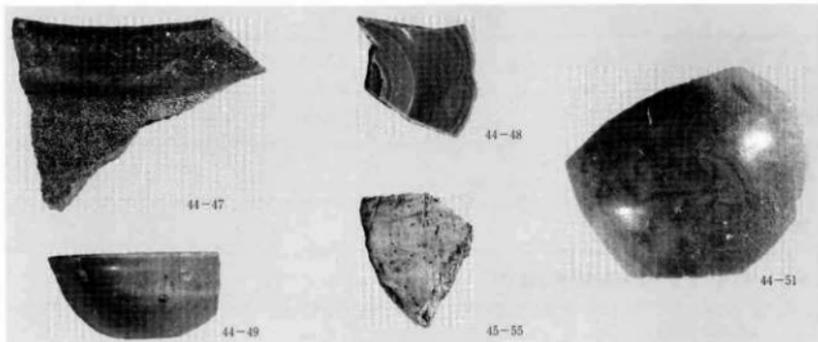
1 SK015出土遺物(1)



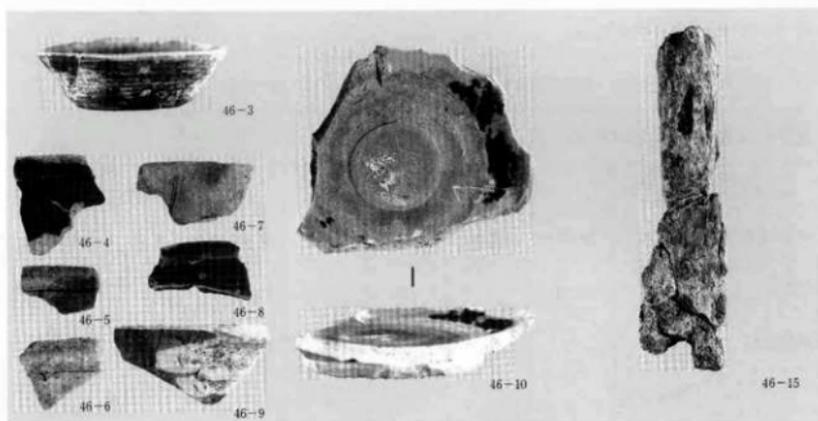
1 SK015 出土遺物 (2)



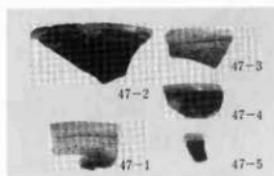
I SK015 出土遺物 (3)



1 SK015出土遺物(4)



2 SX010出土遺物



3 SX016出土遺物

中折地内栗遺跡

筑後市文化財調査報告書 第54集

平成16年3月31日 刊行

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 有限会社 新幸印刷

福岡県三井郡北野町富多121-9

TEL 0942-78-4715



中折地内渠遺跡 全体図 (S=1/100)